910. 2-F67-4
1200500754244

エト2E-82
910.2
F67
4

紙

浦和高等學校教授
藤田德太郎著

民族文學の歷史

續篇

愛國新聞社出版部刊行

序

本書は、私自身の考へと立場から、民族文學の代表的作品を揭げて、その內容の精神を論究したものである。本書は、前に、人物を主とする列傳體の民族文學の歷史を公にしたものとともに完全な內容をなすのであつて、本書の作品と、前書の作家とが相俟つて、わが民族文學の歷史とその歷史の中に流れてゐる一貫した本質とを明かにしてゐるのである。兩書をあはせ見られることを希望したいと思ふ。而して、わが文學の全き姿を理解せられたいと思ふのである。

本書の校正中、米英に對する開戰の大詔が下つた。感激の情が胸を突き、その上、連日の捷報相ついでいたつたため、歡喜と興奮に滿たされて、その業を進めるほどの餘裕さへもなかつた。しかも、今日われわれに與へられてゐる天職が、この道において、國民の精神の昂揚と志氣の鼓舞につとめることにあるを考へ、刻苦して忠實に、このつとめを果して、皇恩の萬一にも應へ奉らなければならぬと固く覺悟したのである。

皇國の前途は洋々たる希望に輝いてゐる。敵夷の慴伏も遠くはない。われらは、わが國に傳統

たる忠烈の精神を堅持して、決死殉國の決意のもとに、醜賊を打倒するまでは、あらゆる艱難に堪へ、いかなる困苦をも排除して、あくまでも戰ひ拔かなければならぬ。

本書の內容が、かういふ現時の目的に添ふことが出來るならば、本書を今日公にした意義もあるのであつて、もとより著者の深く幸とするところである。

昭和十六年十二月

藤田德太郎

903
120

民族文學の歴史　續篇

目次

序說……五
一、古事記……一一
二、日本書紀……二四
三、記紀歌謠……三四
四、風土記……三九
五、祝詞……四八
六、萬葉集……五六
七、神樂歌……八二

八、古今集……九一
九、今昔物語……一〇一
十、大鏡……一一四
十一、吾妻鏡……一二八
十二、平家物語……一三三
十三、平治物語……一四七
十四、梁塵秘抄……一五三
十五、新古今集……一五八
十六、百人一首……一六二
十七、古今著聞集……一六八
十八、蒙古襲來繪詞……一七二
十九、太平記……一七七

二十、增鏡……一九九
廿一、新葉和歌集……二〇三
廿二、義經記……二〇七
廿三、曾我物語……二一二
廿四、お伽草子……二一七
廿五、忠臣藏……二二一
廿六、明倫歌集……二二六
廿七、殉難草……二三〇
廿八、心學道話……二三五
廿九、佳人の奇遇……二四〇
三十、岡倉天心の三部作……二四四

—(終)—

民族文學の歴史　前篇

（民族文學者とその精神及び作品）

主要目次

一、天皇の御文學　一、明治天皇の御文學　一、日本武尊　一、柿本人麿　一、山上憶良　一、山部赤人　一、大伴家持　一、菅原道眞　一、在原業平　一、紀貫之　一、紫式部　一、清少納言　一、西行　一、源實朝　一、藤原家隆　一、日蓮　一、宗良親王　一、北畠親房　一、吉田兼好　一、世阿彌元清　一、宗祇　一、芭蕉　一、近松文左衛門　一、井原西鶴　一、契沖　一、加茂眞淵　一、本居宣長　一、上田秋成　一、蕪村　一、瀧澤馬琴　一、平賀元義　一、新井白石　一、賴山陽　一、佐久良東雄　一、伴林光平　一、平野國臣　一、野村望東尼　一、橘曙覽　一、香川景樹　一、河竹默阿彌　一、落合直文　一、正岡子規　一、大和田建樹　一、芳賀矢一　一、森鷗外　一、慈鎭

附錄年表

民族文學の歴史　續篇

藤田德太郎

序說

民族文學、或は、國民文學と云ふことばは、その內容を、嚴密に區別することは困難である。強ひて云へば、後者よりも前者の方が、純粹で、その代り、その範圍も狹いといふ感じがする。併し、いづれにしても、わが日本國民が所有し、わが大和民族が生んだ文學であると云ふ意味においては、共通した點を持つてゐる。

わが國の民族文學において、著しい特色は、作者が不明な作品の多いといふことである。それは單に、古い時代において、さうであるばかりでなく、可成り後の時代に下つても、さうした作

品が種々出てゐる。さうして、そのやうな作品こそ、わが民族の間に自然に生れ出でて、民族全體の所有であり、民族に共通した感情のもとに生きてゐるといふ心持のする文學である。

作者の明かでない作品が、わが國の文學に多いといふことは、わが國においては、特に作者の個性に生きるといふよりも、むしろ、民族の共感に生きるといふ心持の方が強く、これがわが國の文學の主流となつてゐるからである。それは又時として、その時代を代表する作家や、時代の心を汲みとることにおいて最も鋭い人々によつて取り上げられ、それらの人々の手によつて成つた作品のやうに考へられるものもあるが、併し、實はその作品の成り立ちを考へて見ると、わが民族の心の中に成長してゐたものが、その時代の波の中に明瞭な姿を現して、これがその人々の手によつて取り上げられ、たまたま、その詩人、文人の名と結びつけられる運命を持つやうになつた作品もないではないが、文學の性質としては、廣く、民族の情感の間に生きてゐた民族文學に他ならぬものであつた。かういふ文學が、わが國の文學の歴史の、重要な流を形づくつてゐるのである。

つまり、作家の名は、民族の代表者であるが、作品そのものは、民族全體の所有であつたのである。かういふのが、わが國の文學の本質であつたといふことが出來る。

文學は、はじめわが國民の文字も知らぬ、低い層のすべての人々にいたるまで、これを聞き、これに感じ、これを興じ、みづからその創作に參加することの出來る機會をさへ與へてゐたのである。民族の心を動かすやうな理想と希望に滿ちた物語、國家の興亡の運命に關するやうな崇高雄大な物語、その間を彩る美しく優しい物語、かういふもろもろの物語や詩や歌が、心の底に流れて、口をついて出づるとき、それがわが國の文學の源となつてゐるとともに、またこれらの文學が幾たびも、多くの人の口から耳へ、耳から口へと流れ行き、傳へ去られるうちには、最も美しい表現を完成して、文學の出來上つた姿をも自然に備へて來るやうにもなるのである。それはたゞ、人々の口から耳へだけではなく、書物を通して見ても、一どはやはり、この眼で讀んで頭で理解せられるものを、口から耳への直接で純粋な理解に還元せずには居られなかつたのである。そのことは、太平記が、太平記讀といふ講談師の原始的な性質のものの存在によつて、街頭から世の中にひろめられ、世道人心を裨益するのに效果があつた事實と考へ合せて見ても明かである。古くは、わが國の神典たるべき古事記を例にあげるは畏し、平家物語などから、近くは忠

臣藏のごときものまでも、わが國民の間に最も廣く知られてゐるものの性質は、大方このやうにして普く國民の間に生成して行つたものであるといふことが出來る。それゆゑにこそ、民族文學としての本質を、それらが持つてゐるのであると、敢へて云ふことの出來る理由があるのである。

ここで一番大切なことは、國民は、文學を樂しみ味ふものであつたと同時に、又、文學を創作する一人でもあつたといふことである。さうでなければ、文學がすべての國民によつて、又、長い時代を經て、かくも力强く支持せられるほどの共感を持たれるはずはないのである。曲亭馬琴の文學は既に昔日の文學であらう。併し、平家物語は、なほ今日も生きる文學であり、生かされることの出來る文學である。曲亭馬琴の文學は、馬琴一個の頭腦から出たものに過ぎない。併し平家物語は、長い國民の精神生活が生み出した文學である。眞實の意味の民族文學である。

かうした文學の在り方は、今日では、わづかに和歌とか俳句とかいふ短詩形に見られるに過ぎない。併し以前では決してさうではなく、和歌俳句は勿論であるが、演劇物語小說のすべての文學の種類にわたつて、かういふ方法で、わが國の文學は存在してゐたのである。云はばわが國の文學の全部が、民族文學的な存在をしてゐたのであり、從つてまた、わが國の文學の本質がそこにあつたといふことが出來る。これは、民族全體が一團となつて文學を味ひ樂しみ、文學の創作にも參加するといふ態度であつた。然るに、明治以後、歐米の個人的な文學論の立場が、すべてかういふ方法を破壞して、連俳といふ集團的な日本的文學創作の方法を否定したり、歌舞伎劇に見られた演劇の觀衆と出演者とが一致する雰圍氣がなくなつたりしたのである。さうして、かういふ傾向のわづかに殘つてゐる短歌や俳句のごとき詩の世界でも、やはりさういふ日本的な文學創作や享受の方法は大分變化して來たやうに思はれる。併し、世界でも、文化の進んだ國々において、かういふすぐれた文學の性質を持つてゐるものは、現在なほわが國において見られるのみではないかと思はれる。わが國の文學の傳統の長く遠くして、しかもかういふ民族文學の享受と創作の方法を、今日なほ可能としてゐるところに、力强い民族の一致を示してゐるものがある。

われわれ、國民の間に長く傳へられて來た、無名氏の文學、乃至は、ある作者の名にかけてあつても、その作品が、民族の共感の中から湧き出でて、たまたまその共感の先頭に立ち、或は民族の心に普く流れるものをつかんで立ち上つたものであるから、そこに觸れるところの心や、取

り扱はれてゐるところの題材やは、既に民族共通の所有のものとなつてゐるやうな作品、かやうな文學を、ここに集めて、それぞれの持つ本質を明かに示さうとするのである。

さうして、われわれはそこに、むしろ文學以上の文學、又世界文學に比類の少い文學、わが國の民族の魂につながるがゆゑに最も價値のある文學、民族性の反影として、獨特の長所を發揮してゐる文學、それゆゑに、又世界の文學が、これによつて學ぶべき特色を幾多包藏してゐる文學、さういふ作品を、この中に見出すことが出來るであらう。このやうにして、民族の創造力と、建設的意欲とに滿ちた文學が、これであると云ふことも出來る。われわれは、これらの文學によつて、民族文學の本質について學ぶところがあることを思ひ、今日以後の、眞實のわが民族的な新しい文學の生誕にも考へるところがありたいと願ふのである。

一、古事記

わが民族の故郷はどこであらうか。此の問題は、常に心ある者の胸中によみがへつて、懷ひを遠く遙な太古に馳せるのである。それは感受性に富んだ少年が、月の夜空を眺めて宇宙の神秘に思ひ耽るのと同じ、不思議な驚きを與へて新鮮な魂の衝動を受ける。そこから淨化せられた精神を以て、偉大なる發展へと向ふことも出來るのである。故郷を持たないものは發展性がない。それと同時に強い懷郷の情は常に國民の發展の原動力となり得る。わが國が大きい飛躍を遂げる時には、必ず此の故郷を懷ふ情が、力强く胸によみがへつて來る。

古事記や日本書紀が撰定せられたのも、やはりさういふ國家が發展興隆する時代において、同じ要求のもとに、これが完成を見るにいたつたのである。これと殆ど時を同じうして、風土記の

編纂が諸國に命ぜられ、又大寶律令を改訂した養老律令も亦撰定せられたのである。わが國の文化發展は續々として、これらの偉大なる收獲をもたらした。それは、國家の隆昌が、國民の活潑なる精神の働きを促して、魂の據り所となる故郷を求めたからである。故郷を懷ふ憧憬の情が、文學の生れ出でる根強い地盤である。そこから歴史や地理の書も現れて來た。しかも上古においては、歴史とか地理とかいふのが、文學と判然と分たれてはゐなかつた。藝術と學術とは截然たる區劃が設けられてはゐなかつた。すべてが混沌未分の中にあつて、一つのものになつてゐた。併し、そこに、將來種々のものを生み出さうとする力強い希望が含められてゐたのである。分化は次第に煩雑と末梢との傾向に墮落して來る。

上代文化の混沌たる原始性は、むしろ將來の發展に對しての洋々たる希望に滿ちた創造力を備へてゐるものである。それは、日本書紀の冒頭にも、支那の三五略紀や禮記月令正義に記す所の言葉を用ひて、巧に云ひ現してゐるやうに「渾沌たること鷄子のごとく」であつて、卵が生物を生み出す精氣を、此の渾沌の世界の中に藏してゐることを示すのである。

かくて、萬物を胚胎する渾沌の世界の中に上代の生成發展の創造を、その故郷と結びつけて、高天原に求めたのである。高天原こそは、われ〳〵の心のふるさとであり、又肉體の故郷でもあつた。

高天原は歴史的にも解釋せられるし、又、宗教的藝術的にも解釋せられる。又その歴史的解釋には政治性を帶びた解釋もある。かくて、これを北方に求め、南方に求め、わが日本の將來の發展の據點を定めるために、遠い故郷に歸る思ひで、高天原に民族の本源を置くのである。さうして、そこに政治的意義の認められることは勿論である。

併し又、高天原は文字通りに廣濶たる青天を意味し、あの輝く太陽と透明なる青空に、故郷を求めて、萬物を光被し、地球を覆ひ包むところに、懷郷の情を滿たすとともに、悠久たる永遠の發展的理想を含めて、いと高き所に憧憬の情を寄せるものは、實にわが民族の持つ宗教的信念であり、藝術的情熱であつた。此所に、わが民族の文學が生れ出でるのである。

それ故に、古事記は、崇嚴なる天孫降臨の御有樣を描いて

故爾に、天津日子番能邇邇藝命に詔りごちて、天の石位を離ち、天の八重棚雲を押し分けて、稜威の道別に道別て、天の浮橋にうきじまり、そり立たして、筑紫の日向の高千穗の槵觸嶽に

天降（あまくだ）り坐（ま）しき。

と壯重な表現をなしてゐる。此の同じ表現は、日本書紀にも

時に高皇産靈尊（たかみむすびのみこと）、眞床追ふ衾（まとこおふふすま）を以て皇孫（すめみま）天津彦々火瓊々杵尊を覆ひて天降りまさしめたまふ。

皇孫乃ち天の磐座を離ち、天の八重雲を押分けて、稜威の道別に道別きて、日向の襲（そ）の高千穗の峰に天降ります。

と見え、又その一書にも同じ表現が見られるのであつて、その他祝詞などにも此の表現を見出すことが出來、一般に上代において、天孫降臨を叙しまつるときの、民族的に生成洗煉せられた語部（かたりべ）の表現だつたのである。

さうして、此所に示された宗教的、藝術的表現は、實に天の八重雲を押し分けて、威風堂々と下界に天降ります天孫、及びこれに隨順しまつる神々の姿である。實に高天原は空高き所にあつた。

われわれは天空の彼方に、祖先の故郷を求めて、燃えるやうなあこがれの視線を放つた、上代の人々の逞しい姿を思ひ浮べ、その明朗快活な心を思ひやる時、現代においても、民族の魂は、

此（こ）古事記の表現をそのまゝに受け入れることによつて、同じ故郷へと歸つて行くことが出來、そこに祖先の靈に歸一する道を見出すのである。古事記の持つ宗教性と藝術性との價値は此所に存する。古事記の民族文學としての意義も先づ此の點から發足する。

二

古事記について、われらは特に注意すべき點三箇條を數へる。

第一には、古事記の撰定が　天武天皇の大御心より出でてゐる事である。わが國家の來由を敎へる此聖典が　天皇の思召によつて、はじめて存在を示すに至つたといふことは、ひとりその尊貴、神聖なる所以を明かにするばかりでなく、最も民族的な存在理由を有する所以でもある。

第二には、その內容についてであるが、これに就いては、古事記の序文に　天武天皇の御言葉を傳へていふ「斯（これ）すなはち邦家の經緯王化の鴻基なり。故惟（かれおもんる）るに、帝紀を撰錄し、舊辭を討覈し、僞を削り實を定めて、後葉に流（つた）へんとすとのたまふ。」即ち、古事記は、從來傳へられて來たもの

の中には「正實に違ひ多く虚僞を加へ」たところがあるので、その虚僞を削り去つて、正實なる史傳のみを取り用ひ給ひ、確なる標準を定められて、以て「邦家の經緯、王化の鴻基」とせられることを目的とあそばされた書である。「邦家の經緯、王化の鴻基」といふ壯大なる御言葉は、古事記に對して、一段と權威を加へるのであつて、即ち、これはわが國を經理してゆく上のあらゆる部門の根本となり、德化を及ぼされる上の基礎となるものであり、國體の淵源が此所に示されるのみならず、いついかなる時の施政に當つても、現實的意義を持つ勢力が、そこに發揮せられることを期待すべき書である。それは遠く上古において然るのみならず、悠久たる歳月を通じて、常にわが國家を指導してゆく基準を與へるのが古事記の本質である。かくてこそ古事記は、わが民族的古典として不滅の價値を有するものであるが、それは又實に「僞を削り實を定め」られた内容に存する。それとともに、此所でも、國家の根本的聖典として「後葉に流へ」ようと仰せられた　天武天皇の御言葉によつて、その動きなき位置の定められてゐることを知らなければならない。かくて、古事記を子々孫々に傳へて、國家の軌範とすべき事は　天武天皇の勅旨によつて永く定められたところである。眞實の古典とは、かゝる權威と實質とを有するものにして、初めてその名に値するのである。

第三に、古事記の表現について重要な意義が認められる。古事記は以上のごとき　天武天皇の大御心を體してわが民族、わが國家の歴史を、世の始まりより述べて來たものであるが、それは元來一つの書物として書き記されたのではなく、書物の代りに、稗田阿禮といふ天才に命じ給ひ、その全部を誦み習はしめられたのであつた。

わが國では、早くより漢字を知つてゐたが、漢字によつて、古事記の表現を書き現すことのいかに困難であつたかは、古事記を筆錄した太安麻呂のつぶさに訴へてゐる事である。それ故、その初に當つては　天皇は漢字によつて書き記さしめ給ふことなく、阿禮をして暗誦せしめ給うたのであつた。

それは、全く古代の傳誦の表現に忠實であらうとせられた大御心に出でてゐるのであつて、古事記の表現そのものの中に、わが民族の原始の魂が直接に籠められてゐることを忘れてはならない。一語一句も苟くもすべからざる嚴肅なる表現を、此の古典は備へてゐるのである。此の表現は、たうてい漢字を以ては、十分には書き現すことの出來ない性質のものであつたが、後　元明

天皇の詔によつて、太安麻呂は阿禮の誦習するところを、非常な苦心を費して筆錄した。しかも出來上つた古事記の漢字の書き現し方といふものは不完全なところがあつて、その古代の傳誦の表現のまゝに、われ〳〵に覺らしめるには、十分でないのである。

稗田阿禮をして誦習せしめ給うたのは、古事記の含む物語に、甚だ神聖なる生命を賦與しようとせられたためで、それは文字を以て表記するとき、既にその生命は脱落してしまふおそれがあつたからである。言語を以て口づから語られる時、脈々たる生命の感が耳朶を打つて、直接に胸奥に浸み通り魂を搖り動かす。これが即ち言靈の働きである。古事記の內容をなす物語のごときは、まさに此の言靈の聖なる作用によつて、傳へ保たれて行く必要があつた。

しかも時代が下つて、次第に文字の效用が靈妙なる言靈の作用を侵蝕しはじめるに從ひ、それは漸く文字で書き記されて、一部の成書として傳へ行かれる必要が生じて來たのである。此所において、元明天皇の思召のもとに、太安麻呂の努力が、年老いた稗田阿禮の天才に協力して、古事記といふ典籍を完成させるに至つた。時に和銅五年、二十八歲で　天武天皇の御言葉を受け、誦習の事に從つた阿禮は、約三十年を經過した後において、此の大任を果すことが出來たのである。

安麻呂が詔詞を頂いてより撰進するまでには約四箇月を經過した。この時日は、いかにも速いと云はなければならないが、それは既に早く古事記全體が成り立つてゐて、太安麻呂の苦心は、主として漢字を使用しての表記の方法にかかつてゐたが故である。此の宣下と撰進との關係は、後の和歌の勅撰集におけると同じで、まさに、古事記は徹頭徹尾勅撰の書であり、欽定の典籍の最も古きものとすべきであつた。

かくて、漢字に移されたとは云へ、遙に久しい遠祖の物語を、そのまゝに傳へて、言靈の奇しき働きと、大和言葉としての表現の中に出來るだけ忠實に寫し出さうとする努力のはらはれてゐる所に、古事記が貴重なる價値を湛へてゐる、一つの理由が存するのである。

三

古事記の中心をなすものは、帝紀、即ち帝皇の日繼ぎであり、これに加ふるに先代の舊辭を以てせられた。帝皇の日繼ぎとは、御歷代の皇位繼承の次第を申すのであり、先代の舊辭とは、古

い時代の昔話である。即ち、御歴代の皇位を受け傳へて行かれた御事蹟を中心として、これに他の種々の古代の説話が加へられたものであつて、古事記の最も重大なる問題は、皇室の御系譜にある。　天智天皇が「僞を削り、實を定め」ようと思召し立たれたのも、事が斯くの如く重大であるが故で、しかも古事記の尊嚴と權威も亦此の點にかゝつてゐるのでなければならぬ。

かくて、古事記は、皇室の御系譜が中心となり、それは皇統の連綿として榮えます聖蹟を、如實にわれらの前に示すのである。それ故、一見しては、神々の御名、皇子の御名を多く掲げまつつて、興味の深い説話に觸れてゐないかのごとく見える所に、實は古事記の主眼點があるのであり、そこに甚深の意義の含められてゐることを知らなければならない。

さうして、此の御系譜の間を點綴するものが先代の舊辭たるもろもろの説話である。古事記に文藝的色彩を施すものは、此の部分の興味深い內容であらう。併し、なほ古事記の文藝的意義は、その表現の方面に認められ、一見わづらはしく思はれるほどに、多くの御名前を語り申上げてゐる中に、上古の言葉の音調の美しさと、それぞれの言葉の持つ陰影に富んだ內容とを見出さなければ、古事記の味はひを知ることは殆ど不可能であらう。

例へば、伊邪那岐命と伊邪那美命との國生みをします條に、「次に、伊豫の二名の島を生み給ひき。此の島は身一つにして面四つあり。面ごとに名あり。故伊豫の國を愛比賣と謂ひ、讃岐の國を飯依比古と謂ひ、粟の國を大宜都比賣と謂ひ、土佐の國を建依別と謂ふ」以下多くの島々の名があげられてゐるのは、流麗な表現の美しさのみならず、わが日本の國々の創造として、それぞれの名には天賦の意義が存するのである。四國を守ります四神は女神、男神二柱づゝで、粟の豐な國の女神は、食物の意味の宜都を以て名とせられ、隣國の飯依比古といふやはり穀物の豐かな御名の男神と配せられてゐる。伊豫の愛比賣といふ美しい名の女神は、まさに男性的な勇武を以て名とせられた土佐の建依比古と配せらるべきで、しかもそれぞれの名は、その國の國から、土地の人の人がらをも髣髴させるところがあるやうである。

かやうに一々を解明してくれば、むしろ古事記の持つ神秘的な力や美しさを、傷つけ損じることにもなるのであつて、むしろ此の全體が、朗々誦せられて、口より耳へ響く時の直觀によつて直接に體驗せられる所に、古事記の本質が把握せられるべきである。

皇室の御系譜を中心とする古事記は、もとより、その御系統の初を、悠久たる年月のかなたに

おいてゐるのであつて、そこに無限の感が滿たされ湛へられてゐる。その神代の內容は高天原の神々が出雲の神々を歸屬せしめ給ふ物語を、最も重大なる事件とするが、此所においても、皇室の御遠祖なる高天原の神々の御系統を明かにすることが中心となつてゐるが、又一方においては、出雲の神々についても詳細に物語り、かくて印象の深められ强められた出雲の神々が、高天原に歸伏してゆく徑路は最も高潮に達した場面を展開するのである。

さうして、此所に、高天原より降臨まします瓊瓊杵尊の御子孫の永久に發展を遂げさせ給ふ最初のそれだけに最も重大な經綸の御業績を示し給うてゐるのである。實に、此の神代の此の物語こそは　天皇の御稜威によりわが日本が偉大なる發展を遂げるべき豫言であり象徴であつた。

われらは、高天原よりの使者を懷柔しようとする出雲の神々の術中に陷つて、高天原を裏切り天刑の處罰を受けて死した天若日子や、或は、高天原に反抗する出雲の神々を實力によつて降伏せしめ、「我を勿殺し給ひそ」と哀願させるに至つた建御雷神や、かくて、遂に出雲方の主神大國主神に對し「汝が子等、事代主神、建御名方神二神は、天つ神の御子の命のまにまに違はじと白しね。故汝が心奈何ぞ」と尋ねられた時、「僕が子等二神の白せるまにまに、僕も違はじ。此の葦原中國は、命のまにまに既に獻らん」と奏上してゐる大國主神の姿に、日本が常に直面する現實のさま〴〵の事態を思ひ浮べるのである。さうして、天の八重棚雲を搔きわけつゝ堂々と降臨ましました天孫の御姿を思ひ奉るのである。此所に古事記の不思議に生きた力を感得することが出來る。

かくて　神武天皇の御代となり、皇室の御榮を拜するとともに微動もしない日本の發展の基礎が既に固く築かれてゐる事を見出す。その間　仁德天皇の御仁慈の御事蹟なども拜されて、生きた歴史が物語られてゆく。

併し　神武天皇の御皇兄五瀨命が負傷せられた時「吾は日の御子にして、日に向ひて戰ふ事良はず」と仰せられ、又　雄略天皇が若日下部女王を妻訪あそばされた時、若日下部女王が「日に背きていでませる事いと畏し、故已直に參上りて仕へ奉らん」と奏上してゐるごとく、わが日本の故郷を忘れず、嘆き悲しみにも、喜び樂しみにも、遠く天上の故郷に思ひを馳せる所に、上古に生きた方々の魂があり、古事記の精神が宿されてゐた。さうして重大なる局面に直面する時、常に神聖なる民族の故郷を忘れざることを、後代の人々にも誡めてゐるがごとくである。

二、日本書紀

一

古事記の撰成つて、後八年目にして、日本書紀が撰定せられた。養老四年である。舍人親王を總裁として、太安麻呂らも亦、その編纂に携はつたであらうと云ふ。

既に虛僞を削り正實を定められた古事記の成つた後、わづか十年に滿たずして、再び、國史の書を撰ぶ必要は、いかなる所にあつたのであらうか。

元明天皇の和銅三年都を奈良に遷されて、前代に見ざる宏大なる帝都が營まれた。さうして、その翌々年には古事記が成つたのである。日本は今や孤島の日本ではない。支那、朝鮮との交通はますます繁く、文化的發展はいよ〳〵著しいのである。實に日本の上昇、興隆の道は、生活的にも精神的にも、あらゆる方面にわたつて、開かれてゐる。上代文化の最盛期を此所に出現しようとしてゐる。

此の時に當つて、國家の歴史を顧み、國本を固くして、前途の發展の基礎とする機運の起つて來るのは、必然の勢ひである。國體の淵源を自覺することのみが、國家の發展の原動力となり得る。文化の興隆期には歴史の自覺が起る。これが最も力强く現實を動かす推進力となるのである。

かくて、この時代に、歴史の書が一つならず二つならず現れたとしても不思議ではない。元明天皇の御時に古事記が出來、ついで元正天皇の御時に日本書紀が現れたのは、當然の機運である。しかも、それらは、各の時代の要求に從つて、選定を見るに至つたものである。

古事記は、早く天武天皇の大御心によつてその根本が出來上つてゐた。それを、新しい時代の文化的智能によつて、一つの成書としての具體的な形態にまとめ上げたものである。それに對して、更に別個の、全く新しい時代の要求から、やはり國家の歴史を完成させる必要があつた。壬申の亂を經て、新しく國家的發展の基礎を築かうとしつゝ文化的方面においても、漸くその發展の段階の最初の階梯を出發しようとしてゐる　天武天皇の御時の一般情勢に比較して、今や奈

良時代に入り、國力の旺盛なる發展とともに、文化的にも次第に成熟期から爛熟期に向はうとしてゐる　元明天皇　元正天皇の御時代は、あらゆる方面において、情勢が變つてゐたのである。たとへその變化の程度が現代のごとく急速ではなく、可成り緩漫であるとしても、既に　孝德天皇の御時、大化の改新によつて幕を切つて落された革新の火ぶたは、可速度的に進歩の實を上げて行つて、藤原時代から奈良時代への發展を顯示させずにはおかなかつた。

此所において、古事記とは、又別に、日本書紀が撰定せられるに至つた。自然此の兩者の間には、種々の著しい特色の相違が生じて來る。

第一に、古事記はわづか三卷の小さい分量しか持たないが、日本書紀は三十卷、これに今は傳はらない系圖一卷を加へると、三十一卷といふ長篇である。卷數から見ると、まさに古事記の十倍に當る。新しい時代は、此の詳悉と巨大なる量とを必要としたのである。

第二に、古事記の統一的な內容に對して、日本書紀の方は比較研究的な特色を有する。太古の史傳は、根幹はもとより變らないが、部分的には小異を含む種々なる異傳を傳へた。それらの取捨採擇は容易ではない。十分なる考慮と、深重なる研究の結果、決定せられるべきである。むしろそれらは根本精神において相違のない限り、異傳を相互に併置させることによつて全き姿を出現させる事が可能であるとも云はれよう。後人が人爲的に取捨撰擇を行ひ、或は無理に異說を渾和併合させるよりも、それらをあるがまゝに存置させて、相互を見比べ考へ合せることにより眞實の歴史の姿を理解するやうにした方が宜しからう。かういふ考へ方も可能である。

日本書紀は、此の要求と、詳審を求める希望とから生じて來たのである。從つてそれは又、學術的である。古事記が文學的であるとすれば、日本書紀の方が、より一層學術的態度で貫かれてゐる。それは、文學の發達が常に學問の進歩に先立つごとく、又、文學の發生が、いかなる文化的原始性の中からも自然に萠して來るのに對し、學術は必ず進歩した時代の文化的自覺の中から發達して來るがごとく、古事記よりも遲れて、奈良時代といふ新しい時代が日本書紀を誕生せしめたのである。

第三に、古事記が國語的表現を取らうとしてゐるのに對し、日本書紀は之を漢文的に書き現した。尤も、日本書紀でも、全然漢文表出に時き改めてしまつたわけではなく、國語的な訓法を付けたやうな所もあるのであるが、大體の方向が兩書では違つてゐる事は明かである。これにつ

いも、古事記の方は、對内的統一の觀念で貫かれてゐるのに對し、日本書紀の方は外國と交通の頻繁なるに加へて、文化的交流が激しくなるのによつて、對外的に、詳細で且つ量も大きく、史的條件を具備した國家の歴史を呈示する必要があつたのである。それは日本人の爲めの歴史の書であるとともに、また外國人にも示し得る方法をとつた史書である事を必要とした。古事記は、外國人には通讀が覺束ないが、日本書紀の方はそれがある程度可能である。

此の事は又、書名を見てもわかる。古事記は、たゞ古事を記した書と名づけられてゐるが、日本書紀の方はわざ〳〵日本と冠してゐる。外國を意識しなければ、日本の語を附することは不必要である。從つて、古事記の方は自主的な名であるが、日本書紀は、むしろ支那の魏書とか漢書とかいふ書に並ぶ意味で名づけられてゐる。それは現在でも、國學とか國語とか國文學とかいふ云ひ方が自主的であるのに對し、日本學とか日本語とか日本文學とかいふ稱呼が、新しい感じを含んではゐるが、その實外國のそれを意識して、これを客觀的に並び置かうとする態度であるのと類似してゐるのである。

併し、かうした對外的態度も、新しい時代には必要な一つの存在であつた。かくて、古事記とは異る意味で、日本書紀的な表現も新時代が要求した一つの方法であつた。これが古事記についで、日本書紀の撰定を必要とした第三の理由である。

二

今一つ古事記と日本書紀の相違について、大きい特色のあることを述べなければならない。歴史を書く方法について、昔から二種の異る體裁が用ひられてゐる。一を紀傳體と云ひ、一を編年體といふ。紀傳體といふのは、人物を主として、その傳紀を述べて行くうちに、歴史の中心となるものを把握させようとするのであり、編年體は、年代順に種々の事件を記して行かうとする態度である。從つて此の方は、事件が主となつてゐる。

古事記と日本書紀の場合においては、必ずしも此の兩方の態度が明確ではないが、古事記は大體において記傳體であるといふことが出來、日本書紀は編年體であると云つても差支へない。

古事記が系譜を主とするものであるといふことは、前にも述べた。系譜と云つても、特に皇室の御系譜が中心となつてゐることはいふまでもない。此の御系譜に主眼點をおいた古事記が紀傳

體に類似した特色を持ち來たすことは當然であらう。

私は此所で一つの重要な問題に觸れておきたい。それについては後にも述べたいと思つてゐることであるが、それは「名」を重んじる上代人の信念についてである。古事記に、邇邇藝能命が大山津見神の女を召すことを記して、大山津見神が、その二人の女、石長比賣と、木花佐久夜比賣とをさしあげた後の言葉に「我が女二人並べて奉れる由は、石長比賣を使はしては、天つ神の御子の御命は、雨零り風吹けども、永久なる石の如く、常磐堅磐にましませ、また木花佐久夜比賣を使はしては、木の花の榮ゆるがでと榮えませと誓ひて奉りき」と云つてゐるのは、その名の中に、生命が宿されて、運命を左右するほどの強い神秘の力のひそめられてゐることが信じられてゐたからである。まことに名はその人の全身全靈の象徴であり、名は體を現すといふ後世の諺は、上古にあつては、人間の魂に直ちに接してゐる實在でもあつた。神々の名を呼び奉つて奏する祝詞にしても、或は名を惜しみ、名を容易に人に告げ、萬葉集の歌にしても、その精神は、實に名が人間のすべてであるといふ固い信念から出てゐるのである。

上古の日本人の「名」に對する觀念は、かくのごとく宗教的であり、名譽に關する信念も亦、此處から發揮せられる。さうして又それは口に云ひ出される言葉の中に、言靈の宿つてゐるといふ上古の信仰などとも連關を持つものであつて、此の點に、わが國の寡言沈默無表情も淵源してゐる。此所まで到達して、はじめて名譽の崇高な價値が理解せられる。名や言葉の容易ならぬ本質も理解せられる。それは實に國民的な性格として上古以來の歴史が示して來たものであつた。

此の「名」を貴ぶところから、やがて系譜の重要性も認識せられて來なければならない。上古において特に御系譜を中心とした古事記のごとき書の選ばれた理由も亦此所に存する。さうして此の「名」や系譜を貴ぶ性格は中世以後の武士の間にも強く受け繼がれてゐるのである。

古事記の、かくのごとき特色によつて、それは一層人物に關係すること深く、特に　天皇の御傳を中心として述べ奉ることの多い理由も明かである。

日本書紀も亦此の點をゆるがせにしたものでないことは、上古の史書として當然である。併し日本書紀においては、なほ一層事件的取扱ひの方が重んぜられてゐる。たとへば　神武天皇の御東征に關して、更に歴史的な事件を記述の中心として、それが年代順に掲げられてゐる。古事記の說くところは、「筑紫の岡田の宮に一年ましましき。またその國より上り幸でまして、阿岐國の

多祁理宮に七年ましましき。またその國より還り上り幸でましまして、吉備の高島宮に八年ましましき」のごとく　天皇がどこそこの宮に何年間ましましたと　天皇を御中心として述べ奉つてゐるのであるが、日本書紀の方は、「十有一月丙戌の朔の甲午（九日）、　天皇筑紫の國の崗の水門に至りたまふ。十有二月丙辰の朔の壬午（二十七日）安藝の國に至りたまひて、埃の宮にまします。乙卯の年春三月甲寅の朔の己未（六日）、徙りて吉備の國に入りまして行宮を起りてまします。是を高島の宮と曰ふ」といふやうに、年時を主として、これを述べ、古事記の年時に比して日本書紀の方が、甚だ年時の短縮を見たのも、此の年月日を明確に記すことによつて、歴史的事件を整理しようとする、日本書紀の態度より生じた特色である。

古事記の悠容たる文學的表現から、日本書紀の學術的であらうとする精密な記載にうつゝたところに、當時の文化の進歩も見られる。併しそれにしても、古事記より學術精神に富んでゐる日本書紀の方の記載が必ずしも常に確實であるのではないといふことも考へておかなければならないことである。それは前記の引例でもわかるであらう。茫漠としてゐるがごとくであるが、中心を摑み、本質を把握した作は、細微な末梢に精緻であらうとして、主眼となるところを逸するか、不明瞭ならしめて、遂に部分的な正確さが根幹につながらず、正確の意義を失する傾きがあるものに比して、多大の價値が置かれる。

もとより日本書紀は、決してさうした史書ではない。本質的精神を捕へてよく末梢にまで徹底したところが見えるが、なほ讀む者の理解が十分に確實な基礎の上に立たなければ、感動を散漫ならしめるおそれがないとも云ひがたい。

たとへば、瓊瓊杵尊の天孫降臨にあたり、天照大神の仰せ給うた重大な神勅については、日本書紀の本文には全く載せず、古事記には簡略にして記し奉り、日本書紀に註のごとくにして掲げられた一書の中に、漸く、寶祚天壤無窮の神勅及び寶鏡同床共殿の神勅が出でてゐるのである。併し此の點は、日本書紀が種々の異傳までも廣く抱容して掲げようとした詳細な態度によつてもたらされた最も偉大な恩惠であり、國家に對する絶大の功績であるが、しかもこれを本文の中に統一して掲げなかつたところに、本書を讀む上の注意を必要として來るのである。

いづれにしても、古事記と並んで、日本書紀がわが國家の歴史的本質的發展を豫言した、民族文學の祖として、單に史的事實を知るにとゞまらず、生成せられてゆく民族の前途を國體の中樞

に結束せしめた重大意義を持つ書であることはいふまでもない。記紀の神典としての不朽の價値は此所に存する。

三、記紀歌謠

古事記や日本書紀に物語られてゐる上古の雄々しく勇ましい話や、あはれに優しい話の數々は美しい歌がその間に點綴せられることによつて、一層その感動が強く深く傳へられる。まことに歌謠は、民族の魂に根ざす文學であるが、その最も古く、從つて最も純粹な現れは、上古の歌謠について見るべく、さうして、此の上古の歌謠の結成は、記紀歌謠において見ることが出來るのである。

これらの歌は、神々の御詠、御歴代の御製の貴き御歌より、名も知れぬ時の人々の作、或は巷にうたひ廣められた流行の歌にまで及んでゐるのであつて、その範圍は年時の長さの遠く久しきごとく、上下の距離も、至尊をはじめまつり、あらゆる階層にわたつてゐる。まことに一君萬民のわが國體は、歌の行はれる範圍について見ても如實にそれが現されてゐる。

記紀歌謠においては、それらの歌の作り出された動機や事情に關して、さまざまの物語を伴うてゐるから、一層民族文學としての價値がある。それは上古において、民族の歴史の發展を忠實に語り傳へようとした語部の人々や、或は、さうした歴史的場面を、最も直接に感動を傳へる舞踊、演劇として演出し、民族の心にうつたへようとした樂府の人々や、さうした上古に特有の、歴史を藝術化して、最も民族的な形でその精神を表現しようとした人々の努力により、筆で書かれた記錄以上の心の正しさ確さを以て、言葉やしぐさの上に現され、さうして長く傳へられるにもいたつたもので、古事記や日本書紀に出てゐる歌と物語は、さうして傳へられて來たものから取り入れられたところの文學である。

それらの歌や物語は、御先祖の御靈を祀るところの宗教的な喜びとおごそかな心の態度を以て語りつがれ、うたひつがれて來たもので、かういふ民族の歴史の保存と表現そのことが、神を祀る意義を有する貴いつとめなのであつた。何となれば、御先祖の神に對しまつつては、わが國の

發展的歴史を告げ奉ることが、神靈の慰として最も意義があるものであつたらうし、又これを謹しんで聽く人々は、その物語や歌の中に先祖の靈の告げ給ふ日本の歴史の神聖な意義の存することを覺つて、新なる感動を與へられ、國家的發展の決意をあらためて固くするであらうから。而して、歌詞も亦此の同じ源から出でてゐるのであつて、語部の持つ職能は、歌詞の持つ意義と同一である。

歌が人の心を動かす物語は、記紀歌謠の中にしば〳〵見える。その中でも勇武の御性格であらせられた　雄略天皇に關しまつる物語には、さうした歌に宿る言靈を最も切實に示したものがある。

大工の鬪鷄御田といふ者が、伊勢の妥女と不義の關係あるがごとき御疑ひをかけさせ給ひ、刑し給はうとせられた時、秦酒公は御田が立派な人物であることについて訴へ奉るに、歌を以てした。

神風の伊勢の、伊勢の野の榮えを、五百ふる懸きて、しが靈くるまでに、大君に固く仕へまつらむと、わが命も長くもがなと、云ひしき工はや、あたら工はや

かやうに琴を彈じつゝ歌つたのを　天皇は聞し召して、御田の忠誠を嘉し給ひ、その罪を許し給うたのである。

又同じく大工の猪名部眞根といふ者が、眞實の心がないとてお咎めを受け、刑されようとした時に、同じ大工の仲間の者が、眞根の人物を惜しんで、次のやうに歌つた。

あたらしき猪名部の工、懸けし墨縄、しがなければ誰が懸けむよあたら墨縄

これを聞し召した　天皇は、御自らの誤解を覺らせ給ひ、眞根の罪を許し給うたのである。

かやうに歌は、民の心を至尊に通じ奉る天來の聲でもあつた。歌が魂を以て働きかける强さとその負うてゐる神聖な役目の尊さとは、わが民族の上古の時代において、その檢證が示したほどの確な意義と效果とを持つものはない。さうして、此の歌といふ心の通ひ路があつたればこそ、一君萬民の民族的團結が固く結ばれあふ道が更に開かれてゐたのである。

神武天皇が兄宇迦斯を討ち給うた後、弟宇迦斯が大饗を捧げた時、御歌をうたひ給うた、

宇陀の高城に、鳴網張る、わが待つや鳴は障らず、いすくはし鷹ら障る、前妻が肴乞はさば、立柧棱の實の無けくを、扱きしひゑね、後妻が肴乞はさば、いちさかき實の多けくを幾多ひゑ

ね

大きい獲物の實を、妻たちに分ち與へよと仰せられて、人々の人情の機微に觸れ給うた暖い御仁慈の御心をうたひ給うてをられるのである。

聖德太子が、片岡で飢者に飲食を與へさせられ、御着物を脱ぎ給うてその飢者の上に打ち掛けられ、安らかに臥せよと仰られて、うたひ給うた、

しなてる片岡山に、飯に飢て、臥せるその旅人あはれ、親なしに汝生りけめや、さすたけの君はや無き、飯に飢て臥せる、その旅人あはれ

に至つては、長く國民の間に生命を持つ御歌であつた。雄渾な人麿の歌のごときも、その源を既に上古の記紀歌謠の中にも、見出すことの出來るものである。

かやうに、ある時は和やかに、ある時は嚴しく、又ある時は優しく、ある時は悲しく、歌謠はわが民族の遙な先祖の御心を、現代の國民にも傳へて、今もなほ生きて働く不易の民族精神の貫通を覺らせるのである。

四、風土記

一

民族と風土との連關は、新しい哲學における重要な課題である。風土の問題は、民族について思をひそめる者の、到底看過する事を得ない重要な意義を持つてゐる。

此の風土といふ新しい意味を持つ語が、わが國では最も古い典籍の書名として用ひられてゐるのは、たま〳〵民族精神の純粹な上代の文學と風土との關係を暗示してゐるやうに思はれて、甚だ興味がそゝられるのである。それが即ち風土記であつた。わが日本の諸國の風土について記した書である。

此の風土記は、日本の風土全體について記したものではなく、各國にわかつて、その風土につき調査の結果を記したもので、それはまことに　元明天皇の御代における文化活動の最も著しい

業績の一つであつた。その前年に古事記が奏上せられてゐる。此の民族的統一の重要使命を帶びた歴史の書の撰定に引き續いて、風土記の撰が各國々に命じられたといふのは、縱の歴史において企圖せられた所の國家的自覺を、更に横に長く、全國の地域に及ぼさうとせられたものであつて、その根本の目的は同じ所より出で、しかしてこの擧も亦、表面は政府の命令となつてゐるが、實はやはり　元明天皇の英邁なる大御心より發し給うたものと、解し奉る事が出來るのである。

從つて又、これは單なる地理の書ではない。現今の西洋風の、自然現象のみを說いた地理の書或は人文地理の書とも異なるのである。命令には、銀銅彩色草木禽獸魚蟲等の產物や土地の沃瘠（地味の痩せてゐるか肥えてゐるか）のごとき普通の地理的報告も要求せられてゐるが、更にそれに引き續いて山川原野の名號の由來と、古老相傳の舊聞異事をも書き記すことが求められてゐるのである。實に風土記が現今の西洋風の地理書と異なる重要な相違點は此所にあつた。上代の純粹な民族精神は、地方に傳へられる鄕土の歴史を追求してやまなかつたのであつて、地名の由來や古老の間に傳へられて來たさま〴〵の物語の中に、鄕土の精神は求められる。その鄕土の精神は、やがて根幹たる國家的精神につながれることによつて、全體的統一が可能となつて來るのである。それ故、肥前、豐後の二つの風土記には、九州方面の平定に行幸あそばされた　景行天皇に關しまつる物語が多いのであつて、これによつて　天皇の地方的な御活動が傳へられる事が出來たのである。同樣　播磨風土記では　應神天皇に關しまつる物語が多く、常陸風土記には、東國平定に向はれた日本武尊に關しまつる話がしば〳〵見えるのである。

かやうにして、鄕土を主とした風土記においても中樞は旣に明かであつた。此の中樞より出發して分れ出でたそれ〴〵の地方の歴史が即ち風土記の重要な內容を占めるものであつて、それは全く別個の特殊な、中樞から隔離した歴史を形作つてゐるわけではない。たゞ多少の遺憾は、これは古事記のごとき眞實の歴史的意圖のもとに書かれたものではないから、やはり地理的條件に制約せられて小刻みに截斷せられてゐるため、歴史的統一の觀念に乏しく、從つて又、國家的集中の効果をあげてゐないことであつて、此のことは、ひとへに後代の讀者のこれを讀解する精神と頭腦によつて、あらたなる解釋と整理と組織とをまつものごとくである。さういふ意味では國家の書として風土記の價値が、古事記や日本書紀のごとき歴史の書よりも下ることは否定出來な

い。

併し風土記の撰定せられた、そも〳〵の目的がそこにあるのであつて見れば、風土記に見出される鄉土的興趣の横溢が、時として、その中樞につながるものを見失ふ場合のあることは、やむを得ない本書の性質でもあつた。併しそれは同時に、中央と地方との相違であつて、中央にあつて事に當る者の精神や思想の精煉が、當時のごとく交通の不便で地方が隔絶してゐた時代においては、地方に居る人々の認識、知能と遙に異るものがあつたのはやむを得ないところである。むしろこれらの風土記に示された斷片的な地方的物語の繼ぎあはせが、ありのまゝの地方民のすがたを描き出すことによつて、上代の地方の生活や精神を敎へてくれた事が、わが國における鄉土の問題を考へる上の、さま〳〵な大きな示唆となり得る點に、その價値を認めなければならない。國家的歴史の本源を記紀のごとき歴史の書について求めるならば、鄉土の問題は、現今もなほ大きい社會の問題であるが故に、少くともこれを檢討する際の根本的な參考の一つとして、風土記にまで溯つてこれを考へるほどの、民族の歴史に志の厚い人が多くあつてもよいのではなからうか。さうすれば、地名の來由を說いた一つ〳〵の、はかない傳說の斷片であつても、それが生きた輝きを發するものとなることは明かであると思ふ。

例へば、豐後風土記に出てゐる田野の物語、即ち、農夫が水田を開き、大いに富裕となつた時奢つて餅を作り、的となしたので餅は白鳥と化して飛び去り、そのため百姓は死に絶えて水田を遺らず、荒廢して野となつたから、田野といふのであるといふ話の內容には、鄉土の問題について、示唆せられ反省を促される點も多いであらう。此の單純な話でさへもその中には農村の勃興と沒落の歴史があり、その根本的な原因にまで觸れて說いてゐるのである。

二

和銅六年に命を下された風土記の撰は、その後各國々で編纂が進められて、數年乃至數十年たつて、次第に出來上つて行つたと思はれる。今、當時の風土記の全形が殘つてゐる唯一の書である出雲風土記について見ると、天平五年に撰定せられてゐるが、それは和銅六年より二十一年目に當る。

風土記の內容は、大體、當局よりの命に從つて編纂せられてゐるが、併し、その書き現し方は

各國々で違つてゐる。ある國では古事記的な表現を取つてゐる所もあれば、又他の國では日本書紀に似た書き方をした所もある。その點は一樣ではない。それは書く人の意見や認識の相違にもよるのであらう。又、書き現し方についても、既に古事記の如き模範が出で、又、日本書紀もついで出でようとしてゐた時代である。

併し、大體において、風土記は漢文的な表現、即ち、日本書紀に似た書き方をしたものが多いのは、一つには、地方文化を掌つてゐたこれらの文筆の方面に携はる人々が、歸化人の後裔の人が多いといふ所にも原因があるであらう。そこに、風土記が、記紀のごとき中央の歴史とやゝ異る性格のひそめられる理由もあつたのである。併し中には又、純粹に國語の表現を取らうと試みて大いに苦心した形跡の認められる書も出てゐるが、現在殘つてゐる風土記のうち、全部が完全に殘つてゐる出雲風土記を除き、他の常陸、播磨、肥前、豐後の四風土記は、脱落があつたり、一部を抄出したりしたものであつて、全形を殘したものではなく、他は古書に斷片的に引用せられた文章を殘すもののみであるから、さうした全部の風土記の性質については、わからぬ所が多いのである。

風土記が民族文學の意義を有する理由は主なものが二つある。一つは、鄕土的なものにわが國の民族精神を求めるとして、その上代における鄕土の記錄は、此の風土記が唯一のものであるからして、風土記を通じ、鄕土的な民族精神を知り得る所に、文學的意義があるのである。けだし眞實の文學は、かゝる精神が宿るものとしての表現を持つ作品でなければならないからである。

二つには、風土記における地名の謂はれ、又、古老が傳へて來た傳說の類を記してゐることで、そこに、素朴ではあるが、地方傳承を通しての原始的な文學が認められるのである。古い時代においても、產物名の列記のやうな、純粹に地理的ではあるが、乾燥無味な部分には、興味が繫がれて居ないのであつて、傳說的部分に興味の持たれてゐたことは上述のごとき風土記の抄出本として殘されものが、すべてさうした部分の抄出であつたことによつても明かである。從つて、これを文學として見る場合、それらの抄出本だけで十分に完全であるといふことが出來るのである。

これらの點は、出雲風土記の始めにある意宇郡といふ郡名の謂はれについて傳へられた、有名な國引の條の壯大な表現と雄渾な內容によつて明確に示されてゐる。

國引の條の表現は、古代傳承の殆ど典型的な美しさを持つものであつて、そこには流れるやうなリズムのもとに、種々の裝飾を持つて裝はれた言葉が、しかも率直で簡朴な趣を失はず、迫眞力に富む雄勁さを失はずに語り出されてゐる。上代の言葉の裝飾は、後代のごとき纖細で優柔になる傾向の裝飾とは、性質を異にするものである。一節を引くと

拷衾新羅の三崎を、國の餘り有りやと見れば、國の餘り有りと詔ひて、童女の胸鉏取らして、大魚の支太衝き別けて、はた薄穂振り別けて、三自の綱打ち挂けて、霜黒葛くるやくるやに、河船のもそろもそろに、國來國來と引き來縫へる國は、去豆の打絶よりして、八穂米杵築の御崎なり。

これを朗々誦すれば、直ちに上代のわれらの祖先の魂に觸れることが出來る。しかも、此所に表現せられたものは、新羅の土地を、わが國の出雲に引き寄せて來るといふ、國家發展の理想が宿された精神であつて、一面においてそれは、文化開發の進歩をも意味してゐるのである。即ち、此の國引の條に表現せられた土地の發展の跡を辿つて行けば、それはやがて出雲の土地の文化的發展が、いかなる方向を取つて行はれたかといふことも明かにせられるのである。

常陸や九州における傳説も亦、反抗しまつろはざる者に對する邊土御平定の物語が、内容となつてゐるのであつて、例へば常陸風土記に見える物語に　崇神天皇の御代に、兇賊を平定せられるため、建借間命を遣はされた時、遙海東の浦を望み見ると、烟の立つのが見えた。そこに人があると思つて、建借間命は、天を仰ぎ誓つて云ふには、「もし天人の烟ならば來て我が上を覆へ、もし荒ぶる賊の烟ならば去りて海中に靡け。」すると、烟は海をさして流れたので、兇賊が居ることを知り、遂にこれを亡ぼすにいたるのであるが、かやうに、祈誓の念を籠められる中に、高天原を仰ぎ望む心が表現せられてゐる。此所に風土記の地方的性質が、國家全體の心に繋がれてゐることが明かとなるのであつて、風土記の民族文學の性質も、此の點に重要な意義が認められるさうして後代の地方文學をいふものも、やはり此の精神のもとに理解せられるべきであつて、單なる地方を主體とする愛鄕精神とか、割據的な地方中心思想とかがあるべき筈のものではない。

五、祝詞

一

祭政一致は、わが國家成立の原理を示す最も重要な要件である。政治の倫理性とか宗教の實踐性とかいふことは、それ〴〵を分離せしめた學理、哲學や一時的興奮、根柢のない狂熱から生ずるものではなく、此の兩者が一つの本質のもとに渾融せられたところから生ずるのである。即ちわが國體といふ本質によつて、政治、宗教が統合せられてゐるところに、政治道德も自然に興へられ、その實行力も具へるにいたるものである。現在のそれ〴〵の分野における腐敗、墮落は實に此の兩者を分離して、互に關はりないものとしたのによるとともに、最も重大なる誤謬は、これを國家の本質より遊離せしめた點に存する。さうして政治をも宗教をも、各々の專門家、職業家の掌中に把握するものとなつて、國民一般の生活からも遊離するにいつたところにも、その原

因を求めることが出來る。これを效濟するために、われらはもう一度上古の國本に立ち返つて、祭政一致の意義と方法とを考へて見る必要がある。

祭政一致を根本とする古代の精神は、古事記においても、これを十分に知ることが出來る。古事記は、歴史の書であるとともに、宗教の書でもあつた。又文學の書でもあつた。さうしてそれが歴史の書であることは、國家統治の具體的方法を示されてゐる點において、實に政治の軌範たるべき書なることを示すものであつた。

かういふ性質は、多かれ少かれ上代の古典には共通してゐるが、特に此の點の特色を明瞭ならしめてゐるのは、祝詞とその一類の文章である。

祝詞の本質が、神祭りの意義を有する點にあることは云ふまでもない。その意味において、祝詞が宗教的性質を根本としてゐることも亦否定出來ない。併しこれらの祝詞は、その神祭りに、國家統治の重大意義をも含ませてゐるところに、看過すべからざる政治的性質を具へて來る。

祝詞の祈願の目的は何であるか。「皇御孫の命の御代を手長の御代と、堅磐に常磐に齋ひ奉り、茂御代に幸はへ奉る」こと（祈願祭）であり、「今も去前も、天皇が朝廷を平らけく安らけく、足

御代の茂御代に齋ひ奉り、常磐に堅磐に福はへ奉り、預りて仕へ奉る處處家家王等卿等をも、平らけく　天皇が朝廷に、いかし彌木生如す仕へ奉り榮えしめ賜へ」といふこと（春日祭）であるのが、最も多く見られるものであつて　天皇の御代長久を祈り奉り、或は、朝廷の平安と臣下の繁榮とを祈るといふ事が主眼となつてゐるが、政治の究極の目的は、此の點に歸着することを考へれば、祝詞の祈願の意義が政治と同一目的を有するところに存することを知るであらう。

此の點は、更に六月晦大祓の祝詞において見られる罪の意義を考へる時一層明かとなる。此の祝詞と共に、祓が行はれて、半年ごとに文武百官の罪過が祓ひ淨められ、同時に、すべての國民も亦清淨の身心をもつて、新しい人生に出發するわけである。かくて、罪過の種々の名目を列記して天つ罪、國つ罪に大別してゐるが、しかもこれらの罪過には、道德的犯罪の性質のものも數數あげられてゐるのであつて、殺人傷害罪、姦淫罪のごときものも認められる。更に進んで、病氣や、今日天災と考へられてゐる災害などまでも、やはり人間の罪過の結果と解してゐたやうだが、これらを通して、そこには一種の律法的性質を帶びて來てゐる。たゞ上代においては、後世に見られるごとき刑罰を科する代りに、身心の甦生をはかる方法を考へた。新しい精神をもつて清い生活に出發する方法を與へるところに、古代の政治の根本的意義があり、そこに宗教との合一が認められて來るのである。刑罰は、外部より加へる鞭に過ぎない。さういふ物質的なものでは、いつまでも犯罪の根を絶つことは出來ない。刑罰ではなく祓の精神的効果に敬虔なる信仰の情をよせてゐた古代人の純潔なる魂に觸れる時、もう一度、政治の必要を敎へられるのである。

それとともに、國家の安泰長久を祈る積極面を裏返して、人間が罪過を犯すにいたる自然の本能の働きを、あへて否定せずに、その淨化の方法を講じる點には、政治の消極面も亦認められるのであつて、此の兩面の構成する祝詞の政治的意義は、それが神祭りの本質に連なるものであるだけに、一層祭政一致の根本義を明確に示すものと云はなければならない。

即ち、人間的行爲から生ずる諸々の罪過の反省と、國家の發展を企圖する精神とは、神祭りといふ嚴肅な心身の集中統一の行によつて歸一し、高上するとともに、それが政治の良心的、且實踐的な行動の力ともなるのである。さうして、これを究極について云へば、神祭りそのものが政治であり、政治とは即ち神祭りにほかならないとも云はれる。

二

現在傳へられる祝詞は平安時代の記錄にかゝるものであるが、これは上古よりの長い傳承を受け繼いで來たもので、その根原は、はるかなる古代の傳統を傳へて、わが國の歴史と共なる長さを持つものと云つても差支へない。現在傳へられる祝詞は十二月の行事によつて整理され、又、種々の神社、神祭に及んでゐるが、その表現や精神に至つては、共通するところが多く、根原においては一に歸すると云つても不當ではない。

祝詞の民族文學として持つ重要な意義は、その表現が、純粹に民族的な美しさを持つてゐるところにある。祝詞の表現は、最も原始的な、それだけに最も民族的な純粹さを持つものと思はれて、或は上古の和歌の表現樣式よりももつと原始的なもの、語部の傳承樣式のより根原的なものではなからうかとも考へられる。もとより、今日傳へられる祝詞の文章には、幾多の洗練が加へられて、一層磨きのかゝつた美しさの增してゐることは否定出來ないが、それにも關はらず、祝詞の純粹性は、やはりはつきりと認められるのである。

六月晦大祓に出てゐる諸々の罪については、古事記の　仲哀天皇の條の祓の詞にも、大體同樣の事が見えてゐるし、祈年祭の祝詞に「狹き國は廣く、峻しき國は平らけく、遠き國は、八十綱打掛けて引き寄する事のごとく」とある思想には、前に風土記の所でも引いた、出雲風土記の國引の條に「三縒の綱打ちかけて……國來國來と引き來縫へる國」とあるのと、內容も表現も類似共通するものがあることなどを比較して考へれば、その點は明かである。殊に、この祈年祭の祝詞に、「狹き國は廣く」する、「峻しき國は平らけく」すると云はれてゐるのは、わが國家の理想を端的に表現せられてゐるのであつて、それは「遠き國は……引き寄する」のと相俟つて、國家發展の希望と平和の理想が布べられてゐるのである。狹い國を廣くし、遠い國をわが國に引き寄せ、峻しい國を平らかにしようとするのは、現在においてわが國を指導すべき根本精神たるべきものではないか。祝詞の壯重な表現は、此の內容あるが故に、常に現實的な力を發揮し得るのである。

更に祝詞の表現として、上代的な特色を有するものを、一二示すと、國土の極限を云ひ現すのに、「谷蟆のさ渡る極み、鹽沫の留まる限り」とか「天の壁立つ極み、國の退き立つ限り、青雲の

棚引く極み、白雲の降り居向伏す限り、青海原は棹舵干さず、舟艫の至り留まる極み」とか、美しい對句的表現を以てしてをり、或は　天皇の御所の御事を「皇御孫命の瑞の御舍仕へ奉りて、天の御蔭日の御蔭と隱り坐して、四方の國を安國と安らけく知らし食すが故に」と申してゐるが如きは、萬葉集の作品や、その他の上代の文學に多大の影響を與へてゐるのである。

祝詞の中でも、最も雄渾なる代表的文辭は六月晦大祓である。それに「天孫降臨の雄大なる叙述を以て始まる、わが國家の歴史が認められるが、それは、記紀に描き出されたのと同じ表現を持つものであつて、祝詞の表現が上代のわが民族が持つてゐた文學の純粹さを傳統してゐた所以がそこにある。

更に、此の大祓の詞で、國民の罪過が解消するに至る過程の叙述は、一篇の中心であるからして、最も壯大森嚴であり、加ふるに流暢なリズムの動きと、豪華な裝飾の輝きとを以て、實に文學的表現としての洗煉と完璧とを具備してゐる。

祝詞の完全な型態を持つものにおいては、わが國家の歴史の叙述を以て始まる。それは、歴史的反省が、最も國家の現實的な實踐力となり得るからである。かくて、大殿祭の祝詞では、天孫の御降臨に當り「天つ爾の劍鏡を捧げ持ち賜ひて、言壽宣りたまひしく、皇がうつ御子、皇御孫の命、此の天つ高御倉に坐して、天つ日嗣を萬千秋の長秋に、大八洲豐葦原の瑞穗の國を、安國と平らけく知ろし食せと言寄さし奉り賜」うたと神勅を記し奉つてゐるのは、此所に國體の本義があるからで、祝詞の重要な意亦義も此所に存する。或は鎭火祭の祝詞に見られる、伊佐奈美命の崩御に關しまつる物語のごとき、又、記紀に記したところを補つて、相共に上古の傳へを考へるべきもので、祝詞は記紀とともに、わが民族の根原を知る上に重大な價値を持つ。それにも關はらず、記紀に比して、祝詞は不當に輕視せられてゐる。わが民族文學の上のみでなく、民族の運命に思ひをひそめるものは、古事記と並んで祝詞を大いに尊重しなければならない。特に、その表現の大和言葉を縱横に馳驅した美しさに至つては、古事記にまさるとも劣らぬ文學的價値を持つものである。

祝詞の構成は、此の國家の歴史と、神前供饌の品目の列記と、祈願の表出との三部より成るのがその完全な型態であるが、その中の二部だけより成つてゐるものもある。國家の歴史を述べた部分の價値、祈願の表出せられた部分の意義等については、既に上述した通りである。供饌の品目

の列記の部分に關しては、それが上代人の日常生活を考へる上に、種々の暗示を與へる點に注意すべきものがある。それとともに、表現の美しさも、他の部分に劣らぬものがあるが、たゞ、その表現には一種のマンネリズムを伴つて、他の部分に比すると常套に墮したところがある。併し祝詞が民族文學たる所以は、それ〴〵の部分が持つ意義を有機的に結合して民族的精神と表現とを發揮した、一篇の文辭を構成してゐる本質に存するのである。

六、萬葉集

一

古事記がわが國民のあらゆる生活の根基たるべき聖典であるとすれば、萬葉集は、まさにわが國民の精神生活のすべての部面を示した古典であるといふべきである。古事記が信奉せられるべき經典であるならば、萬葉集は常に誦み味はれ、鑑賞せられるべき典籍である。古事記によつて國體の根本を悟る事が出來るならば、萬葉集によつて、民族的情緒の眞髓に觸れる事が出來るものである。

かくて、古事記は、國家的聖典として、いつまでもわが國民の指導たるべきは原理を示し、常に國家興隆の希望を與へ、强力なる信念を以て、全面的に民族國家を鼓舞する。萬葉集は、又、純粹なる民族的感情を以て、萬世の後までも、國民の間に强い共感を卷き起し、われわれの祖先の魂が、今日もなほ生命を以て、われわれの精神のうちに甦がへつて來ることを感じさせる。まことに、民族の持つ文學として、萬葉集は、最も純粹なものであり、わが國家の持つ長い歴史を一瞬に縮めて、われ〴〵は先祖の心に直面し、生きて働く先祖の魂の中に自らの永遠の生命を感得する。そこには時間的空間的距離の制約はない。永遠の書といふべきは、實に斯くのごとき古典をいふのであり、古事記に並んで、萬葉集は、わが民族國家とともに、不滅の古典たるべき書である。

萬葉集の編纂者が、本集を編纂するにあたつての力强い信念は、此の書名にも表現せられてゐる。すなはち、萬葉とは、萬世の意義であつて、本集が萬世の後までも傳へられて民族の間にそ

の生命の流れを見出すことを、その編纂者は豫言してゐるのである。それは漠然たる希望であるのではなくして、單純率直なる上古の人々の精神が持ち得た固い信念でなければならない。此の單純率直にして強固確實なる信念が、古事記や萬葉集や、上古の典籍に漲つてゐるところに、これらの古典が、現代人を力づけ、精神の緊張に導き、國家の發展に對する希望を高潮せしめ、現代人とともに生きる理由があるのである。わが國家は、かくの如きわれ〳〵の先祖の手によつて建設せられたところに、永遠不滅の生命を宿してゐるのである。

同じ歌集であつても、此の意味において、萬葉集は、後代の歌集と、異る價値と意義とが見出されなければならない。既に歌集の名にしても、萬葉集の書名が持つ永遠の觀念は、後代のそれには殆ど見出すことが出來ない。わづかに千載集のそれが、萬葉、千載と對すべき名を持つのであるが、しかも、萬葉集の氣魄には遂に及ばないのである。萬葉集に對する代表的撰集の古今集でも、古に對して今を對するだけで、萬葉集におけるごとき未來永遠の觀念を含んでゐない。ただ古今集は、その序文において、歌の生命の長く傳はり行くを强調してゐるが、萬葉集は端的にこれを書名に打ち出してゐるのである。

萬葉集の卷一は　雄略天皇　舒明天皇の、天皇の御製をもつて始まつてゐる。卷二は、仁德天皇の皇后、磐姫皇后の御歌とともに、天智天皇の御製をもつて始まつてゐる。卷三は、持統天皇の御製をもつて始まつてゐる。卷四は、仁德天皇の皇妹の御歌ともとに　岳本天皇の御製をもつて始まつてゐる。(岳本天皇は　舒明天皇の御事か　齊明天皇の御事か、必ずしも明瞭となつてはゐない。)かやうに主なる萬葉集の最初の四卷は、いづれも　天皇の御製、又は皇后、皇妹の御歌をもつて始まつてゐるのであつて、臣下の歌が卷頭を占めてゐるのではない。これが古今集以下の代々の勅撰集などと性質を異にする所以である。古今集以下の二十一代集において、卷頭に御製を見出だし奉ることが出來るのは、わづかに藤原定家の撰んだ新勅撰集があるのに過ぎない。

萬葉集が、かやうに、御製を始めまつり皇室の御歌をもつて、卷頭を埋め得たのは、或は偶然であつたかも知れない。それは必ずしも、編纂者の意圖するところではなかつたとも云ふことが出來るであらう。それは、これらの卷々は年代順に編纂せられてゐるので、特に意識して、御製を卷頭に掲げ來つたのではないといふことも可能なのである。

それにもかゝはらず、萬葉集の貴ぶべき所以の一つが、さうした點にもあると云はれ得る理由

は、年代順に作品を掲げる時、極めて自然に、意圖すると否とにかゝはらず、御製が卷頭に置かれるやうになる、上代の國家の　天皇を中心としまつる社會の狀態を、それが反映してゐる點にあるのである。それはむしろ、意識せずして、自然に、さういふ現象を呈するが故に貴いともいふことが出來る。今日においては、ある人々に對しては、特にこれを鼓吹しなければならないやうな慨嘆すべき狀態である。上古においては、意識せず、指導せずして、すべてが自然にさういふ結果になる。上代の貴ぶべく、今日のわれらの學ぶべき點は此所にある。さうして、萬葉集が此の意味において貴ぶべきであるといふ理由もそこにある。

二

萬葉集は　天皇の御製をはじめまつり、皇室の御歌を多く掲げまつるとともに、又、名もなき國民の作も甚だ多く收めてゐるのである。臣下の中には、上は大臣より下は乞食者（ほがひびと）にいたるまであらゆる階層の國民を含めてゐる。女性の作もまた數多あるが、その中には、遊行女婦（うかれめ）と記された娼婦の作も散見するのである。特に邊疆の防備に召されて出で立つ防人（さきもり）は、東國の農民が選ばれたものであるが、此の東國の農民の作が多く見出だされる事は、萬葉集に一層の國民的な意義を賦與するのである。

かくのごとくして、萬葉集は、一大國民歌集であるといふことが出來る。皇室の御歌を掲げまつることはいふまでもなく、下萬民のいかなる地位、職業にあるものも忌みきらふことなく、これを集中に收めて憚ることはなかつた。君臣階和の實は、本集において明かに見ることが出來るのである。

更に、萬葉集には、作家の名の明かでない歌が非常に多い。萬葉集二十卷のうち、卷七、卷十、卷十一、卷十二、卷十三、卷十四の六卷は、殆ど全部作者不明の作品ばかりを集めたものであつて、その歌數は、全體の三分の一をも占めるのである。これら作者不明の歌は多く、今日の言葉で云へば、民謠といふ種類に屬する歌ではなかつたかと思はれる。即ち、ある特別の個人が作り出した歌といふのではなく、民衆の間に自然に發生し、うたひ弘められてゐた歌が萬葉集では多くの分量を占めてゐるのである。此の點がまた、後の勅撰集と萬葉集とを區別する特色の一といふことも出來る。古今集には、まだ萬葉集と同じ、民謠風の歌を收めるといふ特色も多少殘

してゐるが、それ以後の勅撰集になると、さうした特色は全く見られなくなつたと云つて宜しく、ただ宮廷貴族の作品に終始したやうな結集となつてゐる。萬葉集における、さうした民謡風の歌の數が多いといふ特色は、やはり本集をして、國民的特色を持たしめる有力な一つの理由であると云はなければならない。

かやうに民謡が多いといふことよりして、萬葉集の歌は聲に出して、うたひ口ずさまれたものであるといふことが明かである。詩として、頭腦で考へ、紙に書かれたものを眼で讀んで味はふといふ性質のものではなく、口である節廻しをもつてうたひ出されたうたを、耳で聞いて、その歌の曲節とともに歌詞を直觀的に理解することによつて、これに感じ動かされるといふ性質のものである。此の音樂的な直觀による感動といふものは甚だ純粹でまた強烈なものである。紙筆の文學は、頭腦で考へて理解するといふ理知的要素がどうしても入つて來る。かくて時代が下るほど文學は理性的な傾向が強くなつて、知性の文學といふやうなものが起つて來る。古代においては文學の感動は純粹に感情的なもので、つまり、後代の文學では、ロゴスの要素が強くなつてゐるのに對し、古代の文學は全くパトスの文學であつた。萬葉集の歌が、われ〳〵に與へる感動の純粹で且強いのも、以上のやうな意味におけるパトスの文學として、それが音樂的要素を濃厚に含み、直接に感情に訴へる性質を持つてゐたからである。此の口誦文學の性質を萬葉集が多分に持つてゐるといふ點は、後の勅撰集のごとく、記載文學としての歌の性質と、その特色を異にして來る所以で、やがて、萬葉集の歌を誦し味はふ上にも、此の點の注意を大いに必要として來る。それは單に、眼で讀み頭で考へてわかつたといふだけで滿足すべき歌ではなく、朗々と口吟して歌誦する時に、始めて肺腑にしみ入る感激にぢかに觸れ、身心ともに洗はれる感動を直接に受けることが出來るものである。

萬葉集の歌が實際にうたはれてゐたといふ實例を一二示すと、卷十二に出てゐる、

赤駒のい行き憚かる眞葛原何の傳言直にし吉けむ

といふ歌は、日本書紀では　天智天皇が近江宮で崩御あそばされた頃に、世間でうたはれた童謡として記してゐる三首の歌の中の、第三首目と、全く同一の歌で、即ちこれは　天智天皇　弘文天皇時代に行はれた一種の流行唄のやうなものであつたと云ふ事が出來る。

又、卷十一に出てゐる、

妹が門行き過ぎかねつ久方の雨も降らぬかそをよしにせむ

といふ歌は、平安時代の始めにうたはれて、後長くうたひ傳へられて來た、雅樂の催馬樂といふ歌謠の中では「妹之門」と題する歌として、

妹が門せなが門　行き過ぎかねてや、わが行かば、ひぢ笠の雨も降らなむ、しでたをさ、雨宿り、宿りて罷らむ、しでたをさ

とうたはれてゐる。兩方を比較すれば、「久方の」を「ひぢ笠の」と訛つたやうな箇所もあるが、とにかく同一の歌であるといふことは明かであらう。

かやうに、萬葉集の歌が、記紀歌謠、その他の歌謠の類と廣く關係を持つてゐて、國民の間に長くうたひつがれ、世に行はれたものであるといふことが明かであるが、萬葉集が國民文學としての大きい意義を持つ所以も此の點にある。

三

萬葉集が、その御作者、及び作者において、一君萬民的な、全國民の階和である點に、眞實に國民文學としての意義を持つのみならず、その御製以下の作品の詠作せられた地域の分布において、全國的であり、西は九州の果から、東北にまで及び、また北陸、山陰の日本海沿岸地方を縫ひ、瀬戸內海の周圍をめぐり、東海道の道筋を通じて、東國地方を覆うてゐる。これほど、廣汎な、殆ど全國にまたがる土地を收めた文學の書、特に歌集を、此の集以外には全く見出す事が出來ないと云つてよい。尤も、ずつと遲れては、特に地理的な分類を目的とした歌集には、所謂歌枕の書も出てゐるが、さういふ意識的に、地名の類聚を目的としたものではなく、萬葉集は、無意識的に、自然に、全國の地域を覆うて、これを收容してゐるのである。從つて萬葉集に現れる土地は、歌に詠まれた名所、所謂歌枕とは意味を異にしてゐる。

歌枕といふのは、觀念的に作り上げられた名所であつて、人々はその土地に行かずとも、習俗的にその地名を用ひるだけであるが、萬葉集に現れる地名といふのは、勿論さういふ性質とは違ふのである。實際にその土地に身を置き、その風光、境地に身を托して、直接に受けた感動の中より、生じたものである。從つて、萬葉集の土地は、流俗的に名高いといふやうなものは少くて、邊鄙な土地、今では名も知れないやうな土地、さういふ土地が幾らでも出來てる。尤も、萬葉集

に詠まれたが、ために後には有名な歌枕となつたやうな地名もあるが、萬葉集に現れる土地は、今日から見ても、實に交通の不便な、或は、中央地から離れた土地が種々見られる。萬葉集の人々は、全國的に、いたる所に歩を運んでゐる。いかなる土地をも踏破してゐる。さうして、畏くも貴い御方々が、邊鄙の地にも御足を印し給うてゐるのである。

上古の人々は、國土の隅々まで足を踏み入れて、土地の空氣、匂ひを腹の底まで深く吸ひ込んでゐる。土地の息吹を胸一杯に呼吸してゐる。自然を愛することの深き、上古の人々におけるほどの切實なるものを見ない。現代のわれ〳〵が、高山に登り、或はハイキングと稱して、歩行を試みることの一時の流行とは異るものがある。それは自然を愛するよりも、自然を汚し、自然を貴ぶよりも、自然に戰を挑むとか自然を征服するなどと稱して、これを輕侮する風がある。萬葉集に現れた自然の愛は、それが國土の隅々にまで及び、歌枕の正しく名所化されない土地にまで及んでゐるといふことによつて、その深さがわかるとともに、萬葉集の民族文學たる所以は、此の自然を詠じた地域の點からも云はれるのである。

羈旅は、わが國の文學における大きい對象の一である。紀行文學と稱する國文學の流もある。歌集の部類分においても、羈旅は重要な題目の一となつてゐる。此の羈旅の文學の源を辿れば、萬葉集において、深く清い水上を發見することが出來る。卷十二には羈旅發思といふ項目があつて、旅の歌を集めた。その中には、

能登の海に釣する漁夫の漁り火の光にい行く月待ちがてら

のごとく清麗な夜旅の歌を、能登の海岸でうたつたものもある。卷七には又、羈旅作と題して數多の歌が集められ、

大御船泊てて侍ふ高島の三尾の勝野の渚し思ほゆ

と、行幸の旅に侍した思ひ出を詠じてゐる。

萬葉集において、地理的研究が特に盛んに行はれる理由は、さうした地理的分布の廣汎な事と、地名の頻出することの甚だしいのと、特に又、それらの地名が現代の地理と異點多く、そのために、一層研究的興味のそゝられる所あるが故である。かうした地理の全國的な廣がりにおいて、萬葉集の鄕土的な連關の深さの點に、その民族文學の意義を認めるべきである。

更に、萬葉集には、その鄕土との連關が、土地の生活と結びついてゐる點において、根强さを

認めることが出來る。大伴旅人や山上憶良は、九州の土地に長く生活し、大伴家持は、北陸に久しく住居を占めてゐる。それ故、旅人や家持の生活を通して、その鄕土の香も亦、おのづからにしてにじみ出るのである。勿論それは鄕土の生活そのものの表現ではない。都會的な貴紳の生活を地方に移しただけのものであるかも知れない。併しその土地で生活を營んでゐることが歌を通して、自然に感ぜられる所に、鄕土の香を見出すことが出來る。

かやうにして、旅人や憶良の詠作には、九州の土地の傳說や風土を反映せしめ、家持の歌には北陸の方言を詠み込ましめた。これが更に、より深く鄕土的なものに結びついたものが、東國の方言をもつて歌を詠じること多き東國の人々の作となり、又、地方傳說の作品をも種々殘さしめるに至つてゐるのである。

四

萬葉集は、國民傳說に關係の深い點で、民族の感情に强く訴へるものがある。例へば、卷九に出てゐる水江浦島子を詠んだ長歌のごときは、物語の幻想的な美しさと永遠に對する人間の憧憬の情をうたひ出してゐる點において、今もわが國民の心の底に流れてゐるものがあるのである。

上古において、最も多く行はれてゐたと思はれる民間の傳說の中には、妻爭ひ說話と云はれるものがあつた。一人の女に、二人、もしくは三人の男が想をかける。その女は板ばさみの有樣となつて、どちらにも嫁ぐことが出來ず、その結果は、みづからの身を殺すことになるが、男たちも亦、われ遲れじと、愛する女のあとを追つて死ぬるのが、多くの物語の結末となつてゐる。

これは單なる男女間の情痴とは云へない、日本人の純粹の感情を表現してゐる物語である。日本には情死が多い。外國には、さういふ例は甚だ少いと云ふ。江戸時代の近松劇のごとく、さうした事件が極めて美しく舞臺の上に描き出される作品も數が少くない。併し江戸時代のやうに、社會の桎梏と個人の愛情の矛盾、義理と人情との破綻がもたらす、さうした悲劇的結末と違つて、上代のそれは、全く純粹の人間の間の、眞實の情愛の問題として取り扱はれてゐる。たゞ時々の社會の狀態によつて、その時代に生きる人々の心に與へる影響は、さまざまの相違を惹き起すであらうが、情死といふものが、單なる個人の利害妥算を超越した、純眞の動機に出てゐるといふことだけは信じてよいと思ふ。

それは痴情とか頽廢とか云つてしまへない純粋の愛情を底にひそめてゐるところがある。此の心が、主君への純粋な愛情となつては殉死の現象となつて發露せられる。すべてこれらは、自己犠牲の精神が、最も高い行爲となつて表現せられたもので、上代の妻爭ひ說話のごときは、殊に此の精神の旺盛で淸純な愛情が流れてゐる。さうして、外來の思想は、常にこれらの自殺を否定するのである。上古の殉死を禁止せられたのも、支那の思想の影響と、人間の理智の發達によるものであらう。キリスト敎も亦自殺を罪惡としてゐる。

もとより、われ〳〵は好んでこれを讃美するのではないが、みづからを殺すことにおいてわが國民が勇敢であるのは、常に純粋なる感情の發露によるものであることを、明瞭にしておきたい。さうして、そこに、さういふ行爲を敢へてなし得ない外國民との間の相違を考へたいと思ふのである。つまり、利害妥算を超越した犠牲行爲にまで、此の純粋の感が高められるところに、それらの行爲の究極の價値があるのであり、わが國民性の本質との聯關が、そこに認められることをはつきりと理解したい。

妻爭ひ說話は、さうした純眞な愛情を示す上古の物語であつて、わが國民性に觸れるところの多い說話である。それは、萬葉集においても、これらの物語が種々の作品としてうたはれてゐる。葦屋の菟原壯夫と茅渟壯夫に想はれて、處置に窮したあげく、「踐しきわが故、男子の爭ふ見れば、生けりとも逢ふべくあらめや、しゝくしろ（枕詞）黃泉に待たんと」母親に語つて、遂にみづからを殺した處女塚の歌（卷九）或は又、同じく二人の男子の爲めに想はれて、みづからを殺せば、その二人の男子の不和が解けるであらうと思ひ、「林中に尋ね入り、樹に懸り經死」した櫻兒の物語（卷十六）などは、その代表的なもので、深く時の人の心を動かしたのである。

われ〳〵は、さうした行爲としてではなく、その物語の含む日本人らしい美しい情緒と精神を愛惜して、さうした純粋の感情を傳統するところに、日本人としての誇りを持ちたい。さう考へれば、これらの作品の持つ民族文學の意義も亦明かに理解せられて來ることであらう。

卷五には又、大伴佐提比古が遠く外國に使して、その乘つてゐる舟の出て行くのを見送り、妻の松浦佐用嬪面が、悵然と領巾を振りながら別れを惜しんだ領巾振山傳說の歌が出てゐるが、此の哀深い話には、後人も大いに感動したと見えて、後人の詠んだ歌が、次々に詠み添へられてゐる。

これらの國民説話には、長く傳へられて行くうちに、潤飾せられることが多かつた。しかもそれらには、外國傳説の影響が多く見られる。例へば、浦島子の物語は、萬葉集の歌では龜の事は全く見えず、舟で沖に漕ぎ出じて仙女に逢ふことになつてゐるが、これに龜の話が加はつたのは古くもあつたが、特に後世に下つて、佛教説話の龜の報恩譚を取り入れたところがある。領巾振山傳説にしても、佐用姫が石に化したなどゝいふ話は、これまた甚だ後世になつて、支那の望夫石傳説を取り入れたもので、その望夫石は今も揚子江の上流に、出征した夫を慕ふ妻の心を殘して、その跡をとゞめてゐると云ふ。

併し、萬葉集の物語では、さうした外國説話の影響に煩はされない純粹の內容を歌つてゐるのである。しかもそれらの多くが、種々變形したり、潤飾せられたりしながら、それにもかゝはらず、上古のまゝの精神を傳へ、或は純粹の內容を見失はずに、現代にまで受け繼いで來られ、國民の感情生活に固いつながりを見出すところに、萬葉集が現代の國民の精神生活にも、親近を感じさせる一つの理由があるのであり、民族的な共感の根強い傳統の力を、そこに見出すことも出來るのである。

五

何よりも萬葉集の民族文學としての意義は、あらゆる國民の階層によつて詠み出だされた作品が、端的に民族精神を表現してゐるところにあつた。殊に、民衆層の底にまで、此の民族精神の浸透してをり、清冽の流れをなしてゐたことは、萬葉集が收めてゐる、多くの民間の歌謠によつて知ることが出來るのである。平安時代以後の和歌が民衆層から隔絶じたごとく考へられたのに對し、萬葉集の歌が此の民間、下部の精神を示すことに、力强い効果を發揮することが出來たのは、上下階和して、うるはしい民族社會を營んでゐた上代の社會生活の賜物であつた。

特に、東國の防人の歌は、その意味において、純朴な民族精神を現すものであつた。防人は外敵の來襲にそなへて九州の北邊の防備に當る兵士で、それには東國地方の人々が選拔せられた。當時においては、東北地方を占據してゐた蝦夷とともに、それ以上に、九州における外敵の侵入が危まれてゐた。それは必ずしも杞憂ではない。後代においては、平安時代にも鎌倉時代にも、外敵が、此の地に來寇、進攻して來てゐるのである。

蝦夷に對抗して、勇猛果敢な鬪爭力を發揮したのは東國の人々である。風土と季候の惡條件にも堪へて、根强い頑張りの力を持つ、此の地方の人々は、國防の兵士として、最も適當した資格を備へてゐた。それ故、それらの人々が選り出だされて、東國から、はるぐと九州の土地へ送られたのである。彼らは難波の湊に集合せられ、瀬戸內海を舟で輸送せられて行つた。

それは又、一面において、文化交流の意義を持つものであつた。中央政府の存在する畿內を中心として、その兩翼の端に位する九州と東國との懸絶した文化——言語、風俗習慣、宗教道德、さういふものを交流せしめ、そこに國家的な統一をはからうとする、統治上の意義も多分に含まれてゐたのではなからうかと察せられる。少くとも此の離れた地方の文化が相互に接觸することによつて、文化の向上進展が見られることは疑ふべからざる事實であつた。それ故、九州肥前の民謠であつた杵島曲といふ歌が、早く東國の常陸の地方にも行はれてゐたといふ常陸風土記の記載は、當然にあり得る事實でなければならなかつた。

筑紫なる艶ふ兒ゆゑにみちのくの香取少女の結ひし紐解く（卷十四）

といふ愛の歌が詠まれるのも、また極めて自然な經路であつた。常陸の香取の女が結んでくれた帶紐を美しい九州の女のために解くといふのであつて、此所に至れば、蝦夷族と隼人族との結合さへも可能となつて來るのである。かやうにして、國家の統治は强固にせられてゆく。

今日においても、東國から九州への旅は、距離の遠隔なるを思はしめる。まして當時において東國の人々が鄕國を離れ、遠い九州に赴くのは、全く國家のためといふ强い決意と自覺がなくしては行はれがたいことである。それはひたすらに大君の大命を拜するのであるといふ光榮の念が別れがたい愛着をふり切つて、任務に喜んで就く精神を振ひ起させる。

大君の御命かしこみ石に觸り海原わたる父母を置きて（丈部造人麻呂）

大君の御命かしこみ出で來れば我ぬ取りつきて言ひし子等はも（物部龍）

のごとく、勅命を奉じて、父母も愛する子どもたちも後に殘して出で立つた彼らである。それは

たゞ

今日よりは顧みなくて大君の醜の御盾と出で立つ我は（今奉部與曾布）

といふ、ひたすらなる忠節の念を以て、一途に奉公の至誠を捧げようとする純粹の精神にもとづいてゐた。それ故に、右のごとき防人の歌もうたひ出だされたのである。それは、東國の方言を

交へて詠むことも少くないくらゐに、純朴な表現を持つてゐた。

出立に當つては、神々に祈誓して、勇ましく任務に就いたのである。

○霰ふり鹿島の神を祈りつゝ皇御軍に我は來にしを（大舍人部千文）

天地の神を祈りて獵矢貫き筑紫の島をさして行く我は（大田部荒耳）

のごとき凛然たる出征は、今日の皇軍勇士のそれと同樣である。防人の氣慨は今日もなほあざやかに傳統せられてゐる。

かくて九州に赴いた東國の兵士らは、此所に數年を駐在して、屯田兵のごとき生活を送り、中には九州に住みついた者もあるであらうが、又長い留守をあけた懷かしい鄕國へと歸つて行く。純朴な東國の若い農民たちは、かくて邊防守備の大任を果すのである。それは妻子を愛惜するよりも、より多く父母の膝下にあつて、特に母親に懷かしみを持つ年若い青年たちであつた。

さういふ防人の人たちに對する理解は、かつて防人引率の任に當つた大伴家持によつて深い同情と美しい愛情とを以て、示されてゐる。日本には國々は多いが、就中「鳥が鳴く東男子は、出で向ひ顧みせずて、勇みたる武き兵と」して、九州鎭護の任に命じられたまに〳〵「垂乳根の母が眼離れて若草の妻をも枕かず」難波から九州へ舟出して、無事に早く目的地に到達し、「大君の御命のまにま、大丈夫の心を持ちて、在り廻り事し了らば、恙ず歸り來ませ」と、長い年月を別れなければならぬ妻子たちは念願してゐることであらう。家持は、鄕國の人々の胸中を思ひやつて、かういふ同情ある長歌を詠じてゐる。併し、此の歌においても亦個人の離別の悲歎を越えた東國の防人の國家的な精神は、やはり明かに理解せられるのである。

六

東國の素朴な農民ばかりではなく、上古の日本國民にあつては、「大君の命かしこみ」といふのがすべての人々に行きわたつてゐた強い信念であつた。卷十三には、無名の歌人の詠み出した長短さまゝの歌が數多く出でてゐるが、その中にも「大君の命かしこみ、見れど飽かぬ奈良山越えて、眞木積む泉の川の、早き瀨に棹さし渡し」とか「大君の命かしこみ、秋津島大和を過ぎて大伴の御津の濱邊ゆ、大船に眞楫しゞ貫き」とかいふ表現も、種々見えるのであつて、すべては大君の命により、大御心にまつろひ奉る心をもつて生活してゐたのである。此の上古の純眞な國

民の心が貴い。それを和歌といふ詩形で表現せられたものが萬葉集の作品である。

此の卷十三には又、次のやうな作品もある。

次嶺經（枕詞）山城路を、人夫の馬より行くに、己夫の徒歩より行けば、見るごとに音のみし泣かゆ、そこ思ふに心し痛し、垂乳根の母が形見と、あが持たる眞澄鏡に、蜻蛉領巾負ひ並め持ちて馬買へわが夫

又これには次のやうな短歌が附いてゐる。

泉川渡り瀬深みわが夫子が旅行き衣裾濡れんかも

眞澄鏡持たれど我は益なし君が徒歩より難みゆく見れば

馬買はば妹徒歩ならんよしゑやし石は踏むともあは二人行かむ

此の長歌は、貧乏で馬を買ふことさへ出來ぬ夫に對して妻のうたつた歌である。自分の夫は山城に用事があつて、奈良の方から行き通うてゐるのだが、他の人々は馬で行くのに、自分の夫だけは徒歩で行くのを見ると、實に自分の胸が痛くなる。母の形見の品物としてもらつて來た鏡と女の裝身具である領巾とを持つて行つて、馬を買つて來て下さい。夫が苦しむのに、このやうな品物を持つてゐても、自分は少しも嬉しくないからと、妻がその眞情を夫に訴へる。それに對して夫は、最後の短歌においてから答へてゐる。自分が馬を買つて、これに乘つて行くとしても、妻はやはり徒歩で歩かなければなるまい。だからやはり二人で石ころ道でも歩いて行かうと、妻を慰めて、これもその衷情を披瀝してゐるのである。此の妻の歌は後世、山内一豐の夫人の美談と云はれるものの先蹤で、日本婦人の美點、長所を發揮し、その犧牲的精神がおのづからにして表現せられてゐるのである。

卷十六には、又、能登や越中の民謠、或は門附歌といふやうなものが出てゐるが、その能登國の歌には、

加島嶺の机の島の、小螺をい拾ひ持ち來て、石持ち啄き屠り、早川に洗ひすゝぎ、辛鹽にこゝと揉み、高杯に盛り机に立てて、母に奉りつや愛子の刀自、父に奉りつや愛子の刀自

といふ民謠があるが、これは食物を得て來て、調理してまづ第一に父母にさし上げたか、きつとさうしたに違ひあるまいと、貧しい親子の間の樂しく美しい生活をうたつたものである。

これらの歌のやうに、民衆層の作の間には、親子夫婦の愛情の流露したすぐれた歌が見られる

のであつて、これが取りも直さず、上古の民衆生活の僞らぬ姿である。此の人情に富んでゐる點が、あらゆる階層の、わが國民の精神の眞の姿でなければならない。

さうして、此の國民の愛情深い心は、大君に對しまつる時、最も感激的に爆發する。藤原宮の御造營に奉仕した民衆の一人は、かううたつてゐる。「安見しゝわが大君、高光る日の御子、荒栲の藤原が上に、をす國を治し給はんと、大宮は高しらさんと、神ながら思ほすなべに」天地の神も、此の思召に協力申し上げて、檜の木材は近江の田上山から切り出されて、宇治川に浮かべ流される。「そを取ると騒ぐ御民も、家忘れ身もだな知らずに、鴨じもの水に浮きゐて」その木材を筏に作り、運搬するために勞力を惜しまないのである。此の　大君の御爲めには、「家忘れ、身もたな知らず」水中に入つて勞働を奉仕するといふ御民の自覺、國民感情の發露が、此の歌の主眼で、われわれの心を切實に打つ所以である。

同じ事は、奈良宮御造營の時にもあつた。これもやはり名も知られぬ民衆の一人の歌である。「大君の命かしこみ、和びにし家を放りて」泊瀬から、川を船に乘つて出で、漸く奈良の都の佐保川に到着したのであるが、それは丁度嚴冬の時分であつたと見えて、「わが寢たる衣の上ゆ、朝月夜さやかに見れば、栲の穗に夜の霜降り、磐床と川の氷凍り、さゆる夜を憩ふことなく、通ひつゝ」帝都の家の造作に從事したのであつて、これらの苦痛に堪へて勞働の奉仕にいそしみ勵んだのは、全く「大君の命かしこみ」といふ、大命に感激恐懼し奉る國民の純情によるのである。

此の崇高なる國民感情の傳統は永久に、純粹の心を以て、わが國民の間に固く強く保たれて行かなければならない根本精神である。

萬葉集は、此の重大な問題を、常にわれ〳〵後代の國民に敎へ諭して、道德を俟たず、國民の歸趨を正しく示すが故に、貴いのである。さうして、それが雄勁な格個や美しいリズムのもとに表現せられてゐるが故に、永久に國民の愛誦すべき古典たるのである。

七、神樂歌

一

神祭りは、わが國家とともに始まり、永遠に續くべき行事である。かつては、祭祀が、同時に、國家の政治の意義を有してゐたものである。國家の體制の甚だ複雜な組織を持つやうになつた今日においても、國民の一人一人が、此の心持を持ち續けてゐるならば、政治と國民生活が遊離してしまふはずはないし、又、政治を私する特別の人々が現れて來るはずもない。政治の墮落は、實に此の精神の喪失にあつた。神聖なる祭祀の心持を以て、政治も亦執られなければならない。

祭祀の際にうたはれる歌謠が神樂歌である。神樂歌は上古よりあつたに違ひない。併し現在殘つてゐて、普通神樂歌と稱される一類の歌謠は、奈良時代から平安時代の始めにかけて現れたものである。それは、その當時から、今日にいたるまでも、なほ宮中の御祭祀に於いて奉奏せられてゐる。さうして、ひとり歌詞の古きをもつて貴むべきものがあるのみではなく、最も古い時代の宮廷の雅樂の歌唱がそのまゝに殘されてゐるといふ點についても、貴むべき理由がある。併し何よりも、此の歌をもつて、宮中の奥深き所に、森嚴な御祭祀の嚴修が長く行はれて來たといふ事實が、此の歌謠の傳統的な價値を一層增すのである。雅樂の神樂歌は、さまゞの國の歴史を見まもつて、今日にいたつた。さうしてこれからも、毎年恒例の御神樂として行はれるほか、國家の歴史にかゝる大事が遂行せられて行く時、宮中においては、御祭祀が執行せられ、わが國を守り給ふ皇祖の御靈に捧げ奉るに、此の御神樂をもつてする古來の傳統は、必ずや繼續して行かれるであらう。かくて、祭は同時に政である意義は、現在においても根本的には、やはり確然として存在してゐることを知るのである。それが即ち、わが國の國體である。

神樂歌は、夜を徹して行はれる。暗黑であるからして、庭に篝火をする必要がある。此の時にうたはれる歌が庭燎（ていれう）の歌である。

その後に、神樂に携はる人々の頭である人長（にんがやう）といふ者が、手に榊をもつて舞ふのにあはせてう

たはれる採物の歌がある。更に採物の後には、大前張、小前張、千歳、早歌、明星、雜歌などと云つて、なほさまざまの歌がうたはれる。此の採物の歌が、眞實に神をほめたゝへ、神を對象としてうたひまつる歌謠となつてゐるが、それから以下の歌は一般世間でうたはれてゐた風俗歌即ち民謠とか流行唄とかいふものを用ひてうたつたのである。

神前において、さうした民間の歌謠を奏するといふのは、いかゞはしく思はれるかも知れない。併しそれは神祭りの眞實の意義に徹しない流俗の見解であらう。わが國の神は、親しく國家と國民の一人一人を見そなはして居られる。それは直接に國民の生活に關聯し、更に、精神生活の奥にまで深く入り込まれるのである。かやうにして、國民は、その心の喜び憂へを直接に神に訴へまつる事も出來る。さうして、國民の精神生活を端的に表出したものが歌謠であるとすれば、民衆自身が持つてゐる歌を用ひられて、宮中においても奏されるといふことには、貴い意味が含まれてゐるものと云はなければならない。そこに神樂の本質があるとさへ云ふことが出來る。

採物の歌は、八種採物と云つて八種の種類から成つてゐる。榊、幣、杖、篠、弓、劍、杵、杓の八種がそれで、此の他に、ずつと古くは葛もあつた。これらの器具はいづれも神祭には必要なので、それぞれに神聖な意義を有してゐるのである。さうした原始的意義を殘しつゝ、神樂の歌は、神に親しみまつる喜びをうたつてゐる。

榊葉の香をかぐはしみ尋め來れば、八十氏人ぞ團欒せりける團欒せりける（榊）

は、神前にあらゆる部屬、すべての階層の國民たちが集まつて和樂團欒してゐる、わが國家の本然の姿をうたつたものである。

幣にならましものを皇神の、御手に取られてなづさはましを馴附さはましを（幣）

は、神に對しまつる限りなき信愛の情が表されて、國民の優しくも美しい心がうたはれてゐる。

四方山の人の守にする杵を、神の御前に齋ひ立てたる齋ひ立てたる（杵）

にいたつては、國民の甚だ貴いものでさへも、神の御前に捧げて悔いない、信敬の情が示されてゐる。

かうした、ひたすらなる信仰の念がうたひ出されてゐる間にあつて、

白金の目貫の太刀を下げ佩きて奈良の都を練るは誰が子ぞ練るは誰が子ぞ（劍）

のごとき、艶麗寛濶な帝都の奈良をうたつた歌も見える。此の歌などは、明かに奈良時代の歌謠であつて、當時の都大路を悠揚たる態度で散歩する貴公子の姿が眼に見えるやうにうたはれてゐる。それとともに、奈良の都の美しさ、壯嚴な景觀もそこに象徴せられてゐるのである。奈良の都は、わが國が始めて整へた都市であり、外國のそれにもまさる壯大な帝都であつた。かういふ帝都が營まれるやうになつたのは、國運の隆盛を物語るもので、そこまで國家は、文化的にも進歩して來たのである。併し、かうした進歩發達は、全く目に見えぬ祖神の恩籠による所が多大であるに違ひない。さういふ感謝の念からは又、自然にこれらの歌謠を神の御前でもうたふやうになる。神樂歌における世俗の歌謠の介在は、國民の個々の私の生活が、神の御前に公表せられて、公の生活と融合する所に、その意義があるのである。

二

平安時代の雅樂の神樂歌と一類のものに、催馬樂（さいばら）、東遊（あづまあそび）、風俗歌といふ歌謠があり、神樂歌とともに四種類に分たれてゐるが、此の中、催馬樂と風俗歌とは、當時一般に流行してゐた唄で、神樂歌と東遊とは、神樂の時に奉奏せられる歌である。さうして、神樂歌は主として宮中で行はれ、東遊は、宮中以外の諸社で行はれた神樂の歌である。賀茂神社とか日吉神社とか、さういふお宮で行はれた。さうして催馬樂や風俗歌の方は、むしろ酒宴の興などを添へるために用ひられた唄であつたが、此の兩方の歌は、互に入り交つてゐる。催馬樂の中には、大嘗會の儀式にうたはれる唄も入つてをれば、風俗歌の中には、地方のお宮でうたはれた神樂歌から出てゐるのではないかと思はれる歌も見られる。又、神樂歌の中には、催馬樂や風俗歌から取り入れたものもある。

つまり、神聖であると思はれる神事の唄と、酒興の歌と、はつきり區別してないやうに思はれるが、併し實に此所にわが國の民族精神が存在するのである。大體、酒宴といふのが、現在のやうな放恣な淫酒亂盃に成り下がつたやうなことは、古くは見られなかつたのであり、酒興の唄といふのが、現在のやうないたづらな放歌亂舞とも亦異つてゐたのが、古くからのしきたりであつた。その上、神事といふのが神前に、神酒を具へ山の幸海の幸を捧げて行はれること、酒宴の席のそれを思はしめるのが、これ又古來のわが國の根強い傳統であつて、人々の心持では二つを全

然別個の行事として區別してゐたのではなかつた。かくてこそ、酒宴も亦、神聖にしてお互に胸襟を開きあふ、公的な意義を帶びて來るのであつて、神前に奉奏する神樂の舞や歌により、人々の心持が神に近づきまつるごとく、酒宴の席に於ける人々の天眞なる醉興は、やはりそれによつて、神に近づくことが出來る一つの方法であつたのである。

わが國において、古來、神樂歌の類が、一般民間の唄と殆ど何の區別もないほどに、世俗的な傾向を帶びてゐるのは、此の意味において理解せられるべきで、それほどに、神と一般の國民との生活が融合してゐるのであり、特に、これを宗教として、別物扱ひにし、人々の日常の生活からこれを區別して離し去るやうなことは、わが國の神ながらの道の甚深の意義を忘れたもので、神道即ちわが國家といふところに、わが民族精神の存することを認めなければならない。神樂歌においてもまた、此の意味で民族文學としての性質が理解せられなければならないのである。

古事記などにおいて、性的なことに觸れて、あけすけにうたつた歌や文章があるが、それは、あまりに解放的であるために、明朗であり、又、健康な感じさへ與へられる。これが原始性を持つ民族文學の一つの特徴でもあるのであつて、これを不健全な頽廢に導いたのは、むしろ外國思想に基く近代文學の罪科であつた。此の特徴はなほ萬葉集から、神樂、催馬樂の歌の中にも引き繼がれてゐる。すべて、これらのものを、いたづらに嫌惡したり、抑壓したり、或は見て見ぬふりをしたりするのは、わが國の文學の傳統としては、眞實の姿を捉へる所以ではないのであつて、むしろさういふ態度には種々の外國思想の影響が認められると云つてよい。純粹の民族文學の眞相は、神樂歌が酒興の唄に連接したり、又それらの中に、性的な內容の唄が見出だされたりする所に求められるといふことを知らなければならない。

催馬樂の中には、

新しき年の始めにヤかくしこそハレ、かくしこそ仕へまつらめヤ、萬代までに、アハレソコヨシヤ萬代までに

といふ、聖武天皇の天平十四年の正月十六日に琴に和してうたはれ、自後、大歌所でうたひつがれた芽出たい歌も出てゐるが、此の歌などは、いかにも年頭にあたり、忠君奉公の誓ひを念ずる民族精神が赤裸々に現れてゐて、歌謠の民族文學に占める高い位置を十分に示すものである。

七、神樂歌

筑波根のこのもかのもに蔭はあれど、君が御蔭にます蔭も、ます蔭もなしヤ

といふ、大君の御恩德の廣大にして、國民の仰がざるものなき國民生活の眞情をうたつて、わが國家の本質を貫く歌も見られる。此の歌は常陸の方面の民謠として歌はれたのであつて、東國の邊隅にまで、此の精神が行きわたつてをり、民謠にまでうたひ出されてゐたといふことは、萬葉集の東歌で、防人たちが「大君の命かしこみ」はるばると九州にまで移つて行つた、かの上古の純朴な忠節の信念が廣く國民精神の間に生きてゐた事實を知るに足る。これらの兩首の歌は、又古今集にも掲げてゐる所である。

かうした本質的な歌から、

酒をたうべて、飲べ醉うて、たむと懲りんぞ參うで來る、よろぼひそ參うで來る、タンナタンナタリヤランナタリチリラ

と輕快な調子のいかにも小唄風な感じのする歌にいたるまで、これらの歌謠の底に流れてゐる、民族精神は、わが國民の間に、現在までも普遍的に存在するものが多い。そこから民族的な共感が廣く得られて、民族文學の上でも、重要な意味を持つものと認められるやうになるのである。

八、古今集

一

古今集は、わが國歌の源である、

わが君は千代に八千代にさゞれ石の巖となりて苔のむすまで

を收めてゐることによつて、民族文學の歴史の上から、到底逸する事の出來ない意味を持つて來る。此の歌は、賀の部に出てゐる詠人知らずの作である。詠人知らずの作品は、有名な、ある代表歌人の作り出だした歌といふのではなく、それは名も無き國民の一人が作つた歌であるといふ事を意味する。同時に、古今集においては、詠人知らずの歌は、多く民衆の間にうたひ傳へられて、世に流布するにいたつた民謠の類であるから、この歌も亦、いつとなく民草の間にうたひ出されて、世に廣まり、國民の歌として、普ねく行はれてゐた歌なのであらう。古今集では、こ

の歌を賀歌の巻頭に掲げてゐることも、その貴び愛されてゐた所以を示すものであらうと思ふ。

この歌が、當時廣くうたはれてゐたことは、たゞ古今集ばかりではなく、古今集の主なる撰者であつた紀貫之の娘の撰と云はれる紀氏六帖、即ち、古今和歌六帖の祝の歌の中にも、

わが君は千代にましませさゞれ石のいはほとなりて苔のむすまで

と掲げてゐるのによつても明かである。この歌は、古今集以後にも、いついかなる時代においても、うたはれて來た。また、種々の文學にも引歌として用ひられて來た。平安時代の後半期に行はれた朗詠といふ歌謠の中においても、この歌はうたはれてゐて、その朗詠の歌では、いつか初句の「わが君は」といふ句が「君が代は」に變つてゐるのである。それは多分中世期に入つてからの事ではないかと想像せられる。

中世期にも、この歌は、種々の歌謠で用ひられた。たとへば、猿樂とか田樂とかいふ、能樂の中にも出てゐるし、又、僧侶が種々の歌舞演劇を行つた、延年舞の中にも、これが見える。近世に入つては、近世の歌謠の源である隆達小歌の中にも、これがうたはれ、隆達小歌集においては、常に巻頭に、この歌を記して、祝賀の意を表してゐるのである。それ以後、船唄の中にも、これをうたつた。中國地方で行はれた、播磨吟と稱する船唄の、切歌といふ小歌の中に、巖と題して

君が代は千代に八千代をさゞれ石、巖となりて苔のむすまでも、嬉し目出たの若芽も榮え葉も茂るとうたはれてゐるものなどが、それである。或は又、一絃琴の歌としても用ひられ、或は長唄から琵琶歌の類にまで、普くこれが入つてゐるのである。もつて、明治以前に、この歌が、いかに弘く國民の間に傳播し、長い歴史をもつていついかなる時代にも愛誦せられて來たかといふことがわかる。

この歌が明治になつて、國歌に制定せられるにいたつた直接の關係者については、種々の說が傳へられてゐる。併し、その歌詞を選ぶにあたつては薩摩藩の人々が關係し、又、薩摩では、古くから行はれてゐた薩摩琵琶の蓬萊山といふ曲の中にも、この歌が用ひられてをり、同地方に行はれる鄕土舞踊の中にも、この歌をうたふものがあつて、薩摩の人にとつては、この歌が親しいものとなつてゐる上に、その歌詞の內容から云つても、最も適當してゐる歌であつたから、これを選び出す事となつたのであらう。

明治の初に、英人フェントンが、はじめて、この歌に曲をつけて、明治三年九月の越中島における御親閲式に奏されたのであるが、それは極めて無趣味、無内容な曲となつてゐる。それで、海軍軍樂長の長倉祐庸が改訂意見を出して宮内省式部職の雅樂課（今日では樂部と云つてゐる）でこれが作曲にあたる事になり、後に雅樂部長となつた樂人の林廣守が、その曲を撰定したのである。時に明治十三年の十月であつた。これが即ち、今日行はれてゐる國歌の曲で、まさに今日より六十年以前に當る。

明治十四年に刊行せられた文部省編纂の小學唱歌集にも亦、この歌は、

君が代は千代に八千代にさゞれ石の、巖となりて苔のむすまで、動きなく常磐かきはに限りもあらじ

といふ歌詞となつて入つてゐるが、その曲は、現在の國歌と全く違つて、フェントンの作曲同樣味のない曲である。

實に、現在のわが國の國歌は、以上のごとく、遙な昔に、國民の間にうたひ出された、大君を讃仰しまつる精神の凝縮であり、世界の國歌においても、これほど古い歴史を持つものは他に見ない。又その曲は、洋樂輸入の時代にあつても、わが國人によつて、しかも宮内省の雅樂を傳へてゐる人々により、平安時代以來長く傳統せられて來た雅樂の音律を用ひて、即ち壹越調律旋といふ曲調で作曲せられてゐるのである。あの莊嚴にして、國民の心を深く底から搖がさずにはをられない、嚴肅な曲調は、その歌詞とともに、われら國民の間に、千年の昔から流れてゐる傳統の力强い血潮が、魂をゆすぶるところに成つたものである。わが國歌が、諸外國の國歌に見ることの出來ない無比の價値が此處に存する。

明治十三年十一月三日の天長節に、はじめて此の曲が奏されて後此所に六十年、昭和十五年の明治節は國歌の歴史より見ても記念すべき祝日であつた。この意味で、特にこの國歌を初めて記した古今集の價値をも認めたいと思ふ。

二

古今集の「わが君は」の歌詞が、後に、いつか「君が代は」となつてゐる所には時代の變遷が認められる。平安時代で、「わが君」と申し上げる方は、一天萬乘の君よりましまさない。併し

武家時代となつて、武士の主從の間に、わが君といふ語が普遍化するにいたり、「わが君は」を改めて「君が代は」とすることにより、國家全體を治め給ふ　天皇の大御代を壽ぎまつる意味を表はすことになつたのだと解されてゐる。それは同時に「わが君は」といふ親愛の情を含めた表現から、もつと公的な、國家的な心持を意味する表現に移つたのだともいふ事が出來る。

かやうにして、この歌の意味は弘くなり、その價値も亦一層まさつたのであると云づてよい。併し「わが君は」と申し上げる、親愛の心持は、これでは薄くなつてゐるかに思はれる。たゞこれによつて私の内なる心の切なる表現が、もつと公的な意味を持つて來たところにその意義を認めなければならない。

古今集は、この國歌の一首を持つてしても、歴史的な價値があるが、しかも、その内容について見れば、決してこれ一首にとゞまらない、民族精神の詩的な表現を他にも種々見出だすことが出來る。例へば、同じ賀の歌に、

わたつみの濱の眞砂を數へつゝ君が千とせのあり數にせん
鹽の山さしでの磯にすむ千鳥君が御代をば八千代とぞ鳴く

などと、わが君をほめたゝへまつる詠人知らずの歌が、「千代に八千代に」の歌に續いて出てゐるが、これも亦、「千代に八千代に」の歌と同樣、一般國民の中に流傳せられ、愛誦せられた歌謠であつた。さうして、これらが、決して目上の人を「君」とよんで、その人に對する祝賀の意味を含めたものではなく、國家全體に關する歌であり、從つて、この「君」が、單なる目上の人に對する敬稱ではなく、一天萬乘の大君を申上げたものであることは、「君が御代をば八千代とぞ鳴く」の句によつて明かである。又、此所に既に「君が御代」と、天皇のしろしめす大御代を壽ぎまつる言葉も出てゐるのであつて、「我が君は千代に八千代に」が「君が代は千代に八千代に」と變化する精神は、早く古今集自身が持つてゐた。さうして、この國歌に用ひられた「我が君は」の歌が「君が代は」といふ發想になつたのも、既に平安時代の末には、そのやうに言葉をかへた歌が行はれてゐたと思はれる證跡がある。

かやうにして「我が君は」と親しみまつる精神が私的な情愛を含めてゐるとすれば、「君が御代をば」と云つたのは、公の心持で、此の公私の兩面が一切の精神として生かされたもの、それが即ちわが國の民族精神であり、その文學として生かされたものが、即ち民族文學の本質であると

すれば、古今集はまさに、さうした性質を持つ文學の書でなければならない。

この精神は、なほ、卷二十の大歌所で古くよりうたひ傳へられて來た、大直日の歌と稱する祭の歌に、

あたらしき年の始にかくしこそ千年をかねて樂しきをへめ

とある所にも、或は、東歌として東國地方の民謠が集められてゐる中の常陸國の歌に

筑波根のこのもかのもに蔭はあれど君が御蔭にます蔭はなし

と出てゐる所にも、流れてゐるのであつて、これらの歌は、又、神樂催馬樂東遊風俗として、既に述べた歌謠の中に、共通するものが見出だされるのである。

卷二十には又、神樂の歌詞も收めてゐるし、大嘗會の時に奏される風俗歌も載せてゐるが、それらの風俗歌が、

君が代は限りもあらじ長濱の眞砂の數はよみつくすとも

と、新政の御代の長久を祝し奉り、或は、

美濃の國關の藤川絶えずして君に仕へんよろづ代までに

のごとく　天皇に仕へまつる誠心の決意を披瀝した歌であるのも、まことに當然な賀頌であるが、併し、古今集以後の勅撰集では、かういふ精神が次第に稀薄となつてゐる。さうして、古今集の大嘗會の風俗歌にも、既に「君が代は」と廣く大御代をたゝへまつる思想が現れてゐるのであつて、公の精神は、古今集を流れてゐる、一つの著しい民族文學としての特色である。

たゞ古今集に至つては、上古の明朗潑剌たる積極的精神に對して著しく消極的な厭世出離思想が強くなつて來た。

いかならん巖の中に住まばかは世の憂き事の聞え來ざらん

のごとき歌は、上古においては殆ど見出だすことが出來ないのである。さうして、この心の流れは長くわが國民の精神生活の一部を支配することとなつた。それは佛教思想の影響もあらうが、世のさま〳〵の動搖に煩はされず、心は純粹に保たうとする淸い動機に出てゐるもので、單に個人的と云つて斥けてしまふことの出來ない公的な意味を持つてゐることは、奈良時代から平安時代に移る社會の變動に伴ひ、藤原氏の權力の伸長と他の諸氏族の衰退沒落を見た歴史に照し合せて、この種の歌の持つ裏面の性質を考へることが出來、又それらの歌の詠み出されたる原因につ

いて思ひ當るものがあることを知るべきである。

とにかく、以上のやうな無名の國民歌人が多く收容せられてゐるといふ所に、古今集の、なほ萬葉集につながる民族文學的意義が見出されるとともに、そこには既に平安時代的な消極思想、個人的思想の興起してゐることも見のがすことが出來ない事實である。併し、「小野の千古が陸奥の介に罷りける時、母の詠める」

垂乳根の親の守りと相添ふる心ばかりは塞きなとどめそ

のごとき暖かい親子の情愛は、上古以來の歌の內面に傳統せられてゐる家庭愛の發露として、わが國家の根本と粘び合せて考へられなければならないものであらう。

九、今昔物語

一

國民の最も多くの部分を占める人々は、文字を持つてゐなかつた。併し文字を持つてゐないといふことは文學を所有しないといふこととは甚だ異る意味を持つとともに、又、文字を持たないといふことが、直ちに文化を持たないといふ事を意味するものでもない。これは明かな事實であるに係はらず、往々にして混同せられ、誤解せられてゐるところである。

古代においては、特に民衆は文字を知らなかつた。しかもこの多くの人々が國民を構成するのに大切な要素でもあつた。農村漁村に勞働する純朴な民衆が、わが國家の大御寶と呼ばれる人々であつた。この人々の間にも、やはり文學は行はれてゐたのである。それは必ずしも高度に洗錬せられた文學ではないかも知れないが、しかも純粹であり眞實であり、洗錬せられた文學の根本

となるものであつた。もし、かういふ民衆の文學に根を下さない、もしくは、それらから絶縁した、いたづらなる洗錬せられた文學といふものが存在するならば、それは空虛な内容のものとして、高い文學的價値が置かれる作品ではない。

尤も、此所で文學に關聯して民衆のことを云つてゐるのは、決して、民衆それ自身を作品の中で取り扱ふことを意味してゐるわけではない。さういふ民衆の間に生れ、育てられた文學の持つ精神、それらの文學の持つ純眞な生命に根ざさない文學が、文學として高い意義を持ち來たさないことを云つてゐるのであつて、實に民族文學としての眞實の意義も亦、この民衆の文學の成長したものに置かれるべきであり、民族文學の中心においては、洗錬せられた文字も、文學を知らない民衆の間の文學も、共通した心を持ち、同一の魂から出でたものでなければならないのである。

かくて、文字を持たない人々の間に行はれてゐる文學は、文學の大切な根として、重要な意義がそこに見出だされるのである。かういふ文學の、詩的方面の表現を歌謡と云ひ、物語的な表現を持つものを説話と稱する。歌謡については、既に述べた所が二三にとゞまらない。説話文學については、古事記、日本書紀に記された上古の口承文學がそれで、これ又、既に述べた所であるが、文字を持たない人々の文學が、實にわが國家の根本の歴史に觸れ、國體の大本を傳へたものであることによつて、それらの文字を持たない國民の間に生育せられた文學の、いかに重要な價値を持つものであるかが、明かに知られるであらう。

われ〳〵は、この種の、國民の最も低い階層を構成する人々の間に生れ出でた文學を尊重しなければならない。これは民族文學の大切な要素であり、高い文學にまで亭々とした大樹を聳立せしめる力強い根である。しかもこの樹木は廣く遠く深く、民衆の間に根を張つてゐるのである。他の國々にもまして、わが國においては、これが國民の間の隅々にまで行き渡つてゐる。それ故に、一層文學の根として榮養力に富み、成長力を持つものなのである。わが國において、健全な民族文學の存在が認められるのも亦、この民衆の間に、口承文學の普く及んでゐる事實にその根本の原因が求められなければならない。

現在においても、これら民間の口承文學を採集して、文字に移し世に示された民衆の文學は實に夥しい數にのぼるのであつて、諸外國では、これほどの量を集めることが、甚だ困難な狀態にあるのに、わが國においてのみその最も豐富な物語の數々を示すことが可能なのである。

かやうに民衆の文學に甚だ惠まれてゐるわが國においては、立派な民族文學を成長させ、洗錬せられた國民文學を誕生させる地盤を有してゐるのである。この口承文學の記錄せられたものは、ひとり今日において豐富なるのみならず、そも〳〵上古の記紀以來、數々これが存在してゐる。

わが國の文學の歴史において、說話文學と稱される系列の文學が各時代にわたつて一つの流を形作つてゐるのは、さういふ民衆の文學が、採集せられ記錄せられたもので、われ〳〵はこれによつて、民衆の文學の上古を知ることが出來、又、それがいかに根强い傳統をもつて、長い年代を經て、今日にまで傳へられて來てゐるかといふ事實を知つて、驚かされるのである。さうして、さういふ强靱な傳統の力を持つが故に、さうした民衆の文學は、原始的な民族文學の純粹性を遙か後代にまで傳へるものとして、わが民族の文化の眞實相を考へる上には、甚だ大切な性質を有してゐる。說話文學が民族文學の上に持つてゐる價値は、その點にも亦認められなければならない。

口承文學を文字に移すのは、文字を解することの出來る有識者の作業ではあるが、併し、これはむしろ、文字を解するものと、文字を解しないものとの、緊密な融和のもとに行はれるのでなければ、その效果を發揮することが出來ない。さうして、この兩方の部面が、全く一致した操作として、說話文學は誕生するのであつて、さういふところに、上下相和し、有識者も一般民衆も協調した、國民一體の文學の存在が認められる。說話文學の價値を持つ所以は又、この點にもその理由が存するのである。

二

わが國において說話文學が現はれた最初のものは今昔物語であると云つてよい。古事記のごとき書は、これを單なる說話文學などと云ふ解釋で取扱ふことは甚だ不當であるとともに、又不可能である。それはもつと根本的な意味で、國家の書であり國民の書であつた。

今昔物語以前には、日本靈異記、詳しくいへば、日本國現報善惡靈異記といふ書が現れてゐて、民間の說話や傳說を集めてゐる。その中には上古以來の有名な話も見えるのであつて、たとへば雄略天皇の御代に、小子部栖輕（ちひさこべのすばる）が落雷のあつた時、命を奉じて雷を捕へたが、それがために死ん

でしまつたので、その忠信をたゝへて落雷の箇所に彼の墓が作られた。今の雷岡は、即ちそれであるといふ有名な話も、この書の最初に出てゐる所である。栖輕は、さういふ勇敢で忠義な、上古の臣民の一人であつた。

かつて　持統天皇が　雷岳（いかづちのをか）に御遊ましました時、御供の柿本人麿が詠じた、

大君は神にしませば天雲のいかづちの上にいほりせすかも

も、この場所において詠まれた歌であつた。

或は又、皇極天皇の御代に、但馬國の人の娘が鷲にさらはれ、その後八年たつて、丹波國で、この娘が救はれ成長してゐるのに偶然に出あつて、親子が廻りあふやうになつたといふ奇談は、これも始めて、本書に出て、その後、今昔物語にも採られ、又、扶桑略記といふ漢文で書かれた歴史の書、水鏡といふ假名で書かれた歴史の文學書にも記されてゐる有名な話である。江戸時代でも、山東京傳といふ戯作者などは、その作になる小説の優曇華物語の中に、この話を材料に用ひてゐる。奈良の良辨杉の傳説もこれで、かういふ有名な話の源も、やはり、この日本靈異記から出てゐるのである。いかにも親子の純情が、二人を際會させるやうになつたといふ、偶然を轉じて必然の運命にならしめた民間の美しい物語であつたから、長く後世にも傳へられたのである。

この話などは、單なる説話ではなくして、實際にあつた事と思はれ、近頃でも、鷲が赤兒をさらひかけた話は、山間の部落では、實話として存在してゐるのである。日本靈異記では、その年月から場所までも、明かにしてこれを記してゐるので、丁度、大化の改新時代にあたる民間の人情話が、千三百年後の今日にまで綿々として傳へられてゐるのは、美しいものを長く傳統して行かうとするわが國がらの一つの現れとも見られて、宮廷の藤原鎌足の功業などとともに民間の名も知れぬ田舍人の、かうした話にも、上古の素朴な人情に打たれて限りなき懷かしさを感じるのである。かやうにして、宮廷の話は種々の歴史が傳へて來るが、民間の話は多く知られることがない、その遺珠を後世にまで示してくれて、上古の國民たちの、芳香と光輝に滿ちた心の生活を、今日まで傳へてゐるのが説話文學の持つ價値であり、民間に根ざした文學の有難さでもあつた。

かやうに、日本靈異記も國民のさまゝの生活に觸れた一面は持つてゐたが、件しその根本の目的は、佛教の信仰に即した因果話を集める所にあつて、書名に現報善惡と附けてゐるのも、善因善果、惡因惡果の應報を現實に知らせるためであつた。或は、僧侶の説教の例話として引かれ

たりしたものではないかとも思はれる所があつて、內容がある一方の傾向に片寄つてゐる。

それに比べると今昔物語の方は、よほどその範圍が廣くなつて、世間話の類が甚だ多いのである。尤も、これももとは佛敎の話が根本で、叡山の僧侶の作であらうなどとも云はれてゐるが、その原形に對し、段々後人が種々の世俗の話を附け加へて行つたために、民間の生活に關して種々の面白い話を傳へることが出來たのである。

天竺即ち印度、震旦即ち支那、本朝の三部に分れてゐるのも、天竺、震旦では佛敎の說話が主となつてゐて、やはり日本靈異記と同樣に佛敎的な內容を、元來は主としたものであり、又、日本靈異記と全く同じ話も見えてゐるので、その影響のもとに作られたものには違ひないが、この書の價値は、實はその日本靈異記の影響の外に出た所にあつた。さうして、そこに日本的な國民の生活を描き出した特色も認められるのである。

この物語の特色は、豪毅で朴訥な所にあつた。平安時代の上流社會に行はれた物語が優美典雅で、女性的な美しさに滿たされてゐる作品であるとすれば、この物語は、民衆社會の力に滿ちた文學であつた。彼の感情に訴へる所が多いのに對して、これは意志の文學であつた。明かに平安時代の文學の一般的な通念に對して、今昔物語は異端者であつたのである。併し、この異端者は、平安時代が過ぎて、やがて武家の世の中になると、もう異端者ではなくなつた。今昔物語的な力强い文學が、當時の文學の常識となつた。民衆の生活が、種々の文學の表面にも現れて來て、說話傳說の文學が、その時代には甚だ盛んとなつた。今昔物語は、それらの文學の先驅者であつたのである。

三

平安時代の文學が一般に、優美な情調や物のあはれを喜んでゐる時、今昔物語では素朴な力の文學が强調せられてゐた。當時の多くの作品が男女の關係を情痴に近いまでの筆致で書いてゐるのに對し、今昔物語は雄々しい鬪爭と節義、廉恥の世界を取り扱つてゐた。公家、廷臣の生活に對して、武士が文藝の世界に登場して來たのも、この物語が最初であると云つてよい。つまり、當時のすべての文學に對して、今昔物語が示すものは全く違つた世界であり、舞臺であり、登場人物であつた。もとより一般の物語と共通する部分もあるが、しかも、これに對する態度はやはり

甚だそれより遠いものがあつた。

關東に箕田の源二と、村岳の五郎といふ二人の武士があつた。互に勢力を爭つて仲が惡くなり、各家來を率ゐて戰ふことになつた。併し、二人は、その實力を試みるために一騎打の勝負を決することに定め、馬に乘つて馳け廻りながら、互に相手を射つた所、いづれも、巧に矢から身をかはしたが、その矢は、相手の急所を射拔く所に當つてゐた。これによつて、相方とも腕前のすぐれてゐること、又、互角の勝負であるといふことがわかり、その後は互に相手の力量を認めて仲よく過したといふ、いかにも關東武士の剛毅率直な心を描き出した物語などは、到底、宮廷の女性によつては書き現すことの出來ない世界である。

袴垂といふ盜人の大將が、立派な着物を着て笛を吹きながら、そゞろ歩きしてゐる藤原保昌を强奪しようとして、相手の物に動じない悠然たる樣子に、却て袴垂の方が氣を呑まれるといふ有名な話も亦、この物語に初めて見る所である。

强力の話の多いのも、この物語の特色として、その力に滿ちた一面を見ることが出來る。廣澤の寛朝僧正が、一人で、建築場を見廻つて歩いてゐると追剝が出たので、足で蹴飛ばすと姿が見えなくなつた。どこに行つたのかと不思議に思つたが、後で他の僧侶が調べて見ると、その追剝は建築場の高い足掛りの上に蹴上げられて引かかつてゐたといふ話。相撲取と大學の學生が喧嘩をして、相撲取の中の、特に力自慢の大男が、學生の中の背の低い男が、最も喧嘩を挑んで來るので、これを蹴倒さうとしたところ、「蹴はづして足の高く上りて、仰樣になるやうに爲るを、此の衆其の足を取りて、其の相撲を細き杖などを人の持ちたる樣に提げて」「其の提げたる相撲をば投げければ、振りぬきて二三丈許り投げられて倒れ臥しにけり。身碎けて起き上る可くも非ず成りぬ」といふやうな力比べの話。これは、かの日本書紀などにも見えて、相撲の起原と云はれる有名な當麻の蹴速の話などをも思ひ起させる民衆的な物語である。

中には、美濃の女と尾張の女とが力比べをした話であるとか、五百人力以上の力があつたといふ女の話など、女の强力譚も出て、ゐてこの物語の女性は、十二一重を打掛けて着てゐる人形のやうな、當時の物語に現れる女性と甚だ趣が違つてゐる。それは勿論、都の宮廷の女性ではなくして、素朴な田舍の女性が取り扱はれてゐるからである。

この物語には田舍の話が多い。當時の多くの物語のやうに都中心ではない。殆ど日本全國に渡

つて諸國の物語が集められてゐる。一部の都會に片寄つた、さうして田舍の人々を無理解に輕蔑してゐた當時の多くの物語とは、全く傾向が違つてゐる。併し、そこから健康な、同時に明朗な、力强い國民生活の息吹が、文藝の面を通して表現せられてゐることが看取出來るのである。さうして、われ〳〵はいかなる時代にあつても、頽廢な一面が見られる他の側では、健康な國民生活が續けられて、これが立派にわが國を救ふ底力となるものであるといふ、わが國の尊い歴史を、文藝の中にも見出だすことが出來るのである。その點が、この物語に民族文學としての高い價値の與へられる、一つの有力な理由である。

動物の話が多いのは、民間の說話の性質として、多くありがちな事であり、又、童話的な要素も含んでゐる。特に、龜の恩返しの話が多い。これが上古の浦島傳說と結びついて、浦島が龜を救つたその報恩のために、浦島を龍宮へ伴ふといふ、後世の浦島傳說に發展して行くのである。而して、この龜の報恩譚は、もとは佛經から出てゐるのであつて、つまり、善因善果といふ、因果應報の佛敎の敎へが、深く國民生活の中に浸潤して來た結果、かういふ民間說話が多く行はれるやうにもなつたのである。このほか繼母が繼子苛めをして、却て繼母が惡い報を受けるといふ話や、猿神に女を生贄に供するのを救ひ出すといふ岩見重太郎式の物語さへ散見して、後代の民衆に親しい說話の源を、この物語の中に多くさぐり出すことも出來る。

たゞこの物語は佛敎が中心であつて、神道といふやうな、わが國家の本質に最も深い聯關を有するものを中心にしてゐるのではなく、從つて、佛敎の東漸する經路によつて、印度、支那、本朝の順序になつてゐるのは、わが國を主としてゐないやうにも考へられるが、これはむしろ、わが國を特に、「本朝」と云つて最後に置き、此所に重點のあることを示したものと解される。その中に、藤原鎌足が蘇我入鹿を誅した話や、平將門の謀叛や藤原鈍友の海賊行爲が「公に勝ち奉らずして天の罰を蒙りにければ、遂に討たれにけり」といふ事實を、各卷の始めに記してゐるところに、その國家的な意圖も、明瞭に端的に打出してゐるわけではないが、多少ともに、うかゞはれると思ふ。さうして、この時代の物語の作品としては、この程度の國家意識でも、十分に尊ぶべきものがあつたと云はなければならない。この國家意識が、國民生活に觸れたこの物語の中に見出だされるところに、その民族文學としての意義も存在するのである。

十、大鏡

一

歴史の反省こそは、國家の本質を決定し、國家の將來を想望する最も大切な鍵となるものである。併し、國家の前途を勇氣づける歴史は、歴史そのものに、魂に力强い鼓舞を與へる確信と眞實とが滿たされてゐるものでなければならない。そこに民族精神の發揮された文學性が見出だされてくる。上古の記紀の文學はまさにそれであつた。併し、日本書紀の系統を引く國史の書は、次第に文學性を失つて來た。發展的な創造性が稀薄になつて來た。さうして瑣末な行事の記錄に過ぎないやうな內容を持つにいたつた。明かに、原始の歴史的精神が、平安時代に入つて、色あせて來たのである。

この時代の末にいたつて、もう一度、文學性を備へた歴史が起つて來た。たゞそれは、古代の發展的な未來性を持つ歴史とは違つて、いたづらに過去の盛時を回顧するといふ消極的なものが多かつた。國家の前途に信賴を寄せるといふ積極性や指導性に乏しい憾みがある。榮華物語といふやうな歴史文學は、さうした性質を持つ作品である。

ところが、さういふ傾向の中にあつて、ひとり異色を持つものが大鏡であつた。大鏡は勇健、剛直な內容や表現を有する。その點で當時の一般の女性的な傾向と違つてゐる。榮華物語のごとき、女性的な歴史の作品とも亦異つて、男性的な文學である。

榮華物語は、大體、大鏡と同じ對象、同じ題材を取り扱つてゐる。兩方の作品の中心をなしてゐるものは、藤原道長が勢力を掌握してゐた　一條天皇の御代の物語である。さうして、榮華物語といふ題名は、その道長の、「この代をばわが代とぞ思ふ望月の缺けたることのなしと思へば」と自ら謳歌したといふ、その得意の榮華の生活を物語らうとする目的から出てゐる。一篇の趣旨がそこにあつた。それはたゞ一途に道長を讃仰し、藤原氏の榮華をほめたゝへる意味を持つ。

ところが大鏡の態度は、これと違つてゐた。大鏡は先づ、藤原氏の繁榮を得るにいたつた根本を考へて、「入道殿下（即ち藤原道長）の御繁榮も、何によりひらけ給ふぞと思へば、先づ帝、后

の御有様を申すなり」と云ひ、これを譬へて「植木は根を生やしてつくろひたてつればこそ、枝も繁りて木の實も結べや。然れば、先づ帝王の御つゞきを覺えて、次に大臣の御つゞきは明かさんとなり」と說明してゐる。こゝに大鏡の精神が認められる。かくて、根本なる　天皇の御稜威を明かに示し奉らんがため、最初に　天皇の御上が物語られるのである。このことが、當時の讀書階級によい精神教育になつたことは疑ひを入れない。

例へば、これは一番始の　天皇の御傳を記し奉つてゐる部分に出てゐる御事蹟ではないが、終りの方に、昔語を記した中にも　天皇の御聖德を謹記してゐるところに見える御事である　醍醐天皇の御聖德に關し奉り、

大小寒の頃ほひ、いみじう雪降り冴えたる夜は、諸國の民百姓いかに寒からんとて、御衣（おんぞ）をこそ夜の御殿（おとど）より投げ出しおはしましければ、おのれらまでも惠みあはれびられ奉りて侍る身とおもだたしうこそは。

と記し奉つてゐるのは、讀者に多くの感動を與へたに違ひない。或は又、

大方延喜の帝（醍醐天皇）の常に笑みてぞおはしける。その故は「まめだちたる人には物云ひにくし。打解けたる氣色につきてなん人は云ひよき。されば大小事聞かんがためなり」とぞ仰せごとありける。

といふ御思召についてもお傳へ申し上げてゐるところがある。

大鏡は、かういふ精神のもとに記された書である。それは必ずしも、御聖德を記し奉ることが主眼であつたわけではなく、むしろこの書の中心目的は、榮華物語と同じく、藤原氏、就中、道長の身の上にあつた。それは、本書の中にも、「只今の入道殿下（道長）の御有様の、世にすぐれておはしますことを、道俗男女の御前にて申さんと思ふが、いと事多くなりてあまたの帝、后、又、大臣、公卿の御上をつゞくべきなり」と趣旨を明かにしてゐる通りであるが、しかも、物語の中心をいづこに置くとしても、歴史を語るに、先づ國家の大本たる、皇室の御事から說き起し、しかも、それがすべての臣下の繁昌の根源でおはします點を明かにしてゐる、この作者の意識の中に、國民としての自覺が見出だされるのである。

かくて、作者は「かけまくもかしこき君の御名を申すは、かたじけなく候へども」と恐懼しながらも、畏み謹しむ情をもつて　天皇の御傳を物語り奉ることになるのである。

一體、大鏡といふ書名の意味は、鏡に人の姿の眞實がうつるごとく、國家の眞實の姿も亦、歴史によつて知り得られるとするところにあつた。かくて、本書の中にも

明らけき鏡にあへば過ぎにしも今行く末のことも見えけり

とうたつてゐるごとく、歴史に照らし出す時、國家の過去、現在が明かになるとともに、未來の行く手も亦明かにされるのである。かうした歴史上の見識と自覺とをもつて、この書は書かれてゐる。而して、さういふ意味を持つ鏡、即ち、歴史の最も重大なる點は何であるかといふと、右の歌の返歌として、

すべらぎのあともつぎ〳〵隱れなく新たに見ゆるふる鏡かも

とあるごとく、古くから傳はる良い鏡によつて、御歴代の御事蹟までも、明瞭にせられるところにあつた。かやうに　天皇の御事を特に取り上げて、歴史の意味をうたつてゐるところに、わが國家の歴史の根本義を明かにした大鏡の價値も亦存するのである。

二

大鏡の歴史文學の重要な意味は假名で書かれた歴史の書であるといふところにも見出だされる。古事記は、まだ假名の作り出されてゐない時代に書かれた書であるから、全部漢字で書いてあるが、併し、その文章は、當時のわが國の言葉をそのまゝ現すやうに、苦心して記してある。それで、見たところ漢字ばかりが使つてあるやうであるが、實は假名として使用してある文字もあり、とにかく文章そのものは、わが國の言葉「やまとことば」である。

ところがその後、歴史の書は、純粹の漢文で書かれるやうになつて、わが國の言葉で書かれたものは見出だされなかつた。日本書紀が既に、その範をなしてゐるわけであるが、とにかく、漢字漢文で歴史は書くものといふが、一般の常識であつた。併し、なかには漢文の出來ない、その方面の學識の低い人でも、やはり歴史を書く時には、漢文で書かうとしたから、自然、支那の人が讀んでは、譯のわからない變體の漢文で書いたりするやうになる。これを日本式漢文と稱してゐるが、鎌倉幕府の歴史である東鏡などは、この日本式漢文で書かれてゐる。

かういふ風潮が一般に廣がつてゐる時に、假名の歴史文學が起つて來たのである。わが國の歴史を、わが國の言葉で、わが國の文字によつて書き現さうといふのである。しかも、その言葉は

平易な日常の語である。

大鏡は、世繼の翁と云はれる、年百五十ばかりの老人と、その舊友である夏山繁樹といふ、これも年百四十ばかりの老人と、それに二十ばかりの若侍の三人の對話の形式で、歴史の話が進められる。かやうに、人々の談話、今日の言葉で云へば座談會と云つた形式で出來てゐるのであるから、自然そこに用ひられてゐる言葉なり、表現なりは、日常の親しみやすい言葉に近いものであつて、しかつめらしい漢文まがひの文章で書かれた普通の歴史書とは甚だ違つた性質を持つて來る。これらの三人の人々の中で、特に世繼の翁が主な語り手となつて、その若い時代からの昔話を人々に語つて聞かせるといふ形で、話の中心が出來上つてゐる。さうして、この世繼の翁の話を繁樹が補足し、又、若侍が調査、研究の結果、理解し得た史實から、この二人の老人の話を是正し、論評するといふ形になつてゐる。一體、老人の昔話といふものは、正確のやうで、又一方には誤りも多い。過去の記憶といふものが、必ずしも明確でないことはわれわれの經驗でも明かに實驗せられることである。それで一方では、他の種々の材料から調査、研究して行つて、この兩面から、正しい結論に到達することが必要となつて來る。さうして、そこに老人と青年との、それぞれの職分がある。

大鏡が老人の思ひ出話といふ形式だけでなく、この若侍、即ち青年が登場して、老人の話を是正し、批評して、勇敢に大膽に、自分の意見を吐露し、老人も亦それを受け入れて、圓滿に、相互の意見が流通しあひ、心が觸れあつて行くといふ結果を示してゐるところに單に、歴史文學としてだけではなく、わが國民生活の在り方を指示したこの作品の價値がある。それとともに、歴史の研究の正しい方向や、確實な方法を、明瞭に提起した、大鏡の本質が見出だされなければならない。

かくて、大鏡は、老人と青年が一體となり、老人の體驗と、青年の新しい研究とが總括せられさうして、老人の圓滿な常識と青年の冒險に富む熱情と正義心とが融和せられた作品なのであつて、これは單に歴史文學といふ方面ばかりではなく、わが國家、國民の行く手に根元となる指導性をも暗示してゐるといふ點で、大いに今日の示唆たり得るのである。

大鏡のごとき歴史の物語を世繼物語ともいふのは、主な語り手の名が世繼の翁となつてゐるところにも示されてゐるが、この世繼といふのは、御代御代が次から次へと續いて行くといふ意味

である。これに敬語をつけて、御世繼の物語と云へば、もつとはつきりする。天皇の御代の永く繼續せられる物語、それが即ち歴史の物語であつた。換言すれば、皇位繼承の御事を記しまつれば、それが歴史の意味を持つことになるといふ意味である。この事が、わが國の歴史の特異性であるとともに、その絶對的な長所、特徴である。この意味を早く表現してゐる、これらの歴史文學は、國體の本質を確實に把握してゐたものと云つてよい。それ故にこそ、世繼の翁を主役とした、この大鏡の民族文學の意義も認められるのである。

わが國においては、歴史の中心、歴史の根本は、御代々々の永久に繼承せられて行くところにその意義が見出だされ、御世繼によつて歴史が形成せられるのである。外國の思想は、歴史が、或は人民、民衆を基とするとか、或は、經濟關係のもたらした社會狀態の變遷が歴史の根本の鍵であるとか敎へる。併し、わが國においては、絶對にさうではない。歴史の中心は　天皇であらせられ、歴史的現象の根元は御世繼、即ち皇位繼承に存する。さうして、更に、この歴史の意味を、わが國だけの特殊性とするのでなく、やがて、それを世界の普遍的現象とするところに、今日のわが國の世界史的使命が存するのである。かう考へれば、大鏡の持つ歴史の暗示は、なかなか重大なものがあり、それが今日の時代性を持つ所以も理解せられるであらうと思ふ。

以上、大鏡の形式や書名の意義等からわが國の歴史の本質を明かにしたが、次に大鏡に取り扱はれてゐる具體的な内容について觸れて見たい。

三

菅公の至誠について、廣く世に傳へ、讀む者の心に深い感銘を與へたのも、この書の大きい功績の一つである。

又かの筑紫にて、九月十日菊の花を御覽じけるついでに、まだ京におはしましし時、九月の今宵、内裏にて菊の宴ありしに、この大臣の作らせ給ひける詩を、帝かしこく感じ給ひて、御衣賜はり給へりしを、筑紫に持て下らしめ給へりければ、御覽ずるに、いとどその折思し召し出でて、作らせ給ひける。

去年今夜侍清涼
秋思詩篇獨斷腸

恩賜御衣今在レ此
捧持毎日拜二餘香一

この詩いとかしこく人々感じ申されき。

と、簡潔で含蓄の深い文章で書かれてゐるのは、この有名な話を書き傳へた一節である。

この書に登場する多くの人物の中で、最も壯快な日本人らしい人間は、内大臣道隆の二男隆家である。軟弱な變生男子式の平安時代の貴族の中でも、時としては、やはり、かうした型やぶりの、併し眞に日本人としての天性に惠まれた人物も出て來るものである。たゞ隆家には重大な失敗があるのだが、これは全く誤つた手段を取つた失敗で、隆家の人物の偉大さと、皇室に對しまつる忠誠を疑はしめるものでは、もちろんない。

時の權威者である道長も、隆家には一目おいてゐたのである。道長の催したある宴席に、隆家も招かれたので出かけた。既に宴もたけなはなのに遲れて行つた隆家は端然として行儀も崩さず座つてゐる。席も亂れてゐた時分で、一人の男が、後から、今なら「お羽織をお脱がせ申しませう」といふやうな言葉を云つて、裝束の紐を解かうとしたところ、隆家は憤然として「隆家は不運な者だ。お前たちにさやうにせられる身分ではない」と口荒く大喝したので、人々は顏色を蒼ざめて、事件が持ち上るかと顏を見合せながら、氣の弱い貴族たちはをろ〳〵してゐた。

併しさすがに道長は違つたもので、悠々として隆家に「今日はさういふ冗談ごとはなしにしませう、ではこの道長がして上げよう」と笑ひながら云つて、裝束の紐を解いたので、隆家も、これがさうありさうなことだと云つて機嫌が直つたといふ逸話が出てゐる。この時分、隆家の家は、父の道隆の死後落目になつてゐて、元來は道長と競爭してゐたのであるが、今は全く道長のために壓倒せられ、その勢力の下に屈伏せざるを得なかつた事情も、隆家をして、かゝる行動を取らしめた有力な理由だつたが、しかも、道長に阿諛低頭する貴族たちの中にあつて、隆家のこの豪放な行爲は目を覺ます思をさせられる。さういふ人物であつたから、次の如き、日本人的行動が可能だつたのである。

隆家は、眼病を患つたので、それの療養のため、筑紫に唐人のよい醫者があるときいて、みづから希望し、太宰大貳の職務に任ぜられて、九州に赴任して行つた。

然るに在任中、刀伊國、即ち女眞國の者が、急に海を越えて九州に襲擊して來た。これは元寇

以前の國難で、對馬、壹岐を攻略して不意を襲つたのであつた。隆家は武官でないから、軍事に關しては全く何らの知識もない。併し、隆家は「やまと心かしこくおはする人」であつたから、もとより手をつかねて、いたづらに周章狼狽する醜態を見せなかつた。いな事態の責任者として直ちに、「筑紫、肥前、肥後、九國の人を起させ給ふをばさるものにて、府の内に仕うまつる人をさへ押しとりて、戰はしめ給ひければ、かやつが方の者ども多く死にけるは、さは云へど、家高くおはします故に、いみじかりし事平げ給へりし殿ぞかし」

かく大鏡は讃嘆してゐるが、いかにも隆家の處置は機宜を誤またないものであつた。かやうにして、隆家は、この國難をして事なく敵を敗退せしめ、わが國家を安きに置いたのは、全く「やまと心」にすぐれてゐたからであるに相違ない。「やまと心」とは「やまと魂」と同意に用ひられた言葉で、まことに、隆家こそは、この言葉にふさはしい人物であつた。それ故、朝廷においてはこの大功に對して隆家を「大臣、大納言にもなさせ給ひぬべかりしかど」何の恩賞もなく、そのまゝでおかれた。他の人々は、敵を射返した著しい戰功のあるものは、隆家から朝廷に報告して、それぞれ論功行賞があつたが、當の責任者の隆家だけは、肝腎のこの恩命からはづれてしまつた形である。

併し、隆家は何の不平もなく大貳の役を勤務して、六年の任期を無事に終へた。その間、「政よくし給ふとて、筑紫の人さながら從ひ申したりけり」とあつて、よく善政を施し、土地の人々が驚いた、爲政者としても、すぐれた手腕を備へてゐたのは、豪直にして表裏のない、一徹で膽斗のごとき、彼の資性から自然に出たものであらう。この人一人を發見し、その人物を生き〳〵と描き出しただけでも、大鏡の價値は高いと云はなければならない。(この隆家の子孫が、九州の勤皇家菊池氏であることに、精神の血統の尊さを思ふのである)。

それ故、この作品の中に、將門、純友の亂に對して、「王威のおはしまさんかぎりは、いかでかさる事はあるべきと覺えて」と云ひ、或は又、「王威はいみじきものなりけり」と讃嘆して、御稜威を仰ぎまつる言葉の見出だされるのも偶然ではない。この書の全體に溢れ漲つてゐる根本の精神がそれであつた。

十一、吾妻鏡

平安時代の貴族は、既に政權を擅まゝにして　皇室に對しまつり不敬の所業が多かつた。この貴族の沒落に引きつゞき、新しく武家が勃興して、遂に武門の政治が、京都より遙かなる鎌倉に移されて行はれることとなつた。平家に更代する源氏の擡頭が、いよ〳〵この勢力を固めて、畏れ多くも、ここに皇室の御式微の因が開かれたのは痛嘆に堪へぬ政治の變遷であつた。

併しわれらはしばらく、その武家を中心とする文學が、國體及び民族精神との關係において、いかなる傾向や表現を持つものであるかを檢討することにしよう。

治承四年四月九日、「入道源三位頼政卿、平相國禪門（淸盛）を討滅すべき由、日頃用意の事有り。然れども私の計略を以ては、宿意を遂げ難きに依つて」以仁王の令旨を、伊豆の頼朝以下の源氏に下さしめ給ひ、もつて平家を討伐するの案を立てて、これが實行に着手した時から筆を起し、文永三年七月廿日、執權北條時宗の意によつて將軍をやめ給ふた安尊親王が上洛、着京し給ふところで筆を擱へた、八十七年間の、關東の幕府を中心とした歴史が吾妻鏡である。丁度本書の終つてゐる翌々年から蒙古が使をよこして、國家の風雲の急を告げた時代に入つてゐる。

「此の關東記錄は、文武諸道の龜鑑たるの由、年來耳に觸る」と大永二年に、安房前司弘詮が記してゐるやうに、本書は、武士の間にあつては、まさに文武兩道の龜鑑を具體的に示した書として、尊み重んじられてゐた。官撰の書ではなく、鎌倉幕府の文學に關係した人々が、次第に記錄を書き留め、記し續けて行つたものであらうが、その表現には、文學的な美しさがあつて、尋常一樣な記錄とも違ふし、それだけに、叙述には、多少の准飾も見られて、純粹の正史と認めるには十分の信用をおくことが出來ない點もあると云はれてゐる。併し、この書が文學として取り扱はれてよい點は、むしろさういふ本書の特色に發見せられると云つてよい。

建久四年五月廿八日「小雨降る。日中以後霽る。子の刻、故伊東次郎祐親法師の孫子、曾我十郎祐成、同五郎時致、富士野の神野の御旅館に推參致し、工藤左衞門尉祐經を殺戮」したといふ曾我兄弟の復讐の顚末も亦、この書に始めて見えるところ、その時の狀況を描寫して「祐成兄弟、父

の敵を討つの由、高聲に發す。是に依つて諸人騒動し、仔細を知らずと雖も、宿侍の輩は皆悉く走り出で、雷雨鼓を擊ち、暗夜燈を失して、殆ど東西を迷ふの間、祐成等の爲めに多く以て疵を被る」の狀態であつた。その間に「十郎祐成は、新田四郎忠常に會ひて討たれ畢ぬ。五郎は御前を差して奔り參る。將軍御劍を取りて、向はしめ給はんと欲す。而れども左近將監能直之を抑留し奉る。此の間、小舍人童五郎丸、曾我五郎を搦め得たり。仍つて大見小平次に召し預けられ、其の後靜謐、義盛、景時仰を奉じて祐經の死骸を見知す」といふのが、その顚末で、翌日から、更に時致は召し出だされて、取調べを受けてゐる。この邊、曾我兄弟の行動にも、又、將軍自らが刀を取つて二人に向はうとした態度にも武士らしい氣魄が漲り溢れてゐる。

これを婦人について見ると、有名な坂額の活躍がある。建仁元年四月城小太郎資盛が、朝廷の御爲めに旗を上げた時「又、資盛の姨母有り。之を坂額御前と號す。女性の身たりと雖も、百發百中の藝、殆ど父兄を越す也。人擧つて奇特を謂ふ。此の合戰の日、殊に兵略を施し、童形の如く髪を上げしめ、腹卷を着し、矢倉の上に居て襲ひ到るの輩を射る。之に中る者死せざるは莫し。西念の郎從も亦、多く以つて之が爲めに誅せらる。時に信濃の國の住人藤澤四郎清親、城の後の山に廻り、高所より能く之を窺ひ見て矢を發す。其の矢件の女の左右の股を射通す。即ち倒るる處を、清親の郎等生虜にす。疵平癒するに及べば、之を召し進むべし。姨母疵を被るの後資盛敗北す」といふ豪勇智謀の女性であつた。かういふ武士的な、又、眞の日本人らしい行動や態度に出た人々を、本書の隨所に見出だすことが出來る。まことに「文武諸道の龜鑑」たるべき內容に滿たされてゐた。

實朝の生涯については、本書が詳しく語つてゐるが、それは悲劇に滿ちた生涯であつた。渡宋の大志を抱いて果さず、遂に、かつて養子とした前將軍賴家の子、鶴岡八幡宮の別當阿闍梨公曉によつて、八幡宮社參の際、暗殺せられるにいたるまで、この萬葉風の歌人であり、漸く皇室と關東との關係が惡化しつゝあつた際、皇室に忠誠を誓つた詠歌を殘してゐる三代將軍は、時代の動搖に身を以て殉じた、一個の犧牲者である。この人物の性行や精神を考へるには、その歌集を除いて、本書に就くの他は、知るべきものを殆ど持たないのである。

かくて、皇室の御態度は硬化せられて、遂に承久の變が勃發した。本書は、幕府を主として、その方の人々の手によつて記されたものであるから、朝廷の方に御味方した人々を謀叛の衆と云

つてゐる。それにもかゝはらず、朝廷の軍隊を官軍と稱し、朝廷には十分の敬意を表して記す態度を忘れてはゐない。

承久三年閏十月十日、「土御門院、土佐國（後阿波國）に遷幸し給ふ。土御門大納言（定通卿）御車に寄りて君臣互に悲涙に咽び給ふ。女房四人並に少將雅具、侍從俊平等御供に候す。此の君大化萬邦に滂流し、慈惠八埏に充滿ましますの間、申し行はず、日緒を送り給ふの處、猝ち叡慮を起し、忽ち南海に幸し給ふ。

天照大神は豐秋津洲の本主、皇帝の祖宗也。而も八十五代の今に至つて、何故百皇鎭護の誓を改め、三帝、兩親王、配流の恥辱を懷はしめましますや、尤も怪しむ可し」と慨嘆して、悲憤の情をひそかに、天地の神明に託してゐるのである。

それは、朝廷の御味方に參つた清水寺の僧敬月法師に關して「指したる勇士に非ずと雖も、範茂卿に從ひ、宇治に向ふの間、宥し難し。一首の詠歌を武州に献ず。仍つて感懷の餘り、死罪を減じて遠流に處すべしの由、長沼五郎宗政に下知」せられたといふが、その歌は、

勅なれば身をば捨ててき武士の八十宇治河の瀬には立たねど

かやうに、勅を奉じては一身を顧みないといふ詠歌に感動する、武士の態度を記錄してゐるところに、十分ではなくとも、なほ本書の、國家に對する精神、即ち、國體認識の如何が窺はれるのである。かくてこれをわが民族文學の序列の中に加へることとした。

十二、平家物語

一

平家の勃興と、清盛及び平家一門の驕慢豪奢な生活、それが災して、遂に源氏の手によつて滅亡せられて行くまで、平家興亡の歴史を描いて、武家生活の哀史の中に、國家と民族との關係を寫し出したものが平家物語である。平家物語が、古事記以後の、大きい國民文學の代表的な作品と云はれる理由は、それが單に、平家一門の歴史たるにとゞまらず、實に國家と民族との運命にそれが關係することを示してゐるからである。

その事は、この物語の卷頭にも明かに記すところであつた。「秦の趙高、漢の王莽、梁の周伊、唐の祿山、是等は皆、舊主先皇の政にも從はず、樂しみを極め、諫をも思ひ入れず、天下の亂れん事をも悟らずして、民間の憂ふる所を知らざりしかば、久しからずして亡びし者どもなり」と支那における、「舊主先皇の政にも從は」なかつた謀叛のともがらを先づ列擧し、ついでわが國の近代の歴史に及んで「承平の將門、天慶の純友、康和の義親、平治の信頼」、特に「間近くは、六波羅の入道前太政大臣平の朝臣清盛公と申しし人の有樣、傳へ承はるこそ、心も言葉も及ばれね」と慨嘆して、將門、純友らと同列に清盛を見ようとしてゐる所に、この物語の根本の立場があるのである。

かうした清盛の態度であるが故に、平家の沒落は極めて當然な成行であり、それはわが國の歴史の最も正しい批判の上に立つものであるといふ見解から、この作品は物語られてゐる。

「平治の信頼」と、こゝにあげた、その平治の亂の信頼は、まさに謀叛のともがらであつたが、その際　天皇に御味方をしたのは、他ならぬ清盛であつた。しかもその功勞に誇つて、みづからの行爲は、當然なすべき臣下の務を果したのであるといふ自覺を失ひ、我意私利に增長しては、再び「平治の信頼」の先轍に、みづから陷ることを免れなかつたのは、極めて當然な天刑であつた。いな神罰であつた。

世の人は、平家物語の、この重要な精神に注意せずして、むしろ冒頭の文句に「祇園精舍の鐘の聲、諸行無常の響あり、沙羅雙樹の花の色、盛者必衰の理を現す」に心奪はれ、これと聯關して「驕れる者久しからず、只春の夜の夢のごとし。猛き人も遂に亡びぬ、ひとへに風の前の塵に同じ」を解釋しようとする。即ち、この物語は、佛教的な人生無常の運命觀を根本とし、有爲轉變の世相を描かうとしたものだと說明するものが甚だ多いのである。

もちろん、佛教的信仰が、この物語の底に流れてゐることを全然否定しようとするのではない。むしろ、その運命觀よりして、一種の哀愁と、悲壯の情調が全篇にみなぎり溢れ、この作品の藝術的な價値を增してゐることは、あへて肯定せられてもよいと思ふが、しかもそれだけでは、この物語の國民文學としての意義は、なほ十分でないものがあるであらう。この物語の中心思想が、實に「舊主先皇の政にも從はず、」これは支那のことであるから、かやうに云つたのであるが、わが日本に於ては、當主現皇、即ち　天皇の「政にも從はず」又「民間の憂ふる所を知らざ

りし」驕れる者、猛き人の、遂に亡び行く國家の大本を明かにして、わが國體の本質に觸れるものあるが故に、始めて、國民文學の意義の、十分に發揮せられてゐることを知るのである。

世に國民文學の叫びをきく事が久しいが、實にこの根本的な大義名分に即することなく、空虛な理念を設定して國民文學の必要を說くものであるから、何らの積極的な發展性を持たないのである。平家物語の持つ思想の根本が、この點にあることを先づ理解しなければ、その眞の精神と情趣とは、何ら心に響いて來るものがないであらう。

この物語の前半において、大義名分を正した中心人物としては、平重盛が存在する。この人物をして、縱橫にその信念を吐露せしめたが故に、物語の立脚する精神は、一層明かとなるのである。重盛の行動は、さすがに不敵な清盛をも遠慮せしめ、わが子に對して、眞實尊敬の念を抱かしめた。かくのごとき重盛の人物は、この物語の中に、歷々として力强く描き出されてゐる。

重盛、清盛の父子の關係は、わが國家と民族との關係の問題に聯關してゐる。しかも、物語の精神は、その微妙な關係に一つの解決を與へてゐる。即ち、至誠と大義名分とを以てすれば、いかなる奸曲、傲岸といへども、日本人としての精神に生きることが出來るものであるといふ解釋である。それは單に滅私奉公などといふがごとき小我の觀點に立つものではなくして、もつと大我の中に自己を見出だす方法である。

たゞ、重盛は若くして歿した。これが平家の悲劇の最も重大な原因であつた。清盛の歿するまで重盛が生きてゐたなら、平家の運命は別の方面に展開したかも知れない。併し遂に重盛の死に際會して、さすがに清盛は深い悲痛に襲はれたが、更生、自覺の機は永久に逸し去つて、みづからの、又平家一門の墓穴を掘るにいたつたのである。

二

平清盛は「我が身の榮華を極むるのみならず、一門共に繁昌して……世には又人なくぞ見えられける」と平家物語は評してゐるが、この清盛の榮華は、まさに、藤原道長の榮華物語の再現であつた。たゞ榮華物語と平家物語の根本的な態度の相違は、榮華物語では、道長の榮華を是認してゐるのみならず、むしろこれを讃賞する心を以て書かれてゐるのに對し、平家物語は、清盛の榮華に對して否定的態度を取つてゐるところにあつた。

さうして、平家物語における重盛の點出は、實に、この物語の前半の一大眼目であり、これあるがために、平家物語の精神が生きて來るのである。

大義名分に生きる重盛の面目は、物語の中において重盛の現れるところ、いづれにおいても必ず躍如としてゐるが、就中、重要なるは、教訓の事の一段である。教訓とはほかならぬ父清盛に對して、小松内府重盛が教訓する旨を、物語の中で明かにしたもので、むしろこれは父に對する諫言と云つた方が適當してゐるが、この教訓の話は、物語の中に、二箇所以上を見出だすことが出來る。殊に、後白河法皇が、清盛を誅しようとの御思召をもつて、種々謀り給うてゐるのに對し、清盛もいよ〳〵決心を固めて「暫らく世を靜めんほど、法皇をば、鳥羽の北殿へ移し參らすか、然らずば、これへまれ、御幸をなし參らせんと思ふは如何に。」併しさうなれば、院方でも、戰ひを挑んで來られるであらうから、こちらもその用意をして事に當れと、人々に下知してゐる時、この報告を受けた重盛は、急遽清盛邸へ馳せつけて、出陣の用意をして、ひしめいてゐる一隊を取り靜める一段は、最も重要な内容を持つものである。

重盛は先づ涙をもつて清盛を諫めて云つた。「さすがわが朝は、邊地粟散の境とは申しながら、天照大神の御子孫、國の主として、天兒屋根命の御末、朝の政をつかさどらせ給ひしよりこのかた、太政大臣の官にいたる人の甲冑を鎧ふ事、禮儀にそむくにあらずや。……先づ世に四恩候。天地の恩、國王の恩、父母の恩、衆生の恩これなり。その中に、最も重きは朝恩なり。普天の下王地にあらずといふことなし。」と喝破して平家一門が今日の地位を占めるにいたつたのは、「これ希代の朝恩にあらずや。今これらの莫大の御恩を思し召し忘れさせ給ひて、猥りがはしく法皇を傾け參らせ給はん事、天照大神、正八幡宮の御慮にもそむかせ給ひ候ひなんず。それ日本は、神國なり。神は非禮を受け給ふべからず。されば君の思し召し立たせ給ふ所、道理半ばなきにあらず。中にも、この一門は、代々の朝敵を平げて四海の逆浪を靜むることは、無双の忠なれども、その賞に誇る事は傍若無人とも申しつべし」とて、「聖德太子十七箇條の御憲法」を引いて、「君の御爲めには、いよいよ奉公の忠勤をつくし、民のためにます〳〵撫育の愛情を致させ給はば、神明の加護にあづかつて、佛陀の冥慮にそむくべからず」と言葉をつくして諫言してゐる。

この長い言葉の中には、種々の重要な精神を含んでゐる。朝恩を絶對のものとして、終始一貫献身的に朝恩に謝し奉り、報い奉らうといふ精神は、殊に重要であつて、それは單に滅私奉公な

どといふのとは違つて、もつと崇高な朝恩といふ具體的事實を中心としてゐる點が胸にこたへなければならぬ。わが國に於いては、公に奉ずるといふだけでは不十分である。その公なるものは、朝恩といふ具體的事實に觸れることによつて、始めて生命を持つて働く。われ〳〵を動かしてゐるものは、この朝恩に感謝し奉る精神でなければならない。そこに重盛の言葉の永遠に力強く迫る理由がある。

次には、神皇正統記にも見られて、有名な「大日本は神國なり」の思想が、早くこの重盛の言葉の中にも現れてゐることで、これ又、わが國民精神史の上に注意せられなければならない點である。殊にそれが、「天照大神の御子孫、國の主」たる國體の思想と結びついてゐることによつて、一層わが國家に對する正しい認識を、この物語が持つてゐることが明かに知られるのである。

第三には聖德太子の十七條憲法の引かれてゐることで、このわが國の精神史、思想史の上で、根原となつてゐると云つても差支へのないほどの價値を持つ十七條憲法が、重盛によつて力強く取りあげられてゐることは、聖德太子の御精神を體得したものとして、こゝにも驚きと崇敬の情とを與へられるのである。

重盛の諫言はなほ進んで有名な「不孝の罪を遁れんとすれば、君の御ためには既に不忠の逆臣ともなりぬべし。進退これ極まれり。……たゞ重盛が首を召され候へ」といふ言葉になつて來るが、これは小學校の教科書などにも出て有名な文句であるが、實は前に引いた言葉ほど重要ではない。といふのは、さう申し出ることによつて、實は父清盛の行動を制肘しようとしたもので、もし言葉通りに首を斬つてもらふといふのであるならば、それは消極的態度と云ふべきで、不孝の罪と不忠の罪とのいづれにつくべきかは、大義名分の明かな重盛にわからぬはずはない。況んや不忠の臣たらざることが、父に對する不孝の罪をも消すこととなるにおいては、その點の歸趨はもとより歴然たるものがあるから、お前たちが行動を起す以前に、重盛の首を切れといふ申出を、家來たちにも觸れ廻つてゐるのは、清盛の興奮を鎭壓する手段であることを明かに示すものである。

かくて重盛の清盛に對する諫言は、早く清水炎上の際にも「これにつけても、よく〳〵叡慮に背かせ給はで、人のために御情を施させましまさば、神明三寶加護あるべし」と云つてをり、この精神が終始一貫して表現せられてゐるわけであるが、わが國の政治の要諦は、この簡單で平易

な言葉の中に含まれてゐる。無限の含蓄のある教訓である。文學といへども、かやうに政治經濟の根本精神にも觸れるところあるが故に、この物語の民族文學としての價値や意義は一層高まり深くもなる。

三

平家物語の後半は、前半の平家が勃興して榮華を極めた、清盛の傲慢な生活を中心としてゐるのに對し、次第に平家が衰へ行き、西海に追ひつめられる滅亡の哀史を描いたもので、平家物語の眼目は、むしろこの中にある。一たん興隆したものであるがゆゑに、その沒落の跡は一層に悲しい。わが國民の情感に豐な、感動しやすく情緒に富む、詩的な面目を最もよく現してゐる部分である。

この西へ西へと落ちのびて行く平家の人々をめぐつて、幾多の悲劇が、そこに展開せられてゐる。越前の三位通盛が戰死したので、その北の方なる、もと上西門院の女房であつた小宰相は、夫のあとを慕つて海に身を投じて死んだ。「昔より男におくるる數おほしといへども、樣を變ふるは常の習、身を投ぐるまでは有り難きためしなり。されば、忠臣は二君に仕へず、貞女は二夫にまみえずとも、かやうの事をや申すべき」とたゝへる物語や、或は名高い一谷において、熊谷直實が平家の美少年敦盛を討ち取つて、わが子のことを思ひ無常を感じた話など、種々の挿話が點綴されつゝ、その哀史は雄渾な場面を繰り展げて行く。

その間に、又、海道下りのごとき美しい文章もあつて、朗々誦するに足る。鎌倉幕府の開設は、京都と關東との間に新しく重要な幹線道路を設備した。この街道に沿うて、旅人の交通、往來が頻繁であつた。それは又、文學に反映して、種々の紀行文學を生んだ。海道記とか、東關紀行とか、阿佛尼の十六夜日記とかいふ作品は、この新しい路線から生れた文學である。さうして、平家物語の中に見える海道下りの美文的表現も、同樣にして新しく作り出された、海道文學の一つの形式であると云つてよい。

逢坂山を打越えて、勢多の唐橋駒もとどろと踏みならし、雲雀上（あが）れる野路の里、志賀の浦浪春かけて、霞に疊る鏡山、比良の高根を北にして、伊吹の岳（たけ）も近づきぬ、心を留（とど）むとし無けれども、荒れてなか〳〵優しきは、不破の關屋の板廂、いかに鳴海の汐干潟、涙に袖はしを

れつゝ、かの在原の某の、唐衣着つゝ馴れにしと詠めけん、三河の國の八橋にもなりぬれば、蜘蛛手に物をと哀れなり。濱名の橋を渡り給へば、松の梢に風さえて、入江にさわぐ波の音、さらでも旅は物憂きに、心をつくす夕間暮、池田の宿にも着き給ひぬ。

これは重衡が鎌倉に護送せられる道行の一段であるが、文章には一脈の哀愁の情が湛へられ、これを口頭にのぼす時、悲痛の情の胸を打つものがあるのは、この文章が詩的な美しさに溢れてゐるからである。海道下りの道行は、太平記にいたつて更に完璧の境に到達するとともに、一方では演劇方面にそれが發展して行つて、海道下りの狂言を殘し、後長く影響の跡を傳へて道中膝栗毛の類にまでいたつてゐるのである。われらは、海道文學の創始者たる、この物語が、かうした點でも十分に、國民文學の大きい本質を備へてゐると、明かにいふことが出來る。

平家の沒落に伴ひ、三種の神器の御事が問題になつて來る。ここにおいて、三種の神器を、京都に歸し奉るやうにとの院宣が發せられるが、もとより平家においては、覺悟してゐたことであるから、三種の神器をお歸し申し上げない。「帝王の御代を保たせ給ふ御事も、ひとへに、この內侍所の渡らせ給ふ御故なり」と宗盛も述べてゐて、內侍所、即ち、御寶鏡の最も重大なる意味を持つことも明かにしてゐるのである。

かくて、この物語においては、國體の根本の具象的表現とも申し奉るべき三種の神器の御意義について、明確な理解があつたとも考へることが出來る。その點においては、後代に、吉野時代の吉野の都と、京都と、いづれが正しい御位に即かれてゐた朝廷と申し上げるべきか一時不明に歸し、混亂した意識しか持たれてゐなかつた時代とは、やはり大いに異なるものがあることも認めなければならない。

壇の浦に追ひつめられた平家は、遂に源氏と最後の合戰を戰はなければならなくなつた。「されども、平家の御方には、十善帝王、三種の神器を帶して渡らせ給へば、源氏いかゞあらんと」一時は危ぶまれたが、併し結局は、豫想の通り源氏の大勝、平家の全滅に終つたのである。その結果、二位局が「神璽を脇にはさみ、寶劍は腰にさし」先帝を擁し奉つて入水するといふ、最も悲痛な結果を見なければならなくなつた。

だが一體、三種の神器の結末はどうなつたのであらうか。この點について、平家物語は、わが國體に關し、少しも疑念を抱かせるやうな結末を傳へてゐない。源氏は「平家を悉く攻め滅し」

たのみならず「内侍所、神璽の御箱、事故なう都へ返し入れ奉るべきよし、奏聞せられたりければ、法皇大いに御感」あらせられたのである。かくて、文治元年四月廿五日、無事に「内侍所、神璽の御箱、鳥羽に着かせ給ふ。」かやうにして、神器は還御になつたのであるが、内侍所はもとより海に入り給はず、「神璽は海上に浮びたるを、片岡の太郎經春が取り上げ奉つたりけるとや。」御箱に入つてゐたのが幸ひだつたのである。「寶劍は失せにけり。」とあるが、併し、眞の寶劍は熱田にましますゆゑ、高天原の天照大神より傳へさせられた三種の神器は、儼然として今日に傳へられてゐる。

平家物語は、この危機を語つて、しかもその安泰無事を告げることを忘れない。この國體の根本たる重大事に、至高至尊の傳統を見出だしてゐる、平家物語の態度こそは、民族文學の本義たるべきものでなければならない。わが國家の傳統に思をひそめる者は、必ずやこの最上究極のところにまで心をはせる者でなければならないからである。

十三、平治物語

所謂保元の亂と平治の亂とを取り扱つたのが保元物語と平治物語とである。この兩方の亂は、平安時代の貴族の沒落を決定的なものとし、武士の勢力の擡頭を顯著にして、やがて源平兩氏の爭覇戰を導く、前哨戰として、一大轉換期の重要な意義を有するものであるが、この事件を取り扱つた、この兩者の物語を讀むとき、皇室と武家との關係に思を馳せて、不幸なる歴史の轉回に長歎息せざるを得ないのである。史實との關係はともかく、この兩物語に躍動する事變の活寫は血肉が通うてゐて、よむ者をして、その動亂の只中にある思を抱かせ、みづからいづれの立場を是とするか決意を明かにせざるを得なくなる。

併し、保元の亂と平治の亂とは、又その性格を異にするところがあり、その結果、この兩事變を取り扱つた兩物語のうち、平治物語をこゝにあげるとしても、保元物語の方は、遂にその名を脱

落しなければならなくなつた。性格を異にするとは何ぞ。保元物語の目次を見ても、そこに新院御謀叛思召し立たるる事、新院御謀叛露顯、その他の穩かならざる題目を見出だすであらう。たとへそれが國史上に行はれた事實であるとしても、國民として、文學作品の中に赤裸々に取り扱ふは憚るべきであり、又、國民感情としても、到底かゝる事件は、恐懼の情を深く感じる時、遂に口頭に、紙筆に、公にするを得ざる底のものがある。

然るにあへてこれを忌み憚らざるがごとくに見えるのが、保元物語の態度であつた。かういふ性質を持つ保元物語であるから、今それをこゝに取り扱ふことを得ないのである。或は又、この事件には骨肉相食むの忌はしき事實をひそめ、たとへ鎭西八郎爲朝のごとき勇者が取り扱はれてゐるとしても、朝廷に弓を引いた謀叛人たるに間違ひはない。この物語のごとき、心の痛みなくしては、讀むことを得ないものである。

それに比すれば、平治物語の方は、その態度も明瞭で、書きぶりにも、保元物語とは異り明朗なところがあつて、古來、兩者同一作者の筆になると稱されてゐるが、この性格の相違のゆゑに、さういふ定說には、まだ疑問を差しはさむ餘地があるやうに思はれる。

平治物語に一貫する精神は、皇室に對しまつり、暴威を揮ふものは、必ず常に亡びるといふ考へで、その皇室におかせられても、主上　上皇の御間を介離し奉るやうなことなく、全く一體として、表現申し上げてゐる點を注意すべきである。即ち、謀叛人の信頼の方は、一時、主上、上皇を、畏れ多くも、お取り籠め申し上げたが、遂にこれを脫出し給うて、信頼の方は亡びることになる。しかも、この際、信頼の方に味方したために源氏の義朝も遂に殺され、その遺兒は命を助けられたが、信頼及び義朝を誅戮するにいたつた平家の淸盛においても、その功に誇り、我意募つたがために、やがて義朝の遺兒の源頼朝が立ち、平家が滅亡して、因果は廻る小車のごとき運命を痛感させる「頼朝擧二義兵一幷平家退治之事」までを語りつくしたこの物語の內容は、首尾全きものであつて、保元物語が謀叛人爲朝の勇武を「古へより今にいたるまで、此の爲朝程の血氣の勇者なしとぞ人申しける」と賞美することで終り、結末の完からざる感を與へるのとは、甚だ異るのである。

平治の亂に描かれてゐる謀叛人藤原信頼は餘程の臆病者で、又暗愚な公卿である。中關白藤原道隆の血統を引くこの人物は、名門の家に出てゐるにかゝはらず「然れども文にもあらず、武に

もあらず、能もなく藝もなし。唯朝恩にのみ誇りて昇進にかゝはらず……たゞ榮華の恩にぞ誇りける」と云つた人物で、平家の兵が、主上、上皇のましまさず、いたづらに大内の空闕を守つてゐる源氏方に押し寄せた時、總大將の信頼は「顏色變りて草葉の如くにて南階を下られけるが、膝ふるひて下りかねたり」といふ有様で、出陣のため馬に乘らうとしたが、恐怖のあまり馬に乘ることさへ出來ず、馬上に押し上げられたところ、轉げ落ちて、顏を打ち、砂だらけとなつて鼻血を出すといふ醜態を演じたので、さすがに源義朝をして「義朝此の體を見て、日頃は大將として恐れ給ひけるが、はたとにらみて『あの信頼といふ不覺人は臆したりな』」と叱責させてゐるほどである。

これに反して信頼が嫉視反目して、遂に謀叛まで起すにいたつた信西入道の方は、立派な人物であつた。信西が當代稀なる藏書家で且すぐれた學者であつたことは世に知られてゐる。その藏書目錄も今に傳へられてゐる。「諸道兼學して諸事にくらからず。九流百家に至る當世無雙の宏才博覽なり。……保元元年よりこのかたは天下の大小事を心のまゝに執り行ひて、絶えたる跡を繼ぎ廢れたる道を興し、……聖斷私なかりしかば、人の恨も殘らず世を淳素に歸し、君を堯舜に致し奉る、延喜天曆の二朝にも恥ぢず」といふほどに、政治家としてもすぐれてをり、特に「大内は久しく修造せられざりしかば、殿居傾危し、樓閣荒廢して牛馬の牧、雉兎の臥所となりたりしを、一兩年のうちに造畢して遷幸なし奉る。外郭重疊たる大極殿、豐樂院、諸司八省、大學寮、朝所に至るまで、華榱雲のかた、大厦の構成風の功年を經ずして不日になりしかども、民の煩もなく國の責もなかりけり」といふにいたつては忠誠の大功ある者と云はなければならぬ。

信頼の兵一時に起つて信西入道遂に逃れがたきを知り、みづから死する時の有様も豪膽であつて、進んで生埋にせられ平然と死に就くのである。その覺悟や態度において、信頼とは雲泥の相違がある。信頼の政治の方針は、從來の藤原氏の强慢暴壓を挫き、かねて、藤原氏の家來としてこれを陰に陽に助けてゐた源氏の勢力を斥けることにあつたが、不意を打たれて、中道に死なければならなくなつたのである。その企圖も決して勇斷不羈でなかつたことが知られる。

物語のうち、謀叛に與した源義朝の嫡子惡源太義平と、清盛の子重盛との一騎討の勝負は壯絶で、その待賢門の軍の段は、最も華やかな、且つ血湧き肉躍る場面に富む、義平は、保元物語の爲朝にも比すべき荒武者として描かれてゐるが、併し、結局豪勇のみで、思慮なき一介の武辨に

過ぎない。源三位頼政をして、平家に味方させ、源氏が同志打をしてその敗因の一つを作るに至つたのは、義平が輕卒に頼政の態度を疑つたからで、「まことに惡源太若氣のいたす所なり」とある。

それに對して重盛の態度は終始立派であつた。義平に對してもまことに堂々と戰ひ、小勢の味方を率ゐて、義平の追跡に對抗し、これと一騎打の勝負を挑むが、主人の身を案じる家來に諫められて遂に引返すのである。源氏が六波羅に押し寄せた時、清盛はさすがに狼狽して兜をさかさまに着、これをごまかさうとして、却つて重盛から「何と宣へども臆して見られたるな。打ち立て者ども」とて五百餘騎にて駈け向はる」といふやうに元氣づけられ、遂に味方の勝利に導かれてゐる。

かうした信西の態度、特に平家を代表する大義名分の主張者、重盛などの描寫の中に、この物語の精神が明かに知られる。保元物語をあげず、平治物語を記したのは、この態度に、その理由を認めたからである。平治物語の終りの方は平家物語で取り扱はれた對象や又義經記で物語られた話と内容が同一である。さういふところにも、この物語が、それらの代表的な國民文學と連關を持つ理由がある。

十四、梁塵秘抄

保元の亂は　後白河天皇御在位中に起つた事件である。平治の亂は　天皇御讓位の後、院中にあつてなほ政治を執られてゐた際の事件であつた。さうして、平家の勃興の後、その專横を挫かうとして努力せられたのも　後白河法皇であらせられ、遂に源氏によつて平家が滅亡し、鎌倉幕府が創立せられるにいたつたのも、やはり　法皇の院政の御時のことであつた。

まことに　後白河法皇の御生涯は、非常な波瀾の御代に過させられ、時代の轉換期は、武士の擡頭を如何ともしがたかつたが　後白河法皇は終始、この武士の勢力を挫折せしめ、朝權を振張しようと御努力あそばされたのである。そのため、ある一派の武門をして他の武士を征伐させるといふやうに所謂夷を以て夷を征すの筆法をお用ひになつたのは、朝廷御自身が何らの兵力を持

つてをられなかつたからで、已むを得ざる當然の御處置であつたが、武家に忠誠を第一とする精神が缺け、いたづらに自己の勢力を誇らうとするその心がけが、根本的に間違つてゐた。當時の武家なるものが、眞實の國體の認識に缺けて、勇猛猪突の輩に過ぎなかつたがために、遂に幕府時代を招いたのである。武士の豪勇なる志操を謳歌するはよい。併し、その國家に對する自覺は、當時の武士が甚だしく乏しいものより持たず、文化的精神の低かつた粗野な人間であることまでも見失つてはならない。

後白河法皇は、かくのごとき時代に、御在位あそばされ、又院政をみそなはせられたのである。その　後白河法皇の御撰になつた書が、即ち、この梁塵秘抄である。梁塵秘抄は、當時の民衆のうたつてゐた歌謠を集錄、記載あそばされた書で、これによつて、當時いかなる民謠や歌謠が行はれてゐたかを知ることが出來、又、それによつて、當時の民衆の心にも觸れることが出來るのである。

梁塵秘抄に出てゐる種々の歌謠の中、法文歌といふのは、佛敎に關係のあるもの、神歌といふのは神樂歌の系統を引くもので、その他、古柳（こやなぎ）、今樣、長歌といふ、當時流行したさまざまの種類の歌謠が數多く見える。

法文歌といふ歌謠が多くの分量を占めてゐるのは、當時の一般の社會に、佛敎が非常な勢力を持つてゐたがためであるが、　後白河法皇はまた、熊野神社を甚だ信仰あそばされてをられ、神歌をも數多く收載あそばされてゐて、當時の下層の國民たちの心は、この神歌の中に、最も端的に現されてゐるのである。

わが子は二十に成りぬらん、博打にてこそ歩くなれ、國々の博徒に、さすがに子なれば憎からなし、負かい給ふなわうちの住吉西の宮

媼の子供の有樣は、冠者は博打の打負けや、勝つ世なし、禪師はまだきに夜行好むめり、姫が心のしどけなければいと佗びし

これらはいづれも、親が年頃の子どものことを心配した歌で、當時の下層の國民たちの一部の者の生活の樣子も、よくうかがひ知ることが出來る。しかも

遊びをせんとや生まれけん、戯れせんとや生まれけん、遊ぶ子供の聲聞けば、わが身さへこそ搖るがるれ

十四、梁塵秘抄

にいたつては、子供を愛する純眞な親の愛情が、率直な感情の表現の中に、自然にしみ出てゐる。

茨こきの下にこそ、鼬が笛吹き猿奏で、かい奏で、いなごまろ右手拍子つく、たて蟋蟀は鉦鼓の〳〵よき上手

は、最も當時行はれた歌謠で、弘くうたはれてゐた童謠の一種である。現今なら、さしづめ虫の音樂とでも云ふところであらう。

舞へ〳〵蝸牛、舞はぬものならば、馬の子や牛の子に蹴させてん、踏み割らせてん、まことに美しく舞うたらば、華の園まで遊ばせん

蝸牛の童謠の最も古きもの、

居よ〳〵蜻蛉よ、片脚をまゐらんさて居たれ、働かで、簾垂篠の先に馬の尾槎り合はせて掻い附けて、童冠者ばらに繰らせて遊ばせん

の蜻蛉釣りの歌と並んで、當時の無邪氣な子供の生活がありありと描き出される。

この他にも、美しい歌、をかしい歌、眞實の心のあふれた歌など種々のものが、特に神歌の中に見出だされる。一方において、諸の神社を讃嘆し、神德を恭敬して仰ぎ奉る歌も數々出てゐることは勿論である。又、

萬劫年經る龜山の、下は泉の深ければ、苔生す岩屋に松生ひて、梢に棲こそ遊ぶなれ

のやうな祝の歌もあつて、この系統を引く祝歌は、現今の民謠の中にもなほ力强く行はれてゐる。これらはいづれも神歌の中にあるものである。その他、當時の武士たちのことを歌つた歌や、又後白河法皇御みづから關係あそばされた保元の亂をうたつた流行歌謠ではないかと思はれるものも二三見える。

鷲の住む深山には、なべての鳥は住むものか、同じき源氏と申せども、八幡太郎は恐ろしや

によれば、義家が國民たちの間に畏敬せられてゐたこともわかる。

匆忙の御生涯であらせられたにかゝはらず　後白河法皇が、かくも國家の精神生活に留意あそばされ、民衆の心を、長く傳へさせ給うたことを、仰ぎ奉るのである。

たゞ、梁塵秘抄は、大部分が散佚して、今日は極く一部分が殘つてゐるに過ぎない。御撰の全部が傳へられたならば、當時の國民精神に觸れること、更に著しいものがあつたであらう。もと

より、歌として、なつかしく親しみの情を感じさせるものも少くなく、われらの祖先の最も近く親しい日常の心に接する事が出來るのである。それは、今日もわれわれの心に生きてゐるところと同一で、長い時代を隔てても、國民感情の一筋につながることの深く變りなきを、明かに示されるのである。

十五、新古今集

昔から、萬葉集、古今集、新古今集と、三つが歌集の代表に云はれてゐる。それは、この三集が著しい特色を持つてゐるからである。萬葉集が誠實で素直な心の表現であるなら、古今集は平明で且理智な歌風であり、新古今集にいたつて、微細な感情を表現するとともに、一面壯大な歌風をも示してゐる。萬葉風が力強く、古今風が優美で、新古今風が幽玄であるといふのも、その歌風を云ひ現す言葉である。

新古今集は、和歌を好愛せられ、國風を興隆あそばされることにおいて、並々ならぬ御力を添へ給うた　後鳥羽上皇の御命のもとに藤原定家以下の撰者が編纂したものであるが、しかも、この集の撰定には　後鳥羽上皇の御心が直接に影響を與へさせられてゐて、撰者たちよりも、むしろ　後鳥羽上皇の御意によつて撰ばれた勅撰集と申してもよいくらゐである。それゆゑに、撰者の一人である定家のごときは、その日記である明月記の中で、畏くも、この點に關し不平を申し上げてゐるやうな狀態であるが、定家は、後關東の幕府の方について、朝廷に對しまつり當時の人々からも非難を受けるやうな行爲があつたりしたのである。

後鳥羽上皇は、この集を甚だ愛惜あそばされて、隱岐に還幸の後にも、この集の中から、更に秀歌を撰定あそばされた。これが即ち隱岐本新古今集とよばれるもので、寂しい隱岐の孤島において、新島守の敕きをあそばされた　上皇の御心を、この集がせめて御慰め申し上げたかと思ふと、まことに畏れ多く涙もこぼれるやうなことである。

勅撰集には、神祇と釋敎の二つの部類が設げてある。それは、新古今集の前の千載集で初めて置かれた部類であるが、千載集では、釋敎の次に神祇が置いてあつて、見たところ、神祇ありも

釋教の方を重んじたやうな感じがする。ところが、この集にいたつては、神祇を上において、その次に釋教が來てゐる。即ち、釋教よりも神祇を重んじたのである。この點において、新古今集の精神は正しいと云はなければならない。かうした新古今集の態度は、暫らく、新古今集の以後にも受けつがれて、影響を與へるところがあつたのである。

この集の卷十八の初には菅原道眞の歌が十二首並んで出てゐる。ここに、道眞の誠忠に對する顧彰の意が現されてゐるのではないかと思はれるが、それらは、九州の謫居で詠んだ、誠實な心から出てゐる作のみである。

海ならずたゝへる水の底までも清き心は月ぞ照らさむ

このやうに、菅公は、自分の清い心をうたつてゐるのである。

この集の特色は微細な感情を表出する一面、雄大な氣宇を詠出する點にあると云つた。たとへば、その春の歌の中には、俊成の作に、

今日と云へばもろこしまでも行く春を都にのみと思ひけるかな

といふのがある。立春の心を、唐土にまで、わが國の春が行くとうたつてゐるのである。當時としては、雄大な心の表現と云はなければならない。

卷七の賀歌の卷頭は又　仁德天皇の「貢ぎ物ゆるされて國とめるを御覽じて」詠み給うたと云はれる御製、

高き屋にのぼりて見れば煙たつ民のかまどは賑ひにけり

である。この御仁慈の御心を、ここに示さうとするこの集の意義を看過してはならない。この集における上代的なものの共感、それから、この集によつてではあるが、世に多くひろまつた歌を多く收めてゐるところにも見られる一般的な心に觸れるものの強い點、例へば、卷八の哀傷歌の卷頭、

末の露もとの雫や世の中のおくれ先立つためしなるらん

のごとき僧正遍昭の歌などの既に、國民的な歌になつてゐる特色、かういふところに、この集の民族文學としての價値を見出だすことが出來るであらうが、特にそれらのすべてにわたつて　後鳥羽上皇の叡慮のほどを察し奉ることが出來る點に、この集の意義を知らなければならないと思ふ。直接に　天皇の撰し給うた勅撰集には、この集以前に、拾遺集があり、これは　花山法皇の

御撰と傳へられるが明かでなく、この集の後では、風雅集が　花園天皇の御撰で、しかも、この集は玉葉集と並んで、新古今集以後の、最もすぐれた撰集であると稱せられる勅撰集である。

十六、百人一首

百人一首を藤原定家の撰とするのは誤であらう。百人一首の中には、承久の變の結果、邊地へ遷幸あそばされた　後鳥羽天皇　順德天皇の、世情を痛憤あそばされた長れ多い御製を拜誦するが、定家は、むしろ鎌倉幕府の方に好意を示して、隱岐に遷幸あそばされた　後鳥羽天皇も、定家を疏んじ給うて居られた。百人一首が、もし定家の撰であるなら、かくのごとき御製を、その中に拜見することはないであらう。定家の息、爲家の夫人の父　宇都宮彌三郎賴綱、出家して蓮生と號した人がこれを撰し、書に一流を開いた定家の染筆を請うたので、定家が色紙形に淸書した。それを賴綱が、嵯峨中院の別莊の襖に仕立てたのが、即ち百人一首の元であると考へられてゐる。この考への方が妥當であらう。

百人一首は、大體時代の順に並んでゐる。この順序も、賴綱が撰んだ初から、かうした形になつてゐたと思ふ。それらの大體の消息は、定家が、自分の日記、明月記に記してゐるところで、わかるのである。

百人一首は　天智天皇　持統天皇の御製に始まつて　後鳥羽天皇　順德天皇の御製で終つてゐる。その　天智天皇の御製は、

秋の田の刈穗の廬の苫をあらみわが衣手は露に濡れつゝ

といふ、御仁慈の御意を拜する御歌である。もつともこの御製は　天智天皇の御製としては疑問の點が多々ある。併しそれにもかゝはらず、平安時代の人々はこれを　天智天皇の御製と信じ、更に百人一首によつて、この御製は、ひろく國民の間に拜誦せられて來た。農民の生活を、御自らの生活とあそばされて、その勞苦に大御心を注がせられ、深く愛憐の情を垂れさせ給うたこの御製を　天智天皇の御製と信じ、これを卷頭に置く事を敢へてした百人一首の撰者の心には、考へるところがあつたに違ひない。

天皇は、かく下々を思ひやらせ給ひ、下萬民又これに感激して、一層忠誠の情を厚くし、みづからのなりはひを勉め勵む。これが上古の簡素にして淳朴な國民の姿であつた。

かくして平和な國民の生活がそこにあつた。然るに、それから幾多の歳月を經、甚だしい世相の變化を見て、今や武家が權力を專らにし、皇室をすら左右し奉らうとする勢ひを示し始めた。

後鳥羽天皇は、

人も惜し人も恨めしあぢきなく世を思ふゆゑに物思ふ身は

と詠ませ給うて、臣下の忠誠を惜しませ給ふとゝもに、逆賊の暴臣に對する痛憤の御情を述べさせ給うたのである。

更に　順德天皇の御製にいたつては、

もゝしきや古き軒端のしのぶにもなほあまりある昔なりけり

とて、現在の皇威の衰へさせ給うたことを慨歎あそばされ、上古の君臣一致して、國家の隆昌であつた時代を、御心より追慕あそばされてゐるのである。

天皇天皇の御代は、大いに文化が興隆して、大寶令の原形である近江令もこの時に制定せられ、文學も亦甚だ盛んとなつた、その時代の　天皇の御製を始めに拜誦し、而して一卷の終りは、この　順德天皇の古代をしのばせ給うた御製で閉ぢてゐる。撰者の意中、又時事を諷し、世相を寓する意がなかつたとは云ひがたい。世の陵夷に移る時、常に思はれるは、物の根元であつた。復古の思想が、此所に宿される。復古は、いかなる時代にあつても、世の革新を志す者の、中心思想でなければならない。復古を考へない革新が、所謂「赤」の思想の烙印を押されるのは當然であると云ふべきである。據るべき標準を自己の人間意志、或は人間理性において、上古より一筋に續いてゐる公道――神ながらの道の御心を考へないからである。

百人一首の中に流れてゐる、この復古の思想を考へる時、これが民族文學としての意義の濃厚なことも、自然にわかつて來る。さうして、中世より現代にいたるまで、國民の口々に愛誦せられて、和歌の持つ日本的な詩情に觸れることが深切で、自然に、國民教育としての實をあげつゝあつたことも、甚だ當然な百人一首の本質であると云はなければならない。わが國の自然の美しさも、わが國民の人を懷ふ心の純眞さも、その中には、いろいろの場合、いろいろの方面からこれが詠み出されてゐる。詠み人も、大臣公卿あり、身分の低い者もあり、又、僧侶あり、隱士あ

り、女性も數々見出だされるといふやうに、さま〳〵の身の上の人が含まれてゐるのである。和歌の持つ種々の性質は、おほよそ此の中につくされてゐると云つてよい。

百人一首が世に弘まつたのは、江戸時代に、カルタといふ遊戯の形式を通じて、普く行はれたがためであらう。併し、さういふ遊戯に用ひられるまでもなく、百人一首は、既に、歌の歴史と本質とを巧に具體的に示した、その道の權威であることは、普く認められてゐたのである。されば こそ、これがカルタにも用ひられて、一層これを普及させることに成功した。又、習字の手本などにも書かれて國民教育の效果をいよ〳〵高めたのである。

たゞ百人一首の作者や作品の中には、今日の研究より見れば、なほ多少異論の差し挿まれるものもある。それにもかゝはらず、百人一首には百人一首としての一つの統一した情調が流れ、全體がまとまつた雰圍氣を漂はせてゐる。そこに、和歌といふ文藝を通じて、民族の傳統的な感情の強く正しく生きてゐることが認められるのである。就中、百人の中には、二十人までも女性の名を數へることが出來、しかも、それらの女性の作のいづれもが強く雄々しい純情をうたひ上げてゐる點で、婦人の持つ最も美しい本能の輝きにあふれてゐることは注意する必要がある。たとへば、右近の

忘らるる身をば思はずちかひてし人の命の惜しくもあるかな

のごとき純情、ひたむきな愛情に自己を犧牲にして悔いぬ精神は、今日もなほ、わが日本の婦人に傳統するものでなければならぬ。誰かこれを以て、おろかしい盲目無知のしわざとなし、婦人の理知的な自覺を勸める者ぞ。自覺は確に必要であるが、それによつて、女性の持つ抒情の精神が汚され、女性に特有の純粋の魂までが汚されては、百人一首の女性の歌も、遂に、過去の昔語りとなるに過ぎぬであらう。かくては、索莫たる人生が殘されるのみである。わが民族文學は、かくのごとき人生に對する救となるところに、その使命の一つが見出されなければならない。百人一首も亦、その貴き使命を今までにもなしとげ、今もなほ果しつゝあるのである。

十七、古今著聞集

物語るといふことは、わが國の文學の大きい特色である。上古の古事記を始め、國民の間に、口から耳へ、長く弘く話し傳へられ語り繼がれて來たところに、わが國の文學の民族性があつた。ここに、わが國の文學の說話性が、重要な本質として取り上げられて來るのである。特に、說話文學と稱する一續きの作品が、古代から近代にいたるまで出現して、最も低い民衆層の文學を傳へてゐることは、このわが文學における民族性の尊い遺產と云はなければならない。

鎌倉時代には、特にさうした說話文學が數々現れた。古今著聞集とか、宇治拾遺物語とか、十訓抄とか、古事談とか、その他の書が出てゐる。その中の、例へば宇治拾遺物語の話をとつて見れば、「鬼にこぶとられゝ事」には、瘤取爺の話が、古くから行はれてゐたことがわかるし、「雀報レ恩事」には、雀の恩返しの話、正直爺が幸福を得て、慾深爺の失敗する話の、長く語り傳へられて來たことが知られるのである。かうした童話の泉は、遠い古代に發して、片田舍の爐邊に座する人々の心をうるほしながら、今なほわが民族の間に流れてゐる。なつかしい魂の故鄕がそこに見出だされる。文學の源泉は、かくして、これらの說話文學の中に求めることが出來る。

今、人々は新しい國民文學を求めてゐるが、新しいものゝ創造は無からは出來ない。そこに傳統の探求が必要となつて來るし、就中、物の根源に遡つて、復古するといふことが重要な意義を持つやうになつて來るのである。說話文學は、民族文學の正しく强い流の源として、必ずや常に顧みられなければならないところである。

古今著聞集は、さういふ此の時代の說話文學の作品の中では、最も分量も多いものであるとともに、內容も亦、說話性と民族性との最も正しい渾融の樣相を持つものといふことが出來る。

この書は、神祇を卷頭において釋敎と續き、次に政道忠臣の項をおき、以下、公事、文學、和歌と次第して、飮食、草木、魚蟲、禽獸にいたるまで三十の項目に部類がわかれ、多數の說話を收載した、その神祇の部は「天地いまだわかれず渾沌鷄子のごとし」といふ、日本書紀によつた天地開闢の次章に始まつて、皇大神宮を齊ひ祀り奉る事蹟を述べ「およそわが朝は神國として、

大小の神祇部類、眷屬權化の道、感應あまねく通ずるものなり。いはゆるの神功皇后の三韓平らげ給ふにも、天神地祇ことゞく現れ給ひけるとぞ」と、わが國家の本質を說いてゐるのは、當時の民衆に國體の認識を與へることに、必ずやあづかつて力があつたに違ひない。

これのみでなく、政道忠臣の卷首にも「君は仁を以て臣を使ひ、臣は忠を以て君に奉ず。君は國を憂へ、臣は家を忘れて、君臣合體上下和睦する者なり」と、儒教の影響の見られる言說ではあるが、政道の根本たる意見を、總論的に掲げて、以下に、具體的な實例を物語り、和歌の部でも、「和歌は素盞嗚の古風よりおこりて久しく秋津洲の習俗たり」とその本質を簡明に記して、さまゞゝの物語に入つてゐるのである。國民教育の教科書として、これらの說話文學が持つ意義とその果した效果は甚だ大きいものがあつたと云はなければならない。

政道忠臣とか孝行恩愛とかいふ倫理、道德に關する物語や、和歌、管絃歌舞、能書、弓箭、馬藝、畫圖、蹴毬、さう云つた藝能、技術に關する物語、さては、恠異、變化、好色、武勇といふやうなものが、その內容をなしてゐるのだが、殊に、この最後の部分が、說話文學の性質としては、最も特色を備へてゐるものである。

常凡でない、非凡、異常を好むのが民衆の心であつた。しかもそこには、常に美しきもの、强きもの、正しきもの、すぐれたるものに對するあこがれがひそめられてゐた。非凡、異常なるものに接して、心のをののき、ときめきを禁ずることが出來ない、そこから文學が生れ出て來たのである。說話文學は、さうした文學の本質をあからさまに露出してゐる。

好色と武勇が隣り合せてゐることにも、人々は不思議を感じるであらう。しかも、この二つのものこそ、民族文學の本質として、いかに重要な要素であるかを知る人々にして、始めて、新しい國民文學の誕生の期待を可能とするのである。さうして、好色と武勇を兼ねるものは英雄であつた。非凡、異常を可能とするものも英雄であつた。英雄が民衆の心をとらへ、これを導いて行くのである。

好色の話の一例を掲げるなら、頭中將の忠季朝臣が督典侍（かうのすけ）といふ女に心をかけ、永年云ひよつたが靡かなかつた。或夜雪の甚だしく降るのに乘馬で參內したが、その途中の「道の有樣、雪の面白さなどをはじめより繪にかきて」かの女に贈つた。「督典侍取り見てあはれとや思ひけん、又繪にやめでけん、それよりあひにけり。」さうして、少將親平といふ男の子まで二人の間には生れ

たのである。かうした優雅にして、誠實にあふれたみやびやかさは、われ〳〵の先祖の精神の美しさを示すものでなければならない。逞しい力とみやびやかな美とが、みなぎりあふれてゐる魂こそ民族文學の本質をとらへてゐるものである。

古事談は、王道后宮、臣節、僧行、勇士、神社佛寺といふやうに分けられ、順序づけられてゐて、かうした分類にも、説話文學の本質を示すものがあると思ふが、その中には不敬にわたる話を含んでゐるのが大きい缺點である。十訓抄の十の教訓にいたつては、儒教思想の影響が強く見られるが、その始めの「可レ施二人惠一事」は　仁德天皇　天智天皇　一條天皇の御聖德や、聖德太子の十七條憲法などによつて卷首を開き、「列聖憐レ民給事」が最初に述べられてゐるのは、やはりかうした説話文學の國家に對する率直な精神の端的なひれと云はなければならない。

十八、蒙古襲來繪詞

文永、弘安兩度の元寇は、わが國史上、かつて見ざる一大危機であつた。彼は、明かに侵略の不敵な意圖をもつて襲ひ來つたのである。幕末における黑船の來航などとは、甚だ性質を異にするものがあつた。光輝あるわが國の歴史に醜い汚點が印せられるか否かの重大な時期に際會してゐた。神州を醜虜の蹂躙にゆだねるやうなことが、ゆめあつてはならないのである。

この元寇の役において、大いに働いた勇將、竹崎季長を中心として、この戰ひの顚末を繪卷物に描いたのが蒙古襲來繪詞である。原圖は今御物となつてゐる。現在殘る部分は、その中の殘闕一卷に過ぎず、原本の全部ではないから、完全な內容をうかゞひ知ることが出來ない點に甚だ遺憾なところがあるが、それにもかゝはらず、その繪と詞書とを合せ讀むとき、この國難に當つた當時の武人たちの烈々たる意氣に接する思ひがして、鮮明なる印象を植ゑつけられ、新たなる感銘を受けるのである。

繪卷の中の最も壯絶なる場面は、季長が單身敵陣に乘り込んで奮戰する箇所である。季長の乘馬は敵の矢に當つて傷口より血を吹きながら、勇躍して、敵中に走り入らうとしてゐる。蒙古兵は鐵炮を用ひ、又、槍を投げてゐる。わが國の軍隊が鐵炮に接したのは、多分此の時が始めてで

はないかと思ふが、すこぶる驚かされたことであらう。併しこれらの飛び道具にもひるまずに季長は稍頭をかたぶけ、眼は相手を見すゑて、馬上に手綱をしつかと握り、弓を振り上げながら、疾驅してゐるのである。それに對して、蒙古兵の顏には、明かに驚駭と恐怖の情とが描き出され逃げ出した背後に矢の命中してゐる者も二三人は描かれてゐる。颯爽たる季長の姿態には凛然とした氣迫の溢れるものがある。時に季長は年二十九の青年であつた。

この所を、詞書では、かう書いてゐる。「兒徒は、すそ原に陣を取りて、色々の旗を立て並べて、亂聲ひまなくしてひしめきあふ。季長走せ向ふを、藤源太祐光申す、味方は續き候ふらん、御待ち候ふて、證人を立てて御合戰候へと申すを、弓箭の道、先きをもて賞とす、たゞ驅けよとて、をめいて驅く。兒徒すそ原より鳥飼潟の鹽屋の松のもとに向け合せて合戰す。一番に旗指馬を射られて跳ね落さる。季長以下三騎痛手負ひ馬射られて跳ねし所に、肥前の國の御家人白石の六郎通泰後陣より大勢にてかけしに、蒙古の軍引き退きてすそ原にあがる。馬も射られずして異敵の中に驅け入り、通泰續かざりせば死ぬべかりし身なり。思の外に存命して互に證人に立つ」

文は素朴にして、しかも景は躍動してゐる。乘馬が矢に射られたのは、却つて季長に幸して、いたづらに戰死することなく、後日に功を重ねる機會を與へた。

以上は文永の役においての、季長の働きであつたが、弘安の役においては、二三の者と小船に乘じ敵船に乘り込んだのである。この船軍の場面も亦、前の陸戰の場面に對應して、頗る勇勁な筆致に富むのである。この時にも季長は機智をもつて先驅をしてゐる。即ち自分の乘船の出發が遲れたので、先にある船を、守護からの要用があると欺いて、漕ぎ戻させ、これに懇望して乘り移り、郎黨を後に置いて單身敵船に攻め寄せてゐるのである。その際わざと兜を着てゐなかつたので、脛當をはづして頭につけ、兜の代りにする。さうして云ふやうは、「命を惜しみ候ひて、し候と思し召さるまじく候ふ。敵船に乘り移り候ふまでと存じ候ふて、し候。船近づき候へば熊手にかけて生捕にし候ふと承はり候ふ。いけどられ候ふて異國へ渡り候はむ事、死にて候はむには劣るべく候。態手にかけられ候はば、草摺のはづれを斬りて給ひ候へ」と賴んでゐる。まことに季長は恥を知る武士であつた。かくて一番驅をして敵船に乘り移るのである。この海戰の箇所も亦繪卷の中の最も高潮緊迫した壯烈な場面を見得る。

この繪詞は、殘闕であるから、元寇の役に最も重要な意義を持つ神風に關する條が脱落してゐ

る。これについては、別に八幡蒙古記といふ書に、記すところが詳細であるが、たゞこの書においては、神威の靈驗を一層顯著にせんがために、蒙古が襲來した當時の邊境の驚駭、恐怖の情を誇張して描き、且又、わが軍の敗戰の狀を麗々しく報じてゐるのである。一人も後に殘る者なく逃げ失せてしまつたほどの、みじめな敗北の後に、神風の異變が起るのであるが、それに對してこの書は、「もし此の時、日本の軍兵一騎たりとも、ひかへたりせば、大菩薩の御戰と云はれずして、わが高名にて追ひ返せりども申しなさましを、一人もなく落ち隱れてのち、夜になりて、さばかりなる異賊どもの怖ぢ恐れて、或は沈み、或は逃げ歸りしは、偏に神軍の威德嚴重にして、不思議いよいよ顯然と現れ給ひにけりと拜まぬ人こそなかりけれ」と言譯を記してゐる。併し、かくのごとき慘憺たる敗戰を誇張して、書くところに、積極的な民族の力を認めることは、たうてい出來ないのである。

それにもかゝはらず、この書は元寇の役の二度に當たる神風の冥助、又、弘安の役における勇將、河野通有の奮戰の狀を描き出し、殊に、この役に近い頃の記錄と信じられるがゆゑに、なほ參考に加へる價値はある。併し、蒙古襲來繪詞の持つ本質的な價値には遙かに及ばないのである。河野通有と竹崎季長兩將の對面の圖も亦、蒙古襲來繪詞に描かれてゐる所である。

われらは、この歴史的記念像を今日になほ生きるわが國の姿と見ることが出來るからして、いなむしろ、今日において、一層その生まゝしい歴史の再現を眼前に認めてゐるからして、その文學としての價値をあらためて考へたいと思ふのである。更に神風の奇蹟をもつて、現實に働いてゐる國家的な生命の現れと信じ、これを架空の奇蹟としてのみを考へないところに、その意義が認められなければならない。いたづらに科學の皮相を追うて、遂に偉大な精神の力の中に、奇蹟の勝利を信じることが出來ない人間は、滅亡の刑罰が課せられるのみである。

十九、太平記

一

吉野時代の大亂は、實にわが國家に加へられた一大試練であつた。この大亂を通して、國家に

對する認識が著しく明確にせられた。戰亂の間に楠公のごとき忠誠の臣下が出でて、吉野の皇居を守つた。この楠公精神のごときも、戰亂によつて始めて赫々たる光輝を永世に輝かすことが出來たのであつて、明治維新の際に、志士を奮起せしめたのも、又、明治時代以後の外國との戰爭に當つても、常にこの楠公精神が勇士を感奮せしめたごとき、みな遙かな生命の流れを、吉野朝廷の源泉から得てゐるのである。不幸の歴史は、國家全體の歴史から云へば、却つて、幸ひでもあつた。不幸に際會し逆境に處し屈辱を經驗して、始めて不撓不屈の精神は養はれ、意氣は昂り志は盛んとなる。この意味では、鎌倉時代以後の幕府が政權を握つた歴史の中に、明治維新を經て、わが國が立ち上る精神力が胚胎せられてゐたのだとも解することが出來る。

併し、不幸はあくまでも不幸であつて、遂に忍從の堪へざるものあるを痛感させる。ましてや歴史の正統に立ち返らうとする行動を朝廷の側から武家に對して示し給うたのは當然の御決意でなければならない。承久の變、元弘の變と二度の大きい御處斷は、却つて朝廷の側の失敗に歸したところがあつて、歴史の上にかつて見ない汚點を印されるやうにもなつたのは痛嘆に堪へないことであるが、志士の興起が、眞實に國體の光を揭げるにいたつたのは、實に、これらの非常の時代が、次第に國民の自覺を促して來た結果である。

それゆゑに、武家の時代となつて、却つて、日本は神國であり　天照大神の御子孫が皇統を繼ぎます萬世一系の思想を、はつきりと示し始めたのである。平家物語にもそれが見られた。源平の亂から承久の變までの、急角度の轉變が行はれた治世を保ち給ふ　高倉天皇より　後堀河天皇まで七代の間、特に先の六代の　天皇の御事を、國家治亂の得失の上から、記し奉つた書が、六代勝事記であるが、その中にも、三上皇の遷幸を慨して「我が國はもとより神國也、人皇の位をつぐ、すでに　天照大神の皇孫也、何によりてか三帝一時に遠流のはぢある」と述べてゐるのは、やはりこの國家に對する認識から出た言である。

同樣に承久の變を取り扱つたものに承久記とか承久軍物語とか題する軍記物がある。その冒頭にも亦「それ我が朝は神國として天神七代地神五代と相續かせ給ひて、そののち神日本磐余彦尊（かむやまとはれひこのみこと）に御位をゆづり給ふ。これを人皇のはじめと申すなり」と書き出してゐるのは正しい國體の來由を記してゐるものといふべきであらう。

かやうに神國として、正統の皇位を繼承せられ、神代以來ゆるぎなき神聖なる御位をふまれた

對する認識が著しく明確にせられた。戰亂の間に楠公のごとき忠誠の臣下が出でて、吉野の皇居を守つた。この楠公精神のごときも、戰亂によつて始めて赫々たる光輝を永世に輝かすことが出來たのであつて、明治維新の際に、志士を奮起せしめたのも、又、明治時代以後の外國との戰爭に當つても、常にこの楠公精神が勇士を感奮せしめたごとき、みな遙かな生命の流れを、吉野朝廷の源泉から得てゐるのである。不幸の歴史は、國家全體の歴史から云へば、却つて、幸ひでもあつた。不幸に際會し逆境に處し屈辱を經驗して、始めて不撓不屈の精神は養はれ、意氣は昂り志は盛んとなる。この意味では、鎌倉時代以後の幕府が政權を握つた歴史の中に、明治維新を經て、わが國が立ち上る精神力が胚胎せられてゐたのだとも解することが出來る。

併し、不幸はあくまでも不幸であつて、遂に忍從の堪へざるものあるを痛感させる。ましてや歴史の正統に立ち返らうとする行動を朝廷の側から武家に對して示し給うたのは當然の御決意でなければならない。承久の變、元弘の變と二度の大きい御處斷は、却つて朝廷の側の失敗に歸したところがあつて、歴史の上にかつて見ない汚點を印されるやうにもなつたのは痛嘆に堪へないことであるが、志士の興起が、眞實に國體の光を揭げるにいたつたのは、實に、これらの非常の時代が、次第に國民の自覺を促して來た結果である。

それゆゑに、武家の時代となつて、却つて、日本は神國であり　天照大神の御子孫が皇統を繼ぎます萬世一系の思想を、はつきりと示し始めたのである。平家物語にもそれが見られた。源平の亂から承久の變までの、急角度の轉變が行はれた治世を保ち給ふ　高倉天皇より　後堀河天皇まで七代の間、特に先の六代の　天皇の御事を、國家治亂の得失の上から、記し奉つた書が、六代勝事記であるが、その中にも、三上皇の遷幸を慨して「我が國はもとより神國也、人皇の位をつぐ、すでに　天照大神の皇孫也、何によりてか三帝一時に遠流のはぢある」と述べてゐるのは、やはりこの國家に對する認識から出た言である。

同樣に承久の變を取り扱つたものに承久記とか承久軍物語とか題する軍記物がある。その冒頭にも亦「それ我が朝は神國として天神七代地神五代と相續かせ給ひて、そののち神日本磐余彦尊（かむやまといはれひこのみこと）に御位をゆづり給ふ。これを人皇のはじめと申すなり」と書き出してゐるのは正しい國體の來由を記してゐるものといふべきであらう。

かやうに神國として、正統の皇位を繼承せられ、神代以來ゆるぎなき神聖なる御位をふまれた

のに、現在の御有様は何といふことであらうか――かういふ慨嘆が、承久の變を顧みる時、これを筆にする人々の胸中には、湧然と涌き上つて來るのをとゞめる事が出來ない。いな、それは抑へようとしても抑へる事の出來ない國民感情の發露である。そこから自然に口をついて溢れ出た叫びが、即ち、以上のやうな記述となつて現れてゐる。

この同じ感情が、吉野時代の亂に際しても、爆發して、かの神皇正統記の「大日本は神國なり」といふ、力强い言葉となつたのである。それ故に、この國體觀念こそは、危機に際して、始めて衷心よりの痛切なる欲求となつて表現せられる。承久の變や元弘の變において、わが國が神國であることの烈々たる反省が起つたのは、國民の生命に貫通する意義を、それが持つてゐる。

併し、人々の求めたものは、やはり眞實の平和であつた。だがそのためには、最も大きい犠牲を必要とする。眞實の平和は、眞實の戰の後において、始めてもたらされるのである。戰はどうしても決行せられなければならない。さうしてその戰は、破邪顯正の戰、正義の軍でなければならない。承久の變も、元弘の變もかくして起つたのである。それ故に、それは一方では、平和のための戰であるといふ意義に徹するものがあつた。

戰のための戰を行ふ武家が政權を專らにする限りは、どうしても眞實の平和は得られない。國家が朝權に立ち直つて　天皇が大政を綜攬し給ふにいたり、始めて、眞實の平和の御代が再び現出するのである。吉野時代の戰は、この大義のために行はれた。

かくて人々は平和を愛し、太平無事を心から欲してゐる。　天皇の大御代のもとに、太平を謳歌することを、眞實に希望してゐる。そこに太平記が生れたのである。太平記の內容はすべてこれ戰亂の連續である。安定しない世狀の羅列である。それにもかゝはらず、この書は太平記とうたつてゐる。太平を謳歌したいのである。この正義のための戰ひが、血みどろになつて、死鬪を續けて行く時、始めて、平和への歩みが刻々に印されてゐるのである。太平記の內容に反したこの名が、むしろ、正しい我が國民の精神の在り方を示してゐると云はなければならない。戰は常に太平のために決行せられたのである。

二

「朝廷は年々に衰へ、武家は日々に盛んなり。これに因つて代々の聖主、遠くは承久の宸襟を休

めんがため、近くは朝議の陵廢を歎き思召して、東夷を亡さばやと、常に叡慮をめぐらされしかども、或は勢微にしてかなはず、或は時未だ到らずしてもだし給ひける處に、時政九代の後胤、前相模守平高時人道崇鑑が代に至りて、天地命を革(あらた)むべき危機こゝに顯れたり。」この北條高時は「行跡甚だ輕くして人の嘲を顧みず、政道正しからずして民の費を思はず、只日夜に逸遊を事として前烈を地下に辱かしめ、朝暮に奇物を翫びて傾廢を生前に致さんとす」といふ人物で、今後久しきにわたる大亂の禍源は實にこの一個の暗愚な將軍の中に胎まれてゐた。

太平記は、かやうな叙述を卷頭の章に書くことから始まつて、滔々たる興亡治亂の物語の糸口を開いてゐるのである。併し、太平記の中には「天地命を革む」(孟子)とか、「君雖レ不レ君、不可二臣以不二臣一」(孝經)とかいふ、支那の言葉の引かれてゐるごとく、一面には、さういふ考へ方の浸潤して來てゐることは、免れがたい事實であつて、この心から、至尊の御事に對しまつつても、とかくの言を差挿むところがあるのである。それにもかゝはらず、太平記に流れてゐる純粋の精神は、國家の治亂の歸趨を、明確に見定めるのに、最も大切なもの、國民の必ず見失つてはならないものを、しつかり握つてゐた。國家の運命が、この魂に觸れたとき、情熱の火が點じられて、焰々と燃えさかる炎のやうに、興亡安危の物語が、展開せられて行くのである。まことに太平記は「危機こゝに顯れたり」といふ、切迫した危機の感から、書き出だされた書であつた。そこに眞の歴史の精神が宿されてゐる。

「誠に天に受けたる聖主、地に奉ぜる明君なりと、其の德を稱し、其の化に誇らぬものはなし」き

後醍醐天皇にましました。「君遙かに天下の飢饉を聞召して、朕不德あらば、天予一人を罪すべし。黎民何の咎ありてか此の災にあへると、みづから帝德の天に脊ける事を歎き思召して、朝餐の供御を止められて、飢人窮民の施行に引かれけるこそ有難」くも尊き　後醍醐天皇にましました。此の大御代のもとに、鎌倉の北條氏九代の勢威を擅まゝにした武家政治に向つて、親政の輝く旗幟が高く高く掲げられたのである。この正義の旗じるしに對して太平記では、謀叛といふ語を用ひてゐるのは穩當を缺くが、これは當時の慣例に從つた用語である。(なほ「帝德の天に脊ける事」などといふ表現も不可であるが今原書のまゝにしておく。)

最初に、この企てに參加した人々の中に日野資朝や藏人右少辨俊基がゐた。併し、この最初の企圖は、一味の土岐頼貞の意志弱く、あへなく裏切つたことによつて、畫餅に歸し、資朝や俊基

は捕へられて、鎌倉に護送せられた。それに對して　天皇は直々に御告文を鎌倉に下し給うたので、鎌倉方においても、恐懼して、勅書を粗略に披見し奉らぬやう、高時を諫めた者もあつたが、暴戾不遜なる高時は「何か苦しかるべきとて、齋藤太郎佐衞門利行に讀み進らさせられけるに、叡心不レ僞處、任二天照覽一」と遊ばされたる處を讀みける時に、利行俄に目眩き衂垂りければ、讀み果てずして退出す。其の日より喉の下に惡瘡出でゝ、七日の中に血を吐きて死にけり。時澆季に及んで道塗炭に落ちぬといへども、君臣上下の禮違ふ時は、さすがに佛神の罰もありけりと、是を聞きける人ごとに懼ぢ恐れぬはなかりけり」といふ事件も起つたのである。

それ故、鎌倉方でも、深く省慮をめぐらす人物は、政治の樞機を知つて誤らなかつた。前に御告文披見のことで高時を諫めた二階堂出羽入道道蘊は、鎌倉方の、主上を遠國に遷し奉らうとする大逆の計に反對して「武家權を執りて已に百六十餘年、威四海に及び、運累葉を輝かすこと更に他事なし。唯上一人を仰ぎ奉りて忠貞に私なく、下百姓を撫でて仁政に施しある故なり……御謀叛の事君たとひ思召し立つとも、武威盛んならん程は與し申す者あるべからず。是につきても、武家彌々愼しみて、勅命に應ぜば、君もなどか思召し直す事なからん。かくて國家の泰平武運の長久にて候はん」と主張してゐるのであるが、これは遂に暴臣らの受け入れる所とならず、大勢の赴く所、亂世の勃發より他にはなかつた。實に二階堂道蘊の如きは記すに足る志を持つ人物であつた。

かくて、諜報の張本と睨まれた俊基は鎌倉で、又、佐渡に流された日野資朝も同地で共に斬に處せられた。この俊基の關東に護送せられる箇所が、優雅な七五調の美しい表現で書かれ、朗々誦すべき道行文となつてゐる。この物語の中でも、特に名高い文章である。「落花の雪に踏み迷ふ、片野の春の櫻狩、紅葉の錦を着て歸る、嵐の山の秋の暮、一夜を明かすほどだにも、旅寢となれば物憂きに、恩愛の契淺からぬ、わが故郷の妻子をば、行方も知らず思ひ置き、年久しくも住み馴れし、九重の帝都をば、今を限りと顧みて、思はぬ旅に出で給ふ、心の中ぞ哀れなる」に始まつて、「足柄山の峠より、大磯小磯見下して、袖にも波はこゆるぎの、急ぐとしもはなけれども、日數つもれば七月二十六日の暮程に、鎌倉にこそ着き給ひけれ」に到るまで、一篇の長詩である。

佐渡で資朝が誅され、その子阿新が、父の後を慕つてはる〳〵佐渡に下り、父の遺骨を得て、

父を斬つた本間三郎を殺し、追手を避けて佐渡を脱出するまでの哀切の情と曲折波瀾に富んだ物語は、又この書の中の最も有名な一段であるが、これらの人々によつて捲き起された渦巻が、次第に擴大して重疊たる一世の變亂を繰り廣げて行くのである。

三

楠木正成の出現は、太平記の中の最も大きい感動を與へる箇所である。太平記が烈々たる不滅の火の點じられる所以も、正成の輝かしい精神に基いてゐる。楠公父子一族によつて、太平記は不朽の生命を宿されたのであり、楠公も亦太平記によつて、長くその忠誠が後昆に傳へられ、國民の精神に銘記せられたのである。

正成が　後醍醐天皇の御心にとゞまつたのは實に一つの奇蹟であつた。　天皇の御夢の中に、楠公の誠心が語られてゐるのである。これは並々ならぬ出會の秘密を語るものと云はなければならない。このおごそかな秘密の源をたどるとき、始めて、君臣の信義に關して、その眞實の意義に觸れることが出來るのである。われ〳〵は、この尊い御夢をおろそかに見過ごすことは出來ない。

夢の告を信じ給うて　天皇が正成を召されたとき、正成は「弓矢取る身の面目、何事か是に過ぐべきと思ひければ、是非の思案にも及ばず、先づ笠置へ」參つたのであつた。　天皇の御喜びの情、正成の至誠、これこそ、わが國の歴史に、比類のない感激の場面であつた。國史をゆり動かす魂の會同であつた。　天皇の有難き御下問に應答申し上げて、「東夷近日の大逆、唯天の譴を招き候上は、衰亂の弊に乘つて天誅を致されんに、何の仔細が候ふべき。……合戰の習にて候へば、一旦の勝負をば必ずしも御覽ぜらるべからず。正成一人未だ生きてありと聞召され候はば、聖運遂に開かるべしと思召され候へ」と言上した。

肺腑をついて出でた火のごとき言である。回天の業に生命を投じるものの、滿々たる自信に滿ちた力强い言である。正成にして始めて、云ひ得る言である。併し又、國民の一人一人に覺悟を要請する言でもある。正成は、この時、武略と智謀とをもつて、東夷に對することを言明申し上げた。その言のごとく、笠置に赤坂に、或は又、千劔破（ちはや）に、謀略をもつて散々に敵を惱ましたのである。正成は軍士としては、古今に絶した智謀の將である。しかも　天皇に對しまつるとき、た

だ丹心を吐露した一個の臣民たるに過ぎない。智謀の働きは、この臣民の感と一致するときに始めて、意義ある效果を持つ。私情と私利とのもとに、謀略はめぐらされるべきではない。そこに公と私との差別が明かである。智謀を有しない愚人は、國家の有時に役に立たないが、智謀に捉はれた策士は、更に一層危險である。正成は、權謀術數の眞實の意義を敎へたのである。

千劔破の戰で、敵が濠に橋をかけ、押し入らうとするとき、かねて用意しておいた松明を橋に投げかけ、油を瀧のやうに注ぎかけて、これを燒き、「なまじひに渡りかゝりたる兵ども、前へ進まんとすれば、猛火盛んに燃えて身を焦す。歸らんとすれば後陣の大勢、前の難儀をも云はず支へたり。側へ飛び下りんとすれば、谷深く嚴聳えて肝を冷やし、如何せんと身を揉みて押しあふほどに、橋桁中より燃え折れて、谷底へどうと落ちければ、數十の兵同時に猛火の中へ落ち重なつて一人も殘らず燒け死にけり」と云ふ、謀略で敵を惱ました話は有名であるが、その敵の中には、伯父甥で雙六の勝負を爭ひ、口論して刺し違へて死んだものがあつた。ところが、これを見た家來たちは、何に血迷つたのか、意趣意恨もないのに刺し違へて死ぬるもの、片時の間に二百餘人を出した。「城の中より是を見て、十善の君に敵をなし奉る天罰によつて、自滅する人々の有樣を見よとぞ笑ひける。」まことにこの淺ましい所行は、天刑といふより他はない、楠木勢の人々の嘲笑は、これ冥々の神の御心を、言葉に發したものであつた。

かやうな、朝家の軍の智謀と、逆賊の自滅とを對比することによつて、順逆の理を明かにし、大義の向ふ所を示したのが、太平記の精で神あつた。

併し、眞の楠公精神は、かやうにして、一度は回天の志を達した成功の時代におけるよりも、むしろ逆境において强く正しく發揮せられるものである。旣に、始めて笠置に召されたとき、屹然として「正成一人未だ生きてありと聞召され候はば、聖運遂に開かるべしと思召され候へ」と奏上したのは、毅然たる信念の動かすべからざるものが、滲たる假の皇居の中にまします主上を仰ぎたてまつる楠公の胸中に涌然として涌き上るものがあつたからである。

世は再び足利高氏の反逆によつて亂れた。再度正成の忠誠が、天下に呼號することを必要としたのである。しかも轉戰の間、時として官軍に有利にも見えたが、結局狀勢は日に〳〵非であつた。さうして、正成は、遂に死を決して、湊河に向ふ時を迎へたのである。併し、この時にこそ忠烈の精神は、最も强い緊張をもつて高く鳴り響く瞬間を待つてゐたのであつた。

櫻井の宿において、十一歳の正行に、河内に歸る事を命じた際の教訓の言葉、湊河において、弟正季と刺し違へて死ぬるときの最後の言葉、それらはすべて、千載の後に、懦夫を立たしめ國難に赴くの慨あらしめるものである。最後の座に上つた時、正季に「抑々最期の一念に依りて善惡の生を引くと云へり。九界の間に、何が御邊の願なる」と尋ねると、正季はから〳〵と笑つて、「七生までもたゞ同じ人間に生れて朝敵を滅ぼさばやとこそ存じ候へ」と答へた。

これを聞いた正成は莞爾として「罪業深き惡念なれども、我もかやうに思ふなり。いささらば同じく生を變へて、此の本懐を達せん」と誓ひ、その悲壯な一生を終つたのである。當代の忠臣は、決して正成一人ではない。併し、いづれも中道で節を屈し、操を變じて、終を全うしたものは少いとき、「智仁勇の三德を兼ね、死を善道に守るは、古より今に至るまで、正成ほどの者は」未だなかつたのである。かういふ太平記の讃美は、正成の英魂を、永世に傳へる弔辭として、國民の心魂に徹する力を持つて迫るものがある。

正成は死んでも、その生命は死なない。「正成一人未だ生きてありと聞召され候はば」と奏上した正成の精神は、「七生までも只同じ人間に生れて」と誓つた正季の心に同じて、今日も生きてゐることを忘れてはならない。楠公の精神は、永久に日本の運命を開いてゆくのである。「聖運遐に開かるべし。——」

四

湊川に向つた正成が、櫻井の宿から、十一歳の嫡子正行を、思ふやうありと云つて、河内へ歸した時に、云ひ殘した教は、正行に對する遺言であるとともに、廣く國民に訴へた、永久の遺訓でもある。「一旦の身命を助からんために、多年の忠烈を失ひて、降人に出づる事あるべからず。一族若黨の一人の死に殘りてあらん程は、金剛山の邊に引籠りて、敵寄せ來たらば、命を養由が矢さきに懸けて〻義を紀信が忠に比すべし。是ぞ汝が第一の孝行ならんずる」と、敵の時世になつても、絶對に敵を許すことなく、一死を以てこれに當るべきを、血涙とともに覺したのである。

武士が主君に忠勤をつくすことは、當然の責務であつた。それは武士道といふ道德の根本觀念でもあつた。併し、楠公の場合は、それとは遙かに懸絶した心の烈しさがある。主君の御爲めといふだけでなく、一天萬乘の至尊と、わが國家の御爲めに、生命を捧げての大義の戰である。そこ